

上総国分寺台遺跡調査報告VI

(財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第78集)

千葉県 市原市

坊作遺跡

(第1分冊 本文編)

海上厨

2002

財団法人 市原市文化財センター



南側上空から見た上総国分尼寺跡と坊作遺跡（1972年撮影 左下の建物は市原市役所）



北側上空から見た坊作遺跡（1976年撮影）



奈良三彩小壺（155号住居跡出土）



置きカマド正面（231号住居跡出土）



同 横から

序 文

養老川下流域の右岸に広がる台地は、奈良時代に上総国分寺や国分尼寺が建立された場所として、現在“国分寺台”の名で親しまれています。市庁舎や市民会館の周りに閑静な住宅街の広がるこの一帯に土地区画整理事業が計画されたのは、昭和45年のことです。昭和47年から昭和63年までの16年間にわたって行われた発掘調査は、43遺跡を数えます。

調査の結果、旧石器時代から中世までの各時代にわたる遺構や遺物が数多く発見されています。中でも、昭和63年に公開された「王賜」銘鉄剣は、我が国で書かれた最古の文字資料として、全国的にも話題を集めたところ です。

また、調査の成果をもとに国の史跡に指定された上総国分尼寺跡には、回廊ならびに中門も復元され、付属施設の展示館とともに、市民の憩いの場や児童生徒などの歴史教育の場として広く活用されています。

今回報告する「坊作遺跡」は、上総国分尼寺跡の北側に隣接して広がる遺跡です。弥生時代と奈良・平安時代の建物跡を中心に、遺跡が発見されています。

特に、奈良時代以降では、上総国分尼寺の建設や大修理に携わった人々の足跡が見られ、市原市にとってはもとより、古代上総中心地の様子を知るために、大変多くの貴重な手がかりを得ることができました。

本書は、これらの成果をまとめたものです。国分寺台遺跡群の報告書としては8遺跡目にあたります。この本が、学術的な資料としてはもとより、市民の方々に広く活用され、これを通して市原市の古代史解明に役立っていくことを願ってやみません。

また、遺跡の発掘調査ならびに報告書刊行にあたって、多大なご尽力をいただきました文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁文化課、旧市原市国分寺台土地区画整理組合、旧上総国分寺台遺跡調査団および（財）市原市文化財センターをはじめとする関係各位に対しまして、深く感謝の意を表します。

結びに、本書の執筆を担当した市原市埋蔵文化財調査センター副主査小出紳夫君は、昨年10月、本稿脱稿後間もなく急逝されました。ここに深く哀悼の意を表します。

平成14年3月

市原市教育委員会

教育長 竹 下 徳 永

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市山田橋679—1地先(現国分寺台中央5丁目ほか)に所在した坊作遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は市原市教育委員会が国庫補助事業として計画し、上総国分寺台遺跡調査団が昭和50・51年にわたって実施したものである。整理事業は、文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の委託により、財団法人市原市文化財センターが実施した。なお、報告書刊行については市原市教育委員会が行った。
3. 発掘調査は滝口宏調査団長の指導のもとに須田勉・鷹野光行・米田耕之助・多宇邦雄が担当した。期間は昭和50年4月から昭和52年3月までの2カ年にわたっている。調査面積は24,660m²である。
4. 整理作業は小出紳夫が担当した。期間は平成10年10月から平成13年8月までの間行った。
5. 本書の執筆は小出紳夫、蜂屋孝之、忍澤成視が行った。なお、分担は第II章第1節、第III章第1節を蜂屋が、第II章第4節を忍澤が執筆し、これ以外は小出が執筆した。
6. 遺跡の方位は、発掘当時任意方向の座標で組んでいたため、隣接の上総国分尼寺跡との整合性を図る必要から、尼寺跡の発掘調査で使用している公共座標に変換して新たに座標を組み直した。なお遺構の北は公共座標の北を表している。

また、遺跡の水準については、発掘当時基準となる何らかの標高があったと思われるが、図面に記載されている基準高となる番号の数値が不明で検討し得る資料が確認できないことから、遺構に使用している高さについては、相対的な高さを表している。
7. 本書の図版に使用した図のうち、陥穴平面図の一部、縄文土器実測図の一部、弥生土器実測図の一部、奈良・平安時代の土器実測図の一部、金属製品のうち鉄鏃実測図については、それぞれ当時整理作業を進められていた鷹野光行氏(現お茶の水女子大学文学部教授)、新田栄治氏(現鹿児島大学法文学部教授)、須田勉氏(現国士舘大学文学部教授)、田中新史氏(現聖徳大学文学部教授)が実測されたものを使用させていただいた。なお、発掘から25年も経ているため遺物が散逸、混乱しているものもあり、また行方不明の遺物が何点か見受けられた。遺物が行方不明であっても遺物実測図があるものについては、そのまま掲載している。
8. 本書に掲載した土器等のうち、灰釉陶器については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の坂野和信氏に御教示を受けた。
9. 本書に使用した遺構の縮尺は、竪穴住居跡1/80、同カマド1/40、掘立柱建物跡1/80および1/100、炉穴・土坑1/60、陥穴1/40とした。また、遺物については土器実測図・拓本1/3、瓦実測図・拓本1/4、石製品・土製品・金属製品1/2で基本的に統一している。
10. 本書を作成するにあたり、次の方々の協力、助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
宮本敬一 倉田義弘 大村 直 高橋康男 山路直充

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	3
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	4
第3節 調査の方法	4
第4節 調査概要	7

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物	37
(1) 炉穴	37
(2) 陥穴	47
(3) 包含層の遺物	68
第2節 弥生時代の遺構と遺物	82
(1) 竪穴住居跡	82
第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物	98
(1) 竪穴住居跡	98
(2) 掘立柱建物跡および鍛冶遺構ほか	173
第4節 住居内および土坑内出土の貝の概要	185
(1) 貝の分布状況	185
(2) 貝層サンプルの分析	186
第5節 その他の遺構	215
(1) 坊作1号塚および240号土壇	215
(2) 土坑	215

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 縄文時代の遺構と遺物	221
第2節 弥生時代の遺構と遺物	222
(1) 遺物から見た様相	222
(2) 遺構から見た様相	224
(3) まとめ	228
第3節 奈良・平安時代の集落	231
(1) 坊作遺跡における土器の変遷	231
(2) 集落の構成と時期的変遷	263
(3) 土器・瓦における文字資料	292
(4) 出土の金属製品および関連遺構・遺物について	302
(5) 出土の瓦について	310
(6) 上総国分尼寺との関係について	318

第Ⅳ章 おわりに

附 章 遺物観察表

附 図 坊作遺跡全体図

挿 図 目 次

第1図	坊作遺跡の位置(1).....	3	第34図	陥穴(9).....	61
第2図	国分寺台遺跡群.....	5	第35図	陥穴(10).....	62
第3図	坊作遺跡の位置(2).....	6	第36図	陥穴(11).....	63
第4図	坊作遺跡グリッド図および部分図 (1/250)区割.....	18	第37図	陥穴(12).....	64
第5図	部分図1(1/250).....	19・20	第38図	陥穴(13).....	65
第6図	部分図2(1/250).....	21・22	第39図	陥穴(14).....	66
第7図	部分図3(1/250).....	23・24	第40図	陥穴(15).....	67
第8図	部分図4(1/250).....	25・26	第41図	陥穴(16).....	68
第9図	部分図5(1/250).....	27・28	第42図	土器片円盤・土器片錘.....	68
第10図	部分図6(1/250).....	29・30	第43図	縄文土器(1～52).....	70
第11図	部分図7(1/250).....	31・32	第44図	縄文土器(53～106).....	72
第12図	部分図8(1/250).....	33・34	第45図	縄文土器(107～152).....	74
第13図	炉穴群位置図.....	39	第46図	縄文土器(153～186).....	75
第14図	146号・147号炉穴.....	40	第47図	縄文土器(187～203).....	76
第15図	236号炉穴.....	41	第48図	縄文土器(204～247).....	77
第16図	237号・238号炉穴.....	42	第49図	縄文土器(248～260).....	78
第17図	241号・242号炉穴.....	43	第50図	縄文土器(261～283).....	80
第18図	243号・244号・245号・256号・257号炉穴.....	44	第51図	縄文土器(284～312).....	81
第19図	250号炉穴.....	45	第52図	貝の分布状況.....	187・188
第20図	250号炉穴遺物.....	46	第53図	貝ブロック土坑出土遺物.....	189
第21図	陥穴形態模式図.....	47	第54図	時期別貝種組成.....	198
第22図	陥穴の形態別割合.....	48	第55図	A～G群貝種組成.....	199
第23図	陥穴の底面規模.....	48	第56図	遺構別貝種組成(1).....	200
第24図	陥穴主軸方位.....	48	第57図	遺構別貝種組成(2).....	201
第25図	炉穴および陥穴分布図.....	49	第58図	遺構別貝種組成(3).....	202
第26図	陥穴(1).....	53	第59図	遺構別貝種組成(4).....	203
第27図	陥穴(2).....	54	第60図	遺構別貝種組成(5).....	204
第28図	陥穴(3).....	55	第61図	遺構別貝種組成(6).....	205
第29図	陥穴(4).....	56	第62図	遺構別貝種組成(7).....	206
第30図	陥穴(5).....	57	第63図	遺構別貝種組成(8).....	207
第31図	陥穴(6).....	58	第64図	遺構別貝種組成(9).....	208
第32図	陥穴(7).....	59	第65図	貝の殻高分布(1).....	209
第33図	陥穴(8).....	60	第66図	貝の殻高分布(2).....	210
			第67図	貝の殻高分布(3).....	211

第68図	貝の殻高分布(4) ……………	212	第99図	奈良・平安期住居跡分析グラフ(2) ……	271
第69図	貝の殻高分布(5) ……………	213	第100図	掘立柱建物跡の位置 ……………	273
第70図	貝の殻高分布(6) ……………	214	第101図	掘立柱建物跡分析グラフ ……………	273
第71図	坊作1号塚および240号土墳 ……………	216	第102図	I区の掘立柱建物跡 ……………	277・278
第72図	64号・137号・138号・247号 ・308号土坑 ……………	217	第103図	II区の掘立柱建物跡 ……………	279・280
第73図	弥生期住居跡分布図 ……………	226	第104図	III区の掘立柱建物跡 ……………	281・282
第74図	主軸方位による分布図 ……………	226	第105図	II区における建物の変遷 ……………	285
第75図	弥生期住居跡分析グラフ ……………	227	第106図	III区における建物の変遷 ……………	286
第76図	土器類の分析グラフ(1) ……………	241	第107図	I—a期の遺構 ……………	289
第77図	土器類の分析グラフ(2) ……………	242	第108図	I—b期の遺構 ……………	289
第78図	I—a期 土器の様相(1) ……………	243	第109図	II期の遺構 ……………	290
第79図	I—a期 土器の様相(2) ……………	244	第110図	III期の遺構 ……………	290
第80図	I—b期 土器の様相(1) ……………	245	第111図	IV期の遺構 ……………	291
第81図	I—b期 土器の様相(2) ……………	246	第112図	V期の遺構 ……………	291
第82図	I—b期 土器の様相(3) ……………	247	第113図	VI期の遺構 ……………	292
第83図	II期 土器の様相(1) ……………	248	第114図	VII期の遺構 ……………	292
第84図	II期 土器の様相(2) ……………	249	第115図	文字資料出土住居跡(1) ……………	297
第85図	II期 土器の様相(3) ……………	250	第116図	文字資料出土住居跡(2) ……………	297
第86図	III期 土器の様相(1) ……………	251	第117図	墨書土器集成(1) ……………	298
第87図	III期 土器の様相(2) ……………	252	第118図	墨書土器集成(2) ……………	299
第88図	IV期 土器の様相(1) ……………	253	第119図	墨書土器集成(3) ……………	300
第89図	IV期 土器の様相(2) ……………	254	第120図	線刻土器集成 ……………	301
第90図	V期 土器の様相(1) ……………	255	第121図	線刻・ヘラ描き土器等集成 ……………	302
第91図	V期 土器の様相(2) ……………	256	第122図	金属製品の分析グラフ(1) ……………	309
第92図	V期 土器の様相(3) ……………	257	第123図	金属製品の分析グラフ(2) ……………	310
第93図	V期 土器の様相(4) ……………	258	第124図	瓦の分析グラフ(1) ……………	316
第94図	VI期 土器の様相(1) ……………	259	第125図	瓦の分析グラフ(2) ……………	317
第95図	VI期 土器の様相(2) ……………	260	第126図	瓦の分析グラフ(3) ……………	318
第96図	VII期 土器の様相(1) ……………	261	第127図	尼坊の変遷図 ……………	320
第97図	VII期 土器の様相(2) ……………	262	第128図	坊作遺跡と上総国分尼寺 ……………	322
第98図	奈良・平安期住居跡分析グラフ(1) ……	270	第129図	上総・安房国の郡名 ……………	323

挿表目次

第1表	遺構番号表……………	8	第12表	掘立柱建物跡等一覧表……………	275・276
第2表	陥穴一覧表……………	51	第13表	掘立柱建物跡の変遷……………	287
第3表	貝類基礎データ集計表……………	190	第14表	出土墨書・線刻土器一覧表……………	293
第4表	遺構別貝種組成集計表(群別集計) ……………	191・192	第15表	出土金属製品一覧表……………	303
第5表	貝層サンプル中検出 節足動物・軟体動物 種名一覧……………	193	第16表	遺構別瓦集計表……………	312
第6表	フジツボ検出数一覧……………	194	第17表	弥生時代遺構出土遺物観察表……………	336
第7表	微少貝検出数一覧……………	196	第18表	奈良・平安時代遺構出土遺物観察表……………	345
第8表	ウミニナが多く検出されたサンプル での殻の状態と点数……………	197	第19表	遺構外出土遺物観察表……………	436
第9表	弥生時代住居跡一覧表……………	223	第20表	丸瓦・平瓦・軒瓦等観察表……………	437
第10表	坊作遺跡における主要土器類の消長……………	240	第21表	金属製品観察表……………	460
第11表	奈良・平安期住居跡一覧表……………	266	第22表	砥石観察表……………	464
			第23表	石製品観察表……………	466
			第24表	土製品観察表……………	467
			第25表	土錘観察表……………	468

巻頭図版

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| (1) 南側上空から見た上総国分尼寺跡と坊作遺跡 | (3) 奈良三彩小壺(155号住居跡出土) |
| (2) 北側上空から見た坊作遺跡 | (4) 置きカマド(231号住居跡出土) |

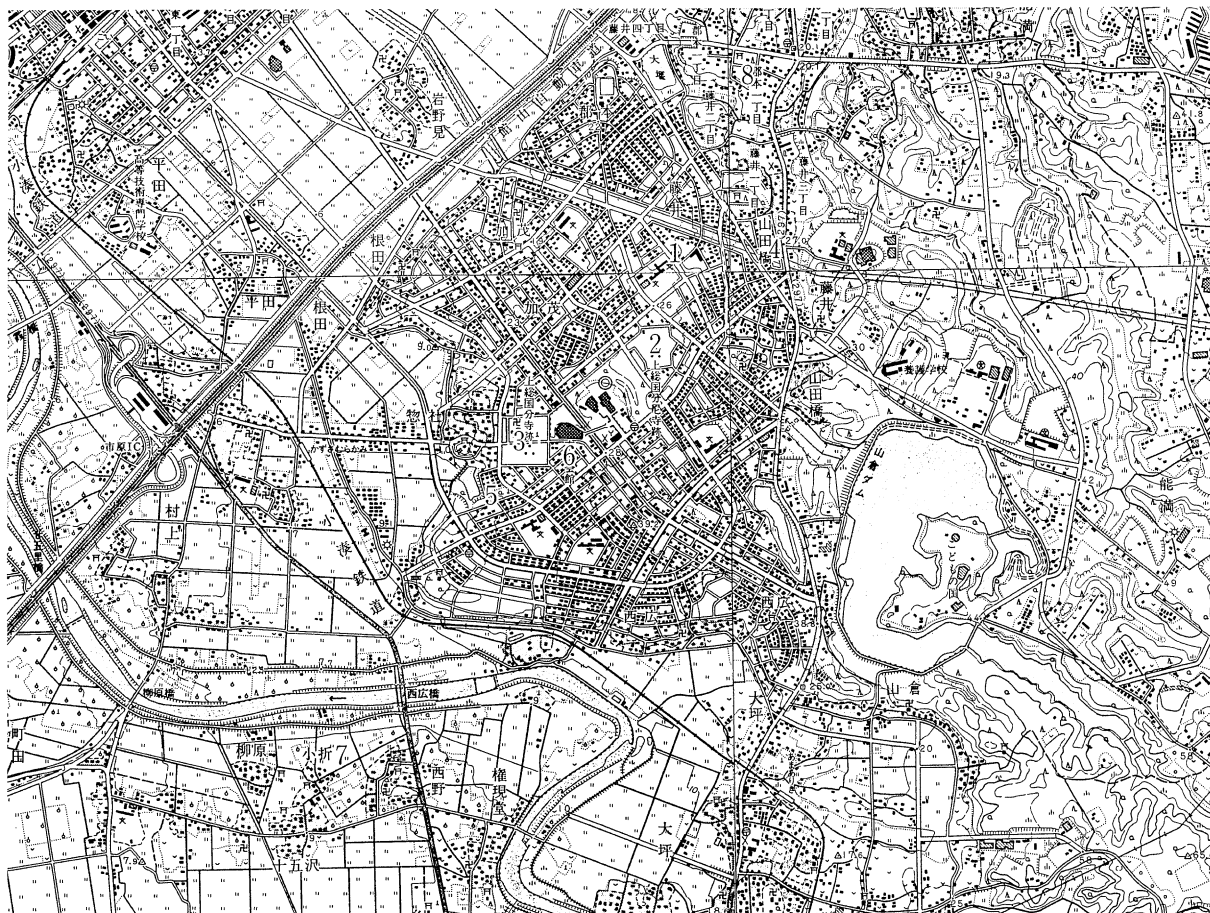
第 I 章 はじめに

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

昭和40年前半の高度成長時代に伴い、市原市は東京に比較的近いことから首都圏のベッドタウンとして、大規模宅地造成が行われるようになった。こうした中で、現市庁舎のある国分寺台地区約380ヘクタールを区画整理し、優良宅地化しようという計画が持ち上がった。この地域は、奈良時代に上総国分寺・尼寺が置かれたところでもあり、また、西広貝塚、祇園原貝塚など著名な遺跡が多く所在する地域でもあったことから、その遺跡の保護と開発をどのような形で調整を図るのかが検討された。検討の結果、国分寺・尼寺等の部分は保存することに決まり、それ以外の部分については、記録保存と言う形の発掘調査に至った。昭和46年12月に発掘調査を実施する組織として市原市国分寺台埋蔵文化財調査会が作られた。実際の調査を担当する機関として調査会のなかに、早稲田大学滝口宏教授を団長とする上総国分寺台遺跡調査団が結成され、実施する運びとなった。

国分寺台の発掘調査は、当初、昭和47～49年の3カ年で実施する計画で発掘に入ったが、調査の進捗に伴い、予想を遙かに超える遺跡の発見により調査面積が増大し、その計画が大幅に変更されていった。結果的には昭和63



- | | | | |
|---------|-----------|-----------|-----------|
| 1 坊作遺跡 | 2 上総国分尼寺跡 | 3 上総国分僧寺跡 | 4 稻荷台遺跡 |
| 5 神門5号墳 | 6 荒久遺跡 | 7 海上郡衙推定地 | 8 市原郡衙推定地 |

第1図 坊作遺跡の位置(1)

年までの17年にわたる長期の調査となり、上総国分僧・尼寺跡、貝塚、集落跡、古墳など43遺跡、537,270㎡の発掘となった。一方、現場での発掘作業が優先されたことから整理作業はほとんど進捗しなかった。その後、整理報告書刊行の費用負担の問題や、また市域内の開発に伴う発掘調査の増大などから、長く国分寺台整理作業は進展をせずに至った。このような状況のなかで、平成7年に市原市と市原市国分寺台区画整理組合との協議が持たれ、費用負担の問題等が解決されたことから、整理報告書刊行作業が再開されることになった。

今回報告する坊作遺跡は、当初の計画を大幅に見直した初期の段階の調査で、昭和50年4月から昭和52年3月までの2カ年にわたって行った発掘である。当時の埋蔵文化財の置かれた状況では、開発側の市原市国分寺台整理組合との交渉も難航を重ねたことと思われる。2カ年で24,660㎡という発掘を考えても、かなり厳しい状況に置かれていたことが推察される。今回整理にあたって、坊作遺跡の発掘は現在の調査精度と比べても、それほど変わらないことを改めて実感した次第である。

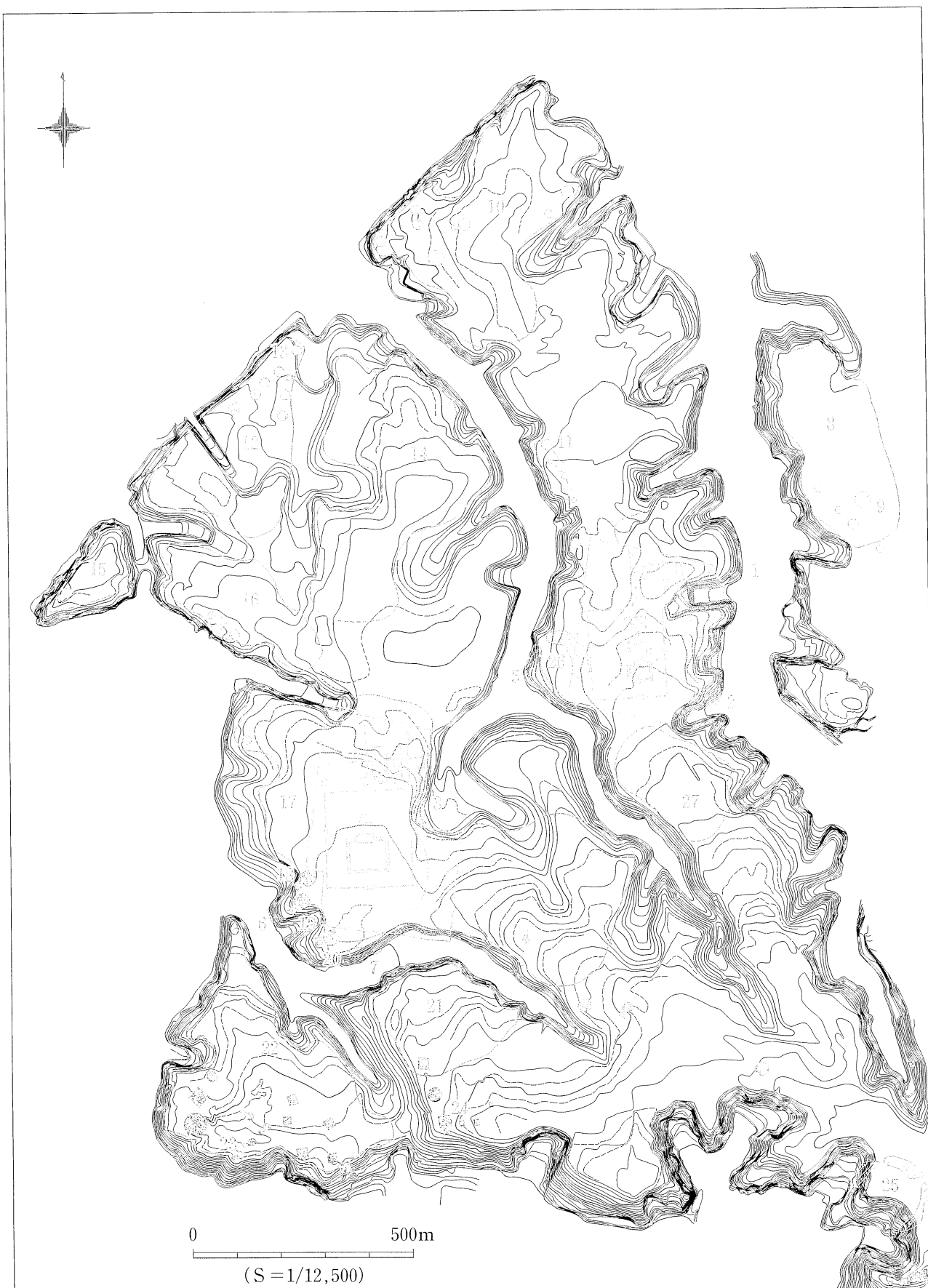
第2節 遺跡の位置と歴史的環境

坊作遺跡は、市原市の北部を流れる村田川と南部を縦貫する養老川とに挟まれた「市原台地」と呼ばれた台地南側部分、通称「国分寺台」と呼ばれている部分に位置する(第1図)。この台地の南側は養老川下流域平野となっているが、直接には東京湾に流れ込む小河川によって形成された小支谷によって、さらに枝分かれした幾筋かの台地で形成されている。坊作遺跡は、このような細長い舌状台地の標高27m前後の部分に営まれている。遺跡は、縄文時代早期の炉穴、および陥穴、弥生時代後期の集落跡、奈良・平安時代の集落跡など各時代を含む複合遺跡である。隣接の南側には上総国分尼寺跡が所在するが、特に奈良・平安時代集落については、上総国分尼寺の建立を契機に意図的に配置され、営まれた集落として認識されている。上総国分尼寺の所在する場所は、台地の最も広がった部分の土地を効率よく利用して造られているため、坊作遺跡は、尼寺に土地利用を規制された結果、集落の広がりとしては、舌状台地の小尾根部分を取り込んだ台地のへり部分に形成されている。

坊作遺跡を含むこの台地に所在する遺跡は、「国分寺台遺跡群」として総称されている。そのほとんどが大規模な複合遺跡であり、各時代の遺構が重複した状態で発見されている(第2図)。遺跡の南西側部分には縄文時代中・後期の貝塚である祇園原貝塚、同上層部分には弥生時代中～後期の集落、南側の部分は上総国分尼寺跡(第3図)、西側には古墳時代後期の円墳群である南向原古墳群などが存在する。また、谷を挟んで北西側には、古墳時代中期から後期にかけての大規模集落である東向原遺跡・加茂遺跡、西側には弥生時代後期から古墳時代にかけての大集落である台遺跡、南側には上総国分僧寺跡および僧寺の造営や経営にかかわったとされる奈良時代前期から中世までの長期間にわたる集落である荒久遺跡が所在する。さらに谷を隔てた南西側には、古墳時代後期を中心とした200基を数える方墳、円墳群から構成される諏訪台古墳群、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした集落からなる天神台遺跡などが見られる。また、坊作遺跡東側の小支谷をはさんで対岸の台地には、「王賜」の銘で始まる銀象嵌鉄剣を出土した稻荷台1号墳、貞観17年の紀年を記した墨書土器が出土した平安時代の掘立柱建物群で構成される稻荷台遺跡など多数の遺跡が所在する。

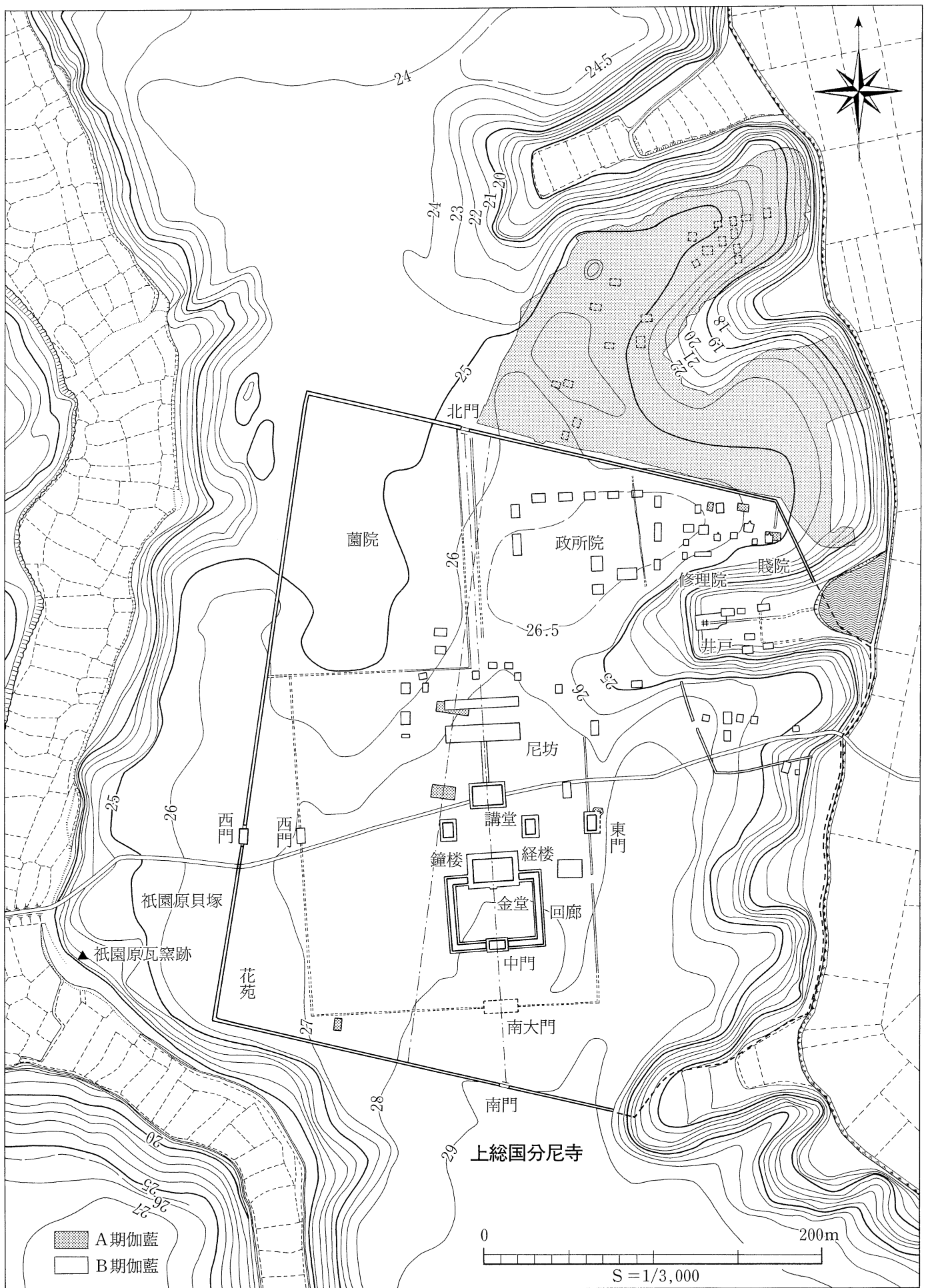
第3節 調査の方法

坊作遺跡は、昭和50年から昭和52年にかけて発掘調査が行われたが、50年代はちょうど大型開発造成による大



- | | | | | |
|---------------|-----------|-----------|------------|----------|
| 1 坊作遺跡 | 2 上総国分尼寺跡 | 3 上総国分僧寺跡 | 4 荒久遺跡 | 5 祇園原瓦窯址 |
| 6 神門瓦窯址 | 7 南田瓦窯址 | 8 稻荷台遺跡 | 9 稻荷台1号墳 | 10 向原遺跡 |
| 11 南向原古墳群(遺跡) | 12 台遺跡 | 13 西谷古墳群 | 14 加茂遺跡 | 15 根田代遺跡 |
| 16 根田遺跡 | 17 中台遺跡 | 18 神門3号墳 | 19 神門4号墳 | 20 神門5号墳 |
| 21 蛇谷遺跡 | 22 天神台遺跡 | 23 諏訪台古墳群 | 24 東間部多古墳群 | 25 西広貝塚 |
| 26 祇園原貝塚 | 27 南祇園原遺跡 | | | |

第2図 国分寺台遺跡群



第3図 坊作遺跡の位置(2)

規模発掘調査が始まった時期でもある。今では恒常化した機械力による表土除去を、市原で初めて導入した遺跡である。概報にも述べているが、「遺跡の現状は山林であり調査は困難を極めることが予想され、またなるべく広域の調査を実施するために遺構検出面までの排土作業には機械力を導入した」と記されている。調査は、表土除去後、任意の基準線(真北方向から西へ6°20'ほど傾いていることから、おそらく磁北を基準線にしたと思われる)を設定し、そこから20mグリットを遺跡全面に展開して発掘調査に入った。水準については区画整理用の水準点(BM番号やTPOと呼称)を各遺構に利用したものと推定できるが、基準となる標高値が不明のため、遺構内の水準は相対的な比高で示されている。

整理作業では、遺構の位置を当初のグリッドを使って表示していたが、隣接の上総国分尼寺跡調査での掘立柱建物や寺域を画する外郭溝との方向性の検討など不都合な点が多く見受けられた。このことから、電算処理による全体図作成の際に、今までの任意座標から公共座標(第IX座標系)で遺跡全体を組んでいる上総国分尼寺跡との整合性を図るため、遺跡全体の座標変換を行った。

方法的には、まず任意座標による40枚に分割された坊作遺跡の1/100図をスキャナーで取り込んで、電算上に1/100全体図を作成した。その後、各全体図間の方向のゆがみや距離の誤差を修正配分した後、隣接の南側に所在する上総国分尼寺の1/100全体図のうち、坊作遺跡との接合部付近で重複して記載された遺構や発掘調査範囲部分を手がかりとして、電算上に重ね合わせて整合させた。グリッドについては、上総国分尼寺跡全体図で使用しているグリッドをそのまま坊作遺跡上に延長させて、グリッドの変換を行った。なお、座標北は公共座標による北である(坊作遺跡での偏倚角は真北方向から約10°30'東偏)。グリッドは一辺30mを大区画として、さらにその中を縦・横10等分した3mの小グリッドで100等分した。区画名称は、縦軸・横軸ともアルファベットの太文字を使用し、縦軸(E～M)を最初に、次に横軸(L～T)を組み合わせた記号で表している。小区画については、大区画グリッドの北西隅部分を「01」として右方向・平行式に02・03・04・・・とし、最後の南東隅部分を「00」とした。記載例としては、最小区画部分を例えば、KR—25といった記号で表している(第4図)。

遺物については、実測できうる破片は可能な限り図化するように努め、図版に反映させている。従って、遺構に伴う、伴わないとの取捨選択はしていない。また、発掘調査から25年も経ていることから、その間に番号の混乱した遺物や台帳上は記載されている遺物で、現在行方不明のものもあった。混乱した遺物は、できうる限り検証した。遺物の行方不明については、当時整理作業を進めていたなかで、何点かの遺物実測図が残されていたことから、該当しているものは、そのまま掲載した。金属製品については、錆化して原型をとどめないものも多く見られた。従って、当初の形状を推定できないまま図化した遺物もあることをあらかじめ断っておく。

第4節 調査概要

調査の結果、発見された遺構は縄文時代の陥穴102基、縄文時代早期の炉穴14群32基、弥生時代後期の竪穴住居跡42軒、奈良時代中期から平安時代前期にかけての竪穴住居跡119軒や鍛冶工房2棟および掘立柱建物跡30棟、溝状遺構4条、掘立柱柱列3基、弥生時代後期の貝を含む住居跡3カ所、奈良時代前期から平安時代前期の間に形成された貝を含む住居跡4カ所・貝ブロック土坑61基、時期・性格の不明な土坑5基、近世の塚1基、人を埋葬した土壇1基などが検出されている。このうち主体となる遺構は、上総国分尼寺の造営や経営に深くかかわっているとされている奈良時代中期から平安時代前期にかけての竪穴住居群や掘立柱建物群である。

遺物については、縄文土器、弥生時代後期の土器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、奈良三彩陶器、

緑釉陶器、「法花寺」・「造寺」や「海上厨」・「山邊郡立」・「市原」・「大里」等の郷名が書かれた墨書土器、記号などの線刻土器、フイゴの羽口、支脚、置きカマドなどの土製品、砥石などの石製品、国分尼寺で使われた瓦、斧や鉈、鑿、小刀などの工具、鎌や穂積鎌などの農具、鉄鏝を含む金属製品等多数出土している。このほか、食されたと思われる貝類などの自然遺物も出土している。

第1表 遺構番号表

遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
0		遺構不明遺物 表採遺物		※土師器杯・ロクロ+回転ヘラ+線刻「×」(5)←5号住の遺物に混入(該当遺構不明 2 号住にそれらしい遺物の写真あり) 注記 坊作-6 ※灰釉陶器碗(10) ※灰釉陶器長頸壺・底部・胴部片(11・12) ※重圏文軒平瓦(16) ※軒丸瓦・二十四葉単弁蓮華文破片(15) ※平瓦・平行四辺形格子目(33) ※平瓦・正格子目(34)
1	MS08・09・18・19	住居跡	奈良	※1号住→2号住→3号住 ※斜格子暗文土師器杯(4)
2	LS97・98 MS07・08	住居跡	平安	※1号住→2号住→3号住
3	MS17・18・27・28	住居跡	平安	※1号住→2号住→3号住 ※カマド破壊(無) ※土師器杯墨書「造寺」(5) ※平瓦・凹面にヘラ描き「田」(17)
4	MS05・06・15・16	住居跡	奈良	※住居内に多量の貝が投棄されている(ウミナ・ダンベイキサゴ含む) ※斜格子暗文土師器杯(1)
5	MS14・15	住居跡	平安	※カマドに土師器甕を煙突として、平瓦を煙道の天井として使用している ※ロクロ土師器杯・回転ヘラケズリが主体的
6	LS93・94 MS03・04	住居跡	奈良・平安?	※焼成部に平瓦を使用した造りの良好なカマド ※武蔵型土師器甕(2) ※均整唐草文軒平瓦(7)
7	LS82・83・92・93	住居跡	奈良	※土師器杯・墨書「興」(3)
8	LS61・62・71・72	住居跡	奈良	※カマド煙道に平瓦を使用 ※建替え(2期) ※良好な土器資料 ※須恵器無台盤(8) ※斜格子暗文土師器杯(3) ※丁寧な格子状のヘラミガキを施した土師器蓋(6) ※二十四葉単弁蓮華文軒丸瓦(18)
9	LR60・70 LS51・61	住居跡	奈良	※カマド焼成部に平瓦を使用 ※斜格子暗文土師器杯(1・2・3) ※武蔵型土師器甕(10)
10	LS41・42	住居跡	奈良	※カマド焼成部・煙道に平瓦を使用 ※カマドは西隅部分に位置する ※武蔵型土師器甕(3・4・5)
11	LS43・44・53・54	住居跡	平安	※12号住→11号住
12	LS45・55	住居跡	奈良・平安	※12号住→11号住 ※鉄鎌(7)
13	LS65・75	住居跡	奈良	※カマドは14号住により破壊されなし ※13号住→14号住
14	LS55・65	住居跡	奈良	※カマド破壊(無) ※13号住→14号住
15	LS24・25・34・35	住居跡	奈良	※土師器杯の内面に線刻「×」(3)
16	LS13・14・23・24	住居跡	平安	※カマド煙道部に土師器甕5個体を使用し煙道としている ※須恵器杯・線刻「×」(3) ※鉄製紡錘車(21)
17	KS94・95 LS04・05	住居跡	平安?	※実測対象土器遺物なし(甕破片のみ) ※遺物から判断できないが、隣接の16号住(Ⅳ期)の方向が近似していることから推定
18	KS65・66・75・76	住居跡	奈良・平安?	※東側半分壊されている ※土製支脚(4)
19	KR60・70	住居跡	奈良	※間仕切り溝
20	LS12	土坑		
21	LR16・17・26・27	土坑		
22	LR37・38	土坑		
23	KR95	土坑		
24	KQ70	陥穴	縄文	大型の異様な土器(諸磯)
25	KQ99 LQ09	住居跡	平安?	※カマド焼成部に土師器甕2個体(遺物は行方不明) ※支脚に丸瓦(7) ※須恵器杯(2)←千葉地域産
26	KQ98・99	陥穴	縄文	
27				308へ改番
28	KQ81	住居跡	平安?	※時期を決定する遺物少ない
29	KP70・80 KQ61・71	住居跡	平安	※カマドは痕跡のみ
30	KQ63・64・73・74	住居跡	奈良・平安	※良好な資料(杯類多数) ※石製紡錘車(26)

遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
31	KQ45	住居跡	平安	※焼失住居(木炭片) ※須恵器杯・墨書「法花」(3)
32				303へ改番
33	KR25・26	住居跡	奈良?	※時期については不明瞭
34	KR47・48・57・58	住居跡	平安	※カマドに瓦を多く使用 ※転用硯→須恵器高台付椀(2)の内面に朱が付着 ※土師質須恵器杯+墨書「□」・線刻「大」(1)←千葉地域産
35	KR20・30 KS11・21	住居跡	奈良	※良好な資料 ※土師器杯・ロクロ整形、静止糸切り後外周を井桁状にヘラケズリ(2・3) ※東海産灰釉陶器・蓋(11) ※灯明用土師器杯(3)
36	JR97 KR07	住居跡	奈良・平安	※鉄製紡錘車(19・20) ※須恵器杯(3)←千葉地域産 ※均整唐草文軒平瓦(14)
37				
38				302へ改番
39	JR82・83・92・93	住居跡	奈良・平安	※鉄鎌(12) ※摘鎌(10・11)
40	JR85・86・95・96	住居跡	奈良	※カマド内側に張り出す ※焼失住居(木炭片) ※壁土材残存 ※鉄斧、鉄鎌7個体などの鉄製品多数 ※遺物にモモの実 ※須恵器多数(底部回転ヘラケズリ主体) ※須恵器杯(13)←千葉地域産 ※須恵器無台盤(25) ※須恵器杯蓋(26・27・28) ※須恵器短頸壺(34・35) ※摘鎌(53)、鉄斧(57)、鉄鎌(52)
41	JR89・98・99	住居跡	奈良	※鉄製紡錘車(13) ※刀子(11・12) ※須恵器蓋(4・5)
42	KS23・33	住居跡	奈良	
43	KS44・54・55	住居跡	奈良	※間仕切り溝 ※良好な資料(土師器・永田産須恵器・千葉地域産須恵器が共伴) ※土師器杯・線刻「×」(1) ※須恵器高台杯・墨書「興?」(3) ※刀子(14)、鉄釘(13)
44	JQ80・90 JR71・81	住居跡	奈良	※鉄釘(17)、門(18)
45	JQ50・60	住居跡	奈良・平安	※住居外周に柱穴 ※石製紡錘車(12)
46	JR60 JS51・52・61・62	住居跡	奈良	※建替え、カマド2基(造替え) ※土師器甕多数(10個体以上)あり
47	JS74・75・84・85・86	住居跡	奈良	※間仕切り溝 ※刀子(19)
48	JS34・44	住居跡	奈良・平安	※49号住→48号住
49	JS34・44・45	住居跡	奈良	※49号住→48号住 ※須恵器高台杯(5)と土師器杯3個体(1・2・3)が、この順番で重なった状態で出土 ※斜格子状暗文土師器杯(3・4) ※鉄鎌(9)
50	JS15・16・25・26	住居跡	奈良	※時期は不確定
51	JS38・39・48・49	住居跡	奈良	※52号住→51号住 ※須恵器杯・墨書「潔」(7)
52	JS48・49	住居跡	奈良	※52号住→51号住 ※カマド破壊(無) ※52号住遺物は51号住の遺物と判断
53	JT61	住居跡	奈良	※住居半分残存 ※土師杯・墨書「Θ」・線刻「Θ」(1)
54	JS60 JT51	土坑		
55	IS99 JS08・09	住居跡	奈良	※斜格子状暗文土師器杯(1)
56	IS68・69・78・79	住居跡	奈良	※カマド破壊(無)、東カマドか?
57	IS83・84・93・94	住居跡		※57号住→58号住、カマド残欠(58号住により破壊) ※左袖に煙道残る ※遺物なし
58	IS84・94・95	住居跡	平安	※57号住→58号住 ※非ロクロ土師杯とロクロ土師器混在(半々) ※土製支脚(11) ※かすがい(16)、鉄釘(13・14・15)
59	JR39・40・49	住居跡	奈良・平安	※均整唐草文軒平瓦(12)
60	JR25・26・36	住居跡	奈良?	
61				306へ改番
62				
63				
64	KQ01・11	土坑		
65				309へ改番
66	JP70・80 JQ61・71	住居跡	平安	

遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
67	KQ41・51	住居跡	奈良	※住居内の粘土塊は、住居廃棄後に混入 ※須恵器(5・6・7)←千葉地域産 ※須恵器蓋(8) ※器厚の非常に薄い土師器台付甕(11)
68	KP66・67・76・77	住居跡	平安	※住居内に貝を投棄(廃絶後に混入)
69	KQ41	陥穴	縄文	※67号住の隣接
70				298へ改番
71				297へ改番
72				296へ改番
73				294へ改番
74				295へ改番
75				
76				
77	JP87・97	不明土坑		※性格不明土坑
78	JP85・86・95・96	住居跡	奈良・平安	
79	JP79・80	陥穴	縄文	
80				
81	JP56・57	陥穴	縄文	
82	JP65	陥穴	縄文	
83				
84				304へ改番
85				326へ改番
86	KO35・45・46	住居跡	奈良	※86号住→87号住 ※土鍾1個体(7)
87	KO25・35	住居跡	奈良	※86号住→87号住 ※斜格子状暗文土師器杯(2)
88	JO93・94 KO03・04	住居跡	平安	※良好な資料(土師器杯12個体)
89				304へ改番
90	KN19・20・29・30・40 KO11・21・31	住居跡	奈良	※90号住→91号住 ※良好な遺物群 ※カマドA(北)、カマドB(東) ※土鍾34個体(20～53)
91	JN98・99 KN08・09・10・19	住居跡	奈良	※90号住→91号住 ※93号住→91号住(92号住→93号住→91号住) ※須恵器杯・底部片・線刻「大」(7) ※間仕切り溝
92	KN07・08・17・18	住居跡	奈良	※92号住→93号住(92号住→93号住→91号住) ※93号住によりカマド壊されている ※壁に沿って柱穴
93	JN97・98 KN07・08	住居跡	奈良	※92号住→93号住(92号住→93号住→91号住) ※武蔵型土師器甕(13)
94	JN88・89・98・99	住居跡	奈良	※須恵器杯・墨書(4)←文字判読不明
95	JN86・87・91・97	住居跡	平安	※501号建物→95号住 ※四隅に柱穴 ※土師器杯・墨書(1) ※土師器置きカマド(13)
96	JN87	陥穴	縄文	
97				501へ改番
98	JN91・92 KN01	住居跡	奈良	※斜格子状暗文土師器杯(4) ※須恵器甕(大型)破片・転用硯(17)
99	JN63・64・73・74	住居跡	奈良	※斜格子状暗文土師器杯(2・3) ※転用砥石・須恵器甕破片(8) ※フイゴ羽口(10)
100	JN45・54・55・56・65・66	住居跡	奈良・平安	※建替え(2期)-拡張 ※土師器黒色処理碗・墨書「□花寺」(5)
101				88へ改番
102				290へ改番
103	JO47・48・57・58	陥穴	縄文	
104	JO58・59	陥穴	縄文	
105	JP43・53	陥穴	縄文	
106	JP35	陥穴	縄文	
107				
108	JP21・22	陥穴	縄文	
109	JP11・12	住居跡	平安	※住居内に投棄された貝 ※土師器杯(4)の内側に焼成時に貝殻(アカガイ)を乗せた痕跡が見られる
110	不明	陥穴	縄文	※位置不明
111	JO26	陥穴	縄文	
112	JO13・14・23・33	不明土坑		
113	JO25	住居跡	弥生(後)	※坊作編年では奈良住居(I-b)としている(ほかの遺構と取り違えている)
114				
115				280へ改番
116				
117	IP84・93・94	陥穴	縄文	
118				
119				283へ改番
120	IP72・73	陥穴	縄文	

遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
121	IP61・62・71・72	住居跡	平安	
122	IP22・23・32・33	住居跡	平安	※土師器杯・墨書「市原口」(6) ※土師器杯・墨書「至」(8) ※鉄滓
123	IO84・85・94・95	住居跡	弥生	※遺物なし
124	IO84	陥穴	縄文	※126号と同形態で小体型を呈する
125	IO85・86	陥穴	縄文	
126	IO95	陥穴	縄文	※124号と同形態で小体型を呈する
127	JO12・13	陥穴	縄文	
128	JO01・02	土坑		
129	JN18・19・27・28・29・38・39	住居跡	弥生(後)	
130	JP61	住居跡		※カマド内から須恵器杯が出土(遺物行方不明)
131	JM49・50・59・60 JN41・51	住居跡	弥生	※当住居跡に伴う遺物はない ※この住居の遺物は隣接の132号住(平安)の可能性大
132	JM38・39・48・49	住居跡	平安	※133号住→134号住→132号住 ※焼失住居(木炭片多い) ※良好な遺物(土師杯類多い) ※灯明土師器杯(3) ※土師器杯・墨書「井」(13) ※陶質系土器小瓶(30)
133	JM48・58	住居跡	平安	※133号住→134号住→132号住
134	JM47・48	住居跡	平安	※135号住→134号住 ※133号住→134号住→132号住
135	JM36・46・47	住居跡	平安	※135号住→134号住 ※土師器杯・墨書「清」(4)←体部、底部に「清」2字 ※土師器杯・墨書(3)
136	JL68・77・78	住居跡	奈良・平安	※須恵器杯・墨書「法花」(4) ※摘鎌(17)、刀子(18)
137	KM01・02・11・12	土坑		
138	JM61・62・71・72	土坑		
140	IP61・71	陥穴	縄文	※121号住内(出土遺物は、121号住のカマド遺物の可能性大)
141	IP62	陥穴	縄文	
142	IO30・39・40・49・50	住居跡	奈良	※142号住→143号住 ※142号住→507号建物 ※須恵器杯・墨書「隆」(3)→永田Ⅲ期 ※土師器台付甕(4)
143	IO40・50 IP31・41	住居跡	平安	※142号住→143号住 ※良好な資料 ※煙道に瓦を使用、煙突に土師器甕を使用 ※土師器杯・墨書「至？」(3) ※土師器皿・墨書「至？」(5) ※土師器杯・墨書(4)
144	IO26・27・36・37	住居跡	弥生	※145号住により2/3を壊される
145	IO26・27・28・36・37・38	住居跡	奈良	※145号住→507号建物
146	HN76・77	炉穴	縄文	
147	HN55・56	炉穴	縄文	
148	JM41・42	住居跡	平安	※時期を決める遺物少ない(不明瞭だがⅢ期か)
149	JL10・20 JM01・11	住居跡	平安	※須恵杯・墨書「海上厨」(3) ※土師器皿(4)
150	JM01・02・11・12	住居跡	平安?	※遺物少ない ※須恵器杯・線刻「×」(3)
151	IM81・82・91・92	住居跡	平安	※良好な資料 ※カマド袖部に瓦使用 ※土師器杯5個体 ※カマド内の平瓦→遺物行方不明
152	IM74・75・84・85・95	住居跡	平安?	※遺物少ない
153	JN31・32	住居跡	平安	※良好な資料 ※煙道に瓦を組みあわせている ※土師器杯および皿が多い ※土師器杯・墨書・則天文字「天」(10) ※軒平瓦・均整唐草文(39・40) ※鉄滓、鉄鏝(47)
154	IM30 IN21	住居跡	平安	※カマド図不明 ※カマド2(A北・B西)□カマドA→カマドB
155	IN03・12・13・23	住居跡	平安	※良好な資料 ※土師杯多数 ※奈良三彩小壺(16) ※カマドに瓦支脚 ※土師器杯・墨書(3)
156	IN047・48・57・58	住居跡	弥生	※遺物なし
157	IN61・62・63・71・72・73・82	住居跡	弥生	※台帳では弥生土器片ありとされているが、遺物行方不明 ※2本柱穴
158	HN42・43・52・53	住居跡	平安	※良好な資料 ※煙道に瓦を組み合わせて使用
159	HN84・85・94・95	住居跡	平安	※良好な資料 ※煙道に瓦を組み合わせて使用 ※土師器杯・墨書「今」+「今」(5)
160	HN96・97 IN06・07・08・16・17・18	住居跡	弥生(後)	※覆土中に土師器杯片、須恵器大型甕高台部分などがある

遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
161	HN98 JN08	住居跡	平安	※瓦支脚 ※良好な資料 ※鉄斧(27)、鉄滓
162	JN28・29・38・39	住居跡	奈良	※須恵器大型甕(12)←外面に朱が付着
163	IO41・51・52	住居跡	弥生	※1/20図なし、1/40建物図にあり
164	HN99・100 IN09・10	住居跡	弥生	※所在不明遺物(1001、1002)あり
165	IM40	陥穴	縄文	※154号住内
166				
167	JN02・03・12・13	住居跡	平安	※良好な資料
168				
169	IO22・23・32・33	住居跡	平安	
170				505に改番
171				275に改番
172				249に改番
173				
174	HN57・58・67・68	住居跡	弥生(後)	※穿孔された土製品(4)
175	HO41・42・51・52	住居跡(小鍛冶)	奈良・平安?	※カマド図不明、1/20住居平面図でカマドを表現している ※土師器台付大型鉢(3)←203号住あり ※鉄滓出土
176				※当初位置が不明であったが、検討の結果、175号奈良時代鍛冶住居を調査した後の床をはがして切り合っている弥生住居を調査した図・写真であることが、175号住の写真と比べて判明したことにより176Aを175とし、176Bを177として新規番号をつけ分離した(990913・1102) ※遺物についても175、177のそれぞれに帰属させた
177	HO41・42・51・52	住居跡	弥生	※175号住により3/5を破壊される
178	HO48・49・57・58・59・60・68・ 69・70	住居跡	弥生(後)	※弥生土器・鉢(4)
179	IP02・03・12・13	住居跡	奈良	※179号住→180号住 ※良好な資料 ※建替え(2期) ※胎土の異なる(灰白色、雲母など)須恵器甕破片多い ※武蔵型土師器甕(28) ※外面赤彩土師器杯(1・4) ※砥石(44) ※鉄滓、鉄斧(45) ※スサ入り壁材 ※格子目タキ平瓦(42)
180	IP03・04・13・14	住居跡	奈良	※179号住→180号住 ※カマド内土製支脚 ※須恵器高盤・脚部(10) ※土製支脚(22) ※鉄滓、鉄釘(23・24)
181				
182	HP53・54・63・64・73	住居跡	平安	※煙道内に須恵器杯(1・4) ※須恵器杯(1)←千葉地域産(南河原坂窯) ※須恵器杯(4)←永田・不入産 ※土師器皿(3)
183	HO29・38・39	住居跡	平安	※良好な資料(杯類) ※灯明用杯→土師器杯(5・8・9) ※土錘7個体(23～29) ※刀子(32)、鉄滓
184	HP11・12・21・22	住居跡	弥生(後)	
185				
186	GP94・95 HP04・05・06・15	住居跡	弥生(後)	
187	GP94	陥穴	縄文	
188	GP81・91	住居跡	弥生	※遺物なし
189	GO99・100 HO09・10	住居跡	弥生(後)	※焼失住居(木炭片・焼土多い)
190	GO97・98 HO07・08	住居跡		※カマド無 ※四隅に柱穴 ※遺物少ない
191	GO40・50・60 GP31・32・33・41・42・43・51・ 52・53・61・62・63	住居跡	弥生(後)	※焼失住居(焼土・炭化材) ※直口縁壺形土器(1)
192	GO44・45・46・54・55・56・57・ 64・65・66・67・75・76・77	住居跡	弥生(後)	※弥生土器・高杯脚部(8)
193				
194				
195	GO42・43・53	陥穴	縄文	
196				
197				
198	GO14・15・24・25	住居跡	弥生	※遺物なし
199	GO17・18・27・28	住居跡	弥生	※遺物なし ※2本柱穴
200	FO99・100 GO08・09・10・19・20	住居跡	弥生	※1/20遺構平面図なし ※遺物なし
201	GP12・13	住居跡	弥生	※遺物なし

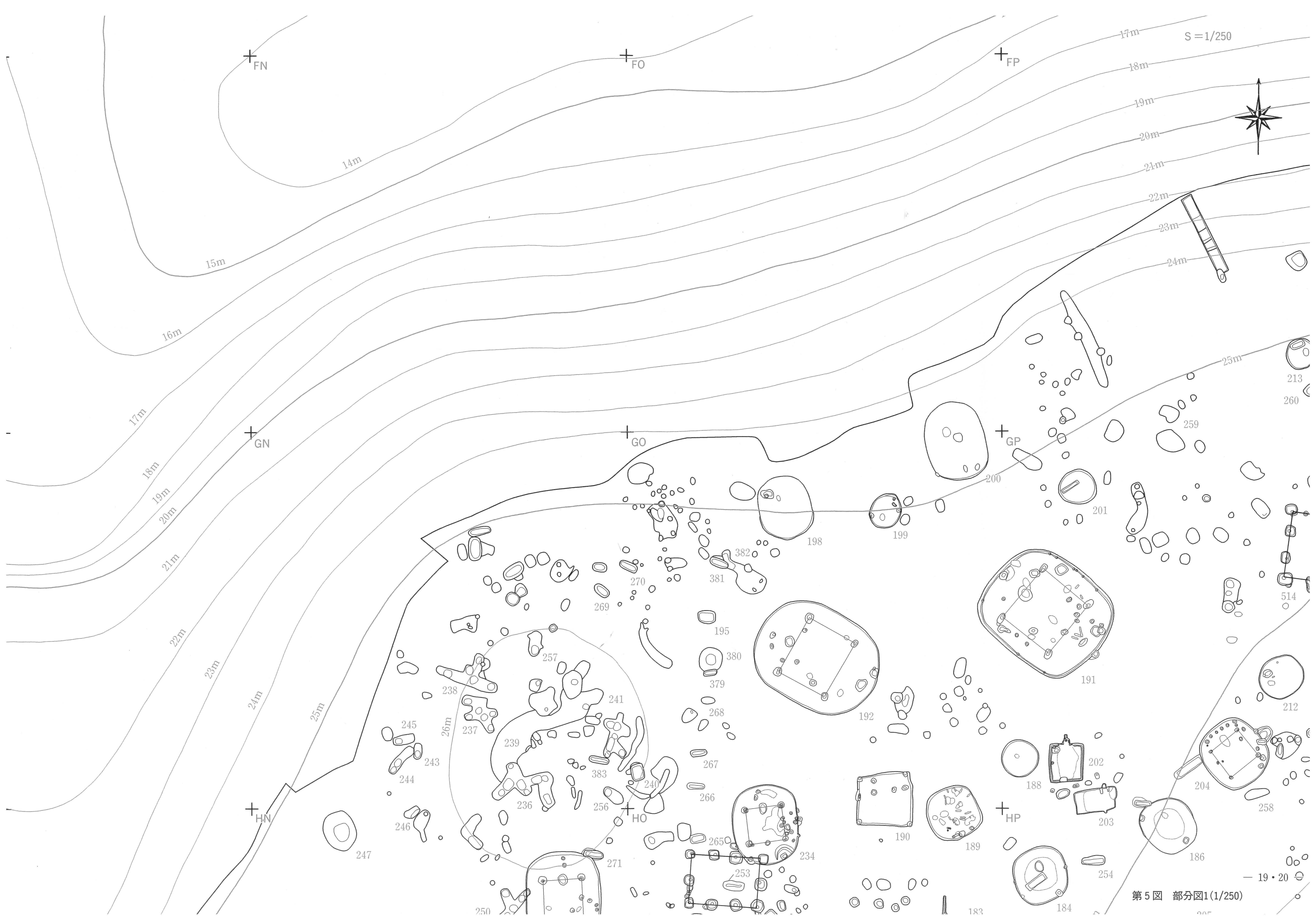
遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
202	GP82・92	住居跡	平安	※カマド袖に平瓦(9・10)使用 ※土師器黒色処理杯・墨書「本」(1) ※土師器杯・刻線文字(3) ※熨斗瓦(7)
203	GP93 HP03	住居跡	平安	※坊作遺跡で末期の住居 ※良好な資料(杯多数) ※土師器杯7枚が重なった状態で出土 ※土師器黒色処理杯・墨書(13) ※土師器杯(7・8)←灯明用杯 ※土師器台付大型鉢(25)←175号住あり ※緑釉陶器高台付碗(18) ※銅製袴帯具(31)
204	GP76・77・86・87・96・97	住居跡	弥生(後)	※住居北東隅に外に張り出して炉穴有り ※住居内貝ブロックあり(貝サンプル有) ※弥生土器大型甕(7) ※弥生小型甕(8)←指紋が付く ※甕・鉢が多 ※壁際に小柱穴並ぶ
205	HP35・36・45・46	住居跡	奈良・平安?	※206号住→205号住 ※遺物少ない ※煙道に土師器甕(3)
206	HP35・45・46・55	住居跡	弥生(後)	※206号住→205号住 ※焼失住居(焼土・木炭片) ※壺の下位に縦状の突起が付く(1) ※石英粒、雲母粒などを多く含む胎土の弥生土器破片(2)
207	HP55・56・66	住居跡	平安	※208号住→207号住 ※坊作遺跡で末期の住居 ※土師器高台付皿(3)←灯明皿 ※均整唐草文軒平瓦(11)
208	HP57・67	住居跡	平安	※208号住→207号住
209	HP19・20・29・30 HQ11・21	住居跡	奈良	※住居内貝ブロック(貝のサンプル無) ※斜格子状暗文土師器杯(1)
210	GQ93・94 HQ03・04	住居跡	奈良	※住居内貝ブロック(貝のサンプル無) ※カマド内に瓦 ※武蔵型土師器甕(6) ※砥石(15) ※鉄滓
211	GQ77・78・87・88	住居跡	奈良	※211号住→522号建物 ※良好な資料 ※カマドは522建物c1柱穴により壊される ※須恵器杯・墨書「法花」(5) ※鉄釘(19・20)、鉄滓 ※格子目タタキ平瓦(17)
212	GP67・68	住居跡	弥生(後)	※住居内貝ブロック ※焼失住居?(焼土・木炭片) ※壁土あり
213	FP78・79・88・89	住居跡	弥生	※1/20遺構平面図なし ※遺物なし
214	FP70・80 FQ61・71	住居跡	弥生	※焼失住居(炭化材・焼土) ※遺物なし
215	FQ46・47・48・56・57・58・67・68	住居跡	弥生(後)	※焼土・炭化材 ※遺物多い
216	FQ48・49・58・59	住居跡	平安	※良好な資料(杯類)
217	FQ29・30・39・40	住居跡	弥生	※砥石
218	EQ98・99・100 FQ08・09・10	住居跡	弥生(後)	※砥石
219	GQ73・74・83	住居跡	奈良?	※焼失住居(木炭片)
220	GQ40・49・50・60 GR41	住居跡	平安	※良好な資料 ※建替え(2期) ※煙道に瓦を使用 ※土師器皿が多い ※土師器杯・線刻「×」(13) ※土師器置きカマド(41) ※甕(55)、鉄製紡錘車(54)
221	ER91・92 FR01・02・11・12	住居跡	弥生(後)	※焼失住居 ※遺物多い(甕) ※木炭片 ※砥石
222	ER82・83・92・93	住居跡	弥生(後)	※焼失住居(焼土・炭化材) ※底部穿孔(焼成前)の弥生甕(1)
223	ER65・66・75・76	住居跡	弥生	※遺物なし
224	FR43・44・53・54	住居跡	弥生(後)	
225	FR95・96・97、GR05・06・07	住居跡	弥生(後)	※焼失住居(焼土・炭化材)
226	GR32・33・42・43	住居跡	弥生(後)	※228号住により1/5を破壊される 226号住→228号住 ※焼失住居(焼土・炭化材多い)
227	GR51・52・61・62	住居跡	奈良・平安	※良好な遺物多い ※カマドA(北)、カマドB(東) ※須恵器杯(9・10・11・12・13)←千葉地域産(南河原坂窯) ※土師器杯+墨書「北口」(6) ※228号住の丸瓦(9001)と227号住の丸瓦(33)が接合→この瓦の出土は床からかなり高い位置であるため、228号住の瓦と考えることも可能(廃絶後に投げ込まれた可能性もある)→この瓦付近の高さで出土した須恵器浄瓶(31)、灰釉長頸壺(32)などは228号住の遺物の可能性も考えられる

遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
228	GR43・44・53・54	住居跡	平安	226号住→228号住 ※建替え？ ※住居内に貝ブロックあり ※土師質須恵器杯(9・10・11)←千葉地域産(南河原坂窯) ※須恵器蓋(12・13) ※土師器杯(1)←灯明杯 ※フイゴの羽口(24) ※鉄滓、門(31)、刀子(28・29・30)、鉄釘(32)
229	FQ79・80・89・90・99・100 FR81・91	住居跡	弥生(後)	※弥生土器壺(3)←鉢の台部として使用 ※523号建物の時期を判断する遺物あり(須恵器など) ※須恵器杯(523-1) ※須恵器浄瓶(523-2) ※灰釉陶器長頸壺(523-3)
230	GQ09・10・19・20・29・30 GR11・21	住居跡	弥生(後)	※高杯(4) ※砥石
231	GR01・02・03・12	住居跡	平安	※良好な遺物多い ※クロロ土師器杯+回転ヘラケズリ主体(少々手持ちヘラケズリ入る 7:1の割合) ※土師器杯・墨書「山邊郡立」「山」(9) ※千葉地域系須恵器の置きカマド(26) ※鉄鎌(25)、刀子(24)
232	FR37・38・47・48	住居跡	弥生(後)	※底部穿孔甕(3) ※砥石
233	GQ23・32・33・42・43	住居跡	平安	※良好な資料(杯類) ※カマド内に瓦・土師器多い ※土師器杯・墨書「田」+「田」+1文字(8) ※土師器杯・墨書「甘」(10) ※土師器杯・墨書(6)←文字不明
2340	GO94・95 HO03・04・05・14・15	住居跡	弥生(後)	※焼失住居(焼土) ※建替え？ ※住居内貝ブロックあり ※砥石
235	HN18・19・20・28・29・30・38・ 39・40	住居跡	弥生(後)	※浅鉢
236	GN87・97・98	炉穴	縄文	※遺物多い
237	GN76・77	炉穴	縄文	
238	GN56・57・65・66・67	炉穴	縄文	
239	GN69・70・77・78・79・80・87・88	性格不明土坑		※浅く広い土坑
240	GO81・91	土壇	近世	※人骨1体
241	GN80・90	炉穴	縄文	
242	HN06	炉穴	縄文	
243	GN85	炉穴	縄文	
244	GN84・85・94	炉穴	縄文	
245	GN84・85	炉穴	縄文	
246	GN95 HN05	炉穴	縄文	
247	HN02・03	土坑	?	
248	HN80・90 HO71・81	陥穴	縄文	
249	HO82・83	陥穴	縄文	
250	HN27・28・37・38	炉穴	縄文	※実測・拓本
251A	HO42・43	陥穴	縄文	
251B	HO42・43	陥穴	縄文	
252	HO23・24	陥穴	縄文	
253	HO70・HP61	陥穴	縄文	
254	HP13	陥穴	縄文	
255	HO53	陥穴	縄文	
256	GN100	炉穴	縄文	※遺物あり
257	GN58	炉穴	縄文	※遺物あり
258	GP97・98	陥穴	縄文	
259	FP95	陥穴	縄文	
260	FP88・89・99	陥穴		
261	GP09・10	陥穴		
262	GQ61・62	陥穴	縄文	
263	HO35・45	陥穴	縄文	
264	HO22・23・32・33	陥穴	縄文	旧177を改番
265	HO02・03	陥穴		
266	GO92・93	陥穴	縄文	
267	GO82・83	陥穴	縄文	
268	GO73	陥穴		
269	GN50	陥穴	縄文	
270	GN40・GO31	陥穴		
271	HN19・20	陥穴	縄文	
272	IO12	陥穴	縄文	
273	IO23	陥穴	縄文	旧169Aを改番
274	IO33	陥穴	縄文	旧169Bを改番
275	IO42・43	陥穴	縄文	※275A(大)、275B(小)
276A	IO44・54	土坑		
276B	IO44・54	陥穴	縄文	
277	IO88	陥穴	縄文	

遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
278	IO89	陥穴	縄文	
279	IP95	陥穴	縄文	※2基重複の可能性あり
280	JP04	陥穴	縄文	旧280を改番
281	JP23・24	陥穴	縄文	
282	JP23・33	陥穴	縄文	
283	IP92・93	陥穴	縄文	旧119を改番
284	IO99・100	陥穴	縄文	
285	JP58・59	陥穴	縄文	
286	KP17・18	陥穴	縄文	
287	IP91・JP01	陥穴	縄文	
288	JO37・38	陥穴	縄文	
289	JO16・17・26・27	陥穴	縄文	
290	JO75・76・85・86	陥穴	縄文	旧102を改番
291	KP02・12	陥穴	縄文	
292	KO29	陥穴	縄文	
293	KP42	陥穴	縄文	
294	KP41・42	陥穴	縄文	旧73を改番
295	KP41	陥穴	縄文	旧74を改番
296	KP62・63	陥穴	縄文	旧72を改番
297	KP34	陥穴	縄文	旧71を改番
298	KP45・46	陥穴	縄文?	旧70を改番
299	KP74・75	陥穴	縄文	
300	KQ72	陥穴	縄文	
301	KQ65・66・75	陥穴		
302	KQ66・67	陥穴	縄文	旧38を改番
303	KQ35・45	陥穴	縄文	旧32を改番 ※覆土は全体に黒色を呈し、最下部の堆積土はロームを多量に含んだ褐色土である 土層はやわらかい 出土遺物はない
304	JQ96	陥穴	縄文	※良好な資料 旧89を改番
305	JQ57	陥穴	縄文	貝ブロック
306	JR36	陥穴	縄文	旧61を改番
307	KP43	陥穴	縄文	
308	LQ08・18	土坑		旧27を改番
309	JQ92	土坑		
310	KQ04	貝ブロック土坑		貝ブロック
311	KQ23	貝ブロック土坑		貝ブロック
312	KQ23・33	貝ブロック土坑		貝ブロック
313	KQ25	土坑?		貝ブロック
314	KQ22	貝ブロック土坑		貝ブロック
315	KQ21	貝ブロック土坑		貝ブロック
316	KP30	貝ブロック土坑		貝ブロック
317	KQ21	貝ブロック土坑		貝ブロック
318	KP50	土坑		貝ブロック
319	KQ52	貝ブロック土坑		貝ブロック
320	JP90	土坑		貝ブロック
321	KP75・76	土坑		貝ブロック
322	KP85	貝ブロック土坑		貝ブロック
323	KP85	貝ブロック土坑		貝ブロック
324	KP54	土坑		貝ブロック
325	KP54	土坑		貝ブロック(ウミニナ含む)
326	KO10	貝ブロック土坑		旧85を改番 貝ブロック(ウミニナ含む)
327	JP25・26・35・36	貝ブロック土坑		貝ブロック
328	JP25	貝ブロック土坑		貝ブロック
329	JP24	貝ブロック土坑		貝ブロック
330	JO10	土坑		貝ブロック
331	JO39	土坑?		貝ブロック
332	JO49	土坑		貝ブロック
333	JO77	陥穴	縄文	貝ブロック
334	JO75	貝ブロック土坑		貝ブロック
335	JO84	貝ブロック土坑		貝ブロック
336	JO83	貝ブロック土坑		貝ブロック(ダンベイキサゴ含む)
337	JO82・83	貝ブロック土坑		貝ブロック
338	JO73	貝ブロック土坑	奈良	貝ブロック ※土師器杯(338-1)
339	JO73	貝ブロック土坑		貝ブロック
340	JO73	貝ブロック土坑		貝ブロック
341	JO73	貝ブロック土坑		貝ブロック
342	JO74	貝ブロック土坑		貝ブロック
343	JO74	貝ブロック土坑		貝ブロック
344	JO63	貝ブロック土坑		貝ブロック
345	JO63	貝ブロック土坑	奈良?	貝ブロック
346	JO52	貝ブロック土坑		貝ブロック

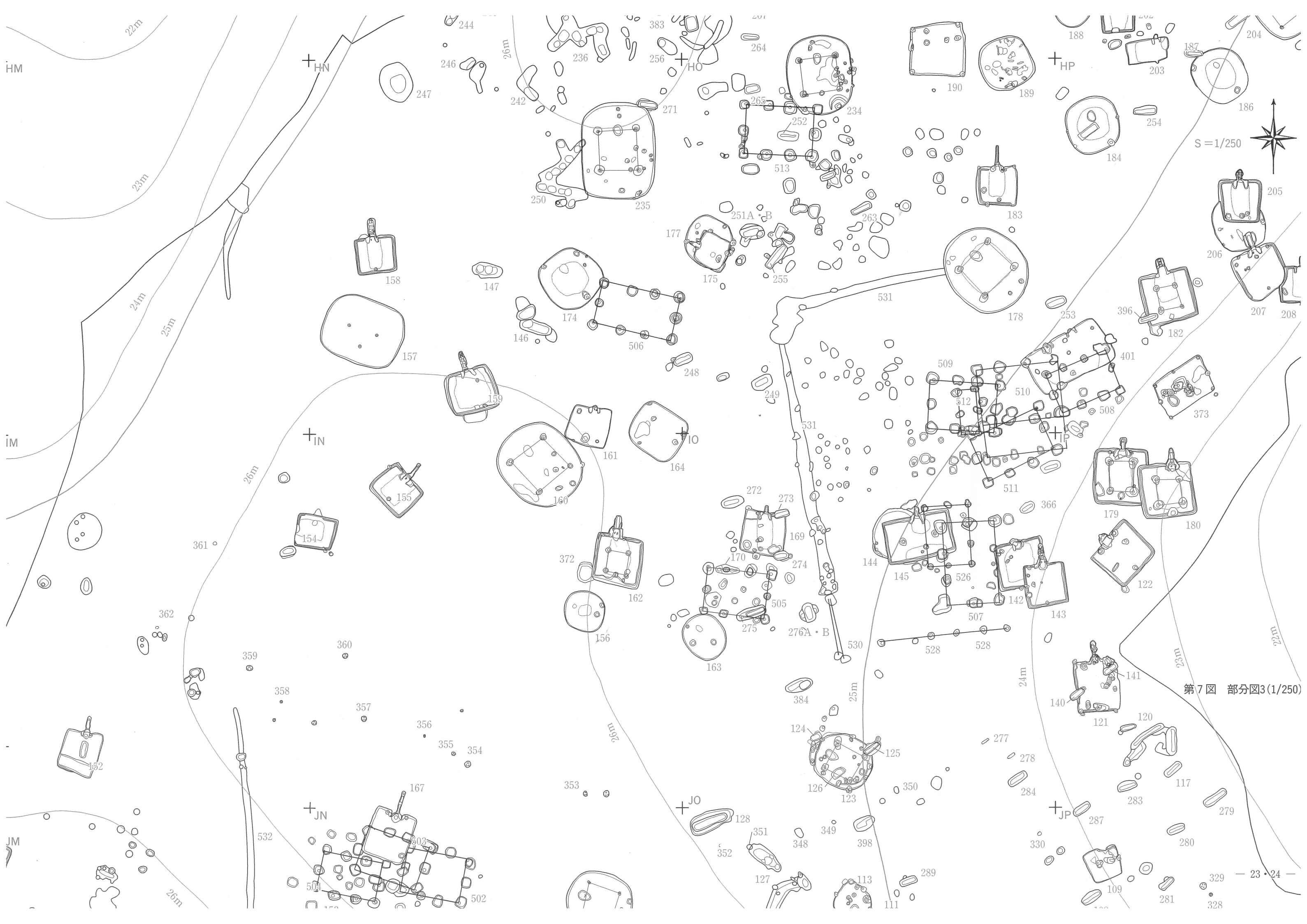
遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
404	MS44・53・54	住居跡	平安	※尼寺調査分(旧1210号住) ※土師器杯・線刻「×」(10)
405	MS45・46・55・56	住居跡	平安	※尼寺調査分(旧1211号住)
406	MS39・40・49	住居跡	平安	※尼寺調査分(旧1212号住) ※灯明用土師器杯(5)
407	LS100 MS10	住居跡	奈良・平安	※尼寺調査分(旧1208号住) ※東半分こわされる ※遺物少ない ※須恵器蓋(2)
499	KM18・19・28・29・38・39	鍛冶遺構	奈良	※フイゴの羽口 ※鉄製品 ※鍛造剝片を含む覆土1箱
500	KN13・14・23・24	掘立柱建物跡	奈良	
501	JN85・86・95・96 KN05・06	掘立柱建物跡	奈良	※501号建物→95号住
502	JN13・14・15・23・24・25	掘立柱建物跡	奈良	※502号建物→503号建物
503	JN02・03・04・12・13・14・23	掘立柱建物跡	奈良	※502号建物→503号建物 504号建物→503号建物
504	JN11・12・13・21・22・23	掘立柱建物跡	奈良	※504号建物→503号建物
505	IO31・32・33・41・42・43	掘立柱建物跡	奈良	※a 1柱穴の底部分に平瓦→遺物行方不明
506	HN68・69・70・78・79・80	掘立柱建物跡	平安	※須恵器・タタキ甕(1) ※土師質須恵器・タタキ甕(3)千葉地域産 ※格子目タタキ平瓦(21) ※朱が付着する平瓦 ※タタキ板の幅が分かる平瓦(10)
507	IO28・29・38・39・48・49	掘立柱建物跡	奈良・平安	※142号住→507号建物 ※145号住→507号建物
508	HO90 HP72・81・82・91・92	掘立柱建物跡	平安	※401号住→508号建物 ※510号建物→508号建物 ※c 2柱穴に土師器杯・ロクロ+回転ヘラケズリ(1)
509	HO87・88・89・97・98・99	掘立柱建物跡	平安	※510号建物→511号建物→509号建物
510	HO89・90・99・100 IO09・10	掘立柱建物跡	奈良	※510号建物→508号建物 ※510号建物→511号建物→509号建物
511	IO08・09・10・19	掘立柱建物跡	平安	※b 4柱穴に土師器?瓦の遺物 ※510号建物→511号建物→509号建物 ※508号建物と並びが同じ→同時期?
512	HO88・99	掘立柱建物跡	奈良・平安	
513	HO12・13・14・22・23・24	掘立柱建物跡	平安	
514	GP28・29・30・38・39・48・49	掘立柱建物跡	奈良	
515	GQ41・42・43・51・52・53・61・ 62・63	掘立柱建物跡	平安	
516	FQ94・95 GQ03・04・05	掘立柱建物跡	平安	
517	GQ01・02・11・12・13・22・23	掘立柱建物跡	平安	※南側に隣接して233号住(平安)
518	GQ24・25・26・34・35・36・44・ 45・46	掘立柱建物跡	平安	
519-A	FQ86・87・88・96・97・98 GQ07・08	掘立柱建物跡	奈良・平安	※建替え ※519A号建物→519B号建物
519-B	FQ86・87・88・96・97・98 GQ07・08	掘立柱建物跡	平安	※519A号建物→519B号建物
520-A	GQ17・18・27・28・37・38	掘立柱建物跡	奈良・平安	※建替え ※520A号建物→520B号建物
520-B	GQ17・18・27・28・37・38	掘立柱建物跡	奈良・平安	※520A号建物→520B号建物
521	GQ47・48・57・58・59・67・68	掘立柱建物跡	奈良・平安	※521号建物→527号建物
522	GQ68・69・78・79・88・89	掘立柱建物跡	奈良・平安	※211号住→522号建物
523	FQ89・90・99・100 FR91	掘立柱建物跡	奈良・平安	
524	GP79・80・89・90・99	掘立柱建物跡	平安	
525	FR73・74・75・83・84・85・94	掘立柱建物跡	奈良・平安	
526	IO27・28・37・38	掘立柱建物跡	奈良・平安	※145号住→526号建物
527	GQ47・48・57・58・59	掘立柱建物跡	平安	※521号建物→527号建物
528	IO56・57・58・59	掘立柱柱列	奈良	※4間 ※510号・507号建物および530号柱列、531号溝に関連する
529	FR81・82・83	掘立柱柱列	奈良	※2間 ※523号・525号建物に関連する
530	IO44・45・54・55	掘立柱柱列	奈良	※親柱2本の棟門風 2時期か ※510号・507号建物および528号柱列、531号溝に関連する
531	HO56・57・64・65・66・73・83・ 93・94 IO04・14・24・34・44・45	溝	奈良	※510号・507号建物および528号柱列、530号柱列に関連する
532	IM78・88・98・99 JM09・19・29・39・89・99 KM09	溝		
533	JO23・33・42・52・61・62・71・81	溝		
534	KP36・37・46・47	溝		
600	GN区 HN区	坊作1号塚	近世	

遺構 番号	位 置 (グリッド番号)	種 別	時 代	特 記 事 項
347	JO33	貝ブロック土坑		貝ブロック
348	JO04	貝ブロック土坑		貝ブロック(ダンベイキサゴ含む) 土坑内に瓦多数あり
349	JO05・06	貝ブロック土坑		貝ブロック
350	IO96	貝ブロック土坑		貝ブロック
351	JO02・12	貝ブロック土坑		貝ブロック
352	JO02	貝ブロック土坑?		貝ブロック
353	IN98	貝ブロック土坑		貝ブロック
354	IN85	貝ブロック土坑		貝ブロック
355	IN84	貝ブロック土坑		貝ブロック(ダンベイキサゴ含む)
356	IN84	貝ブロック土坑		貝ブロック
357	IN72	貝ブロック土坑		貝ブロック
358	IM79・80	貝ブロック土坑		貝ブロック
359	IM69	貝ブロック土坑?		貝ブロック
360	IM39	貝ブロック土坑?		貝ブロック
361	IM27・28	貝ブロック土坑?		貝ブロック
362	IM56	貝ブロック土坑?		貝ブロック
363	JM64	貝ブロック土坑		貝ブロック
364	IN51	貝ブロック土坑		貝ブロック
365	不明	陥穴	縄文	旧248を改番
366	IO20・30	陥穴	縄文	貝ブロックが混在
367	HQ13	貝ブロック土坑	?	貝ブロック
368				
369				
370	HQ04	貝ブロック土坑		貝ブロック
371	GQ98	貝ブロック土坑	?	貝ブロック
372	IN38	土坑		
373	HP83・84・85・93・94	鍛冶遺構	奈良	※非クロロ土師器杯のみ ※土師器杯・非クロロ+手持ちヘラケズリ(1・2) ※須恵器杯・底部(3) ※フィゴの羽口(4・5)
374	KR42	貝ブロック土坑	?	貝ブロック
375	KR95 LR05	貝ブロック土坑		貝ブロック
376				
377				
378				
379	GO63	陥穴	縄文	※380号土坑と切り合う
380	GO52・53・63	土坑	?	※379号陥穴と切り合う
381	GO33	陥穴	縄文	
382	GO33	不明	不明	
383	GN90	陥穴	縄文	
384	IO63・64	陥穴	縄文	
385	JO79	陥穴	縄文	
386	JO80	陥穴	縄文	
387	JO89・99	陥穴	縄文	
388	JO90	陥穴	縄文	
389	JP91	陥穴	縄文	
390	KP07	陥穴	縄文	
391	KP29・30	陥穴	縄文	
392	KP09	貝ブロック土坑	平安?	※良好な資料 ※貝ブロック ※土師器台付甕(392-1)
393	KQ02・03	陥穴	縄文	
394	GQ19・20	陥穴(貝)	縄文	※230号住居内 貝ブロック
395	JO58	土坑		貝ブロック
396	HP63・73	陥穴	縄文	※182号住居内
397	JQ92	陥穴	縄文	
398	JO05・06	陥穴	縄文	
399				
400	位置不明	不明	奈良 ?	※遺構が特定できない→位置も不明 ※非クロロ土師器杯主体 ※須恵器が多い ※丸底の土師器杯(1) ※湖西系須恵器長頸壺の底部(7) ※土師質須恵器甕破片(8)
401	HO80・90 HP71・72・81・82	住居跡	奈良	※401号住→508号建物 ※カマドA・B(カマド図有) Aカマド北西 Bカマド北東 ※土師器杯・赤彩・墨書「大里」(5) ※斜格子状暗文土師器杯(4) ※常陸産須恵器杯(7)
402	MS11・12・22・23	住居跡	平安	※尼寺調査分(旧1206号住) ※カマドは道路によって壊される ※蛇文岩製の用途不明石製品(10)
403	MS33・34・43・44	住居跡	奈良	※尼寺調査分(旧1207号住) ※カマドは道路によって壊される ※斜格子状暗文土師器杯(1)

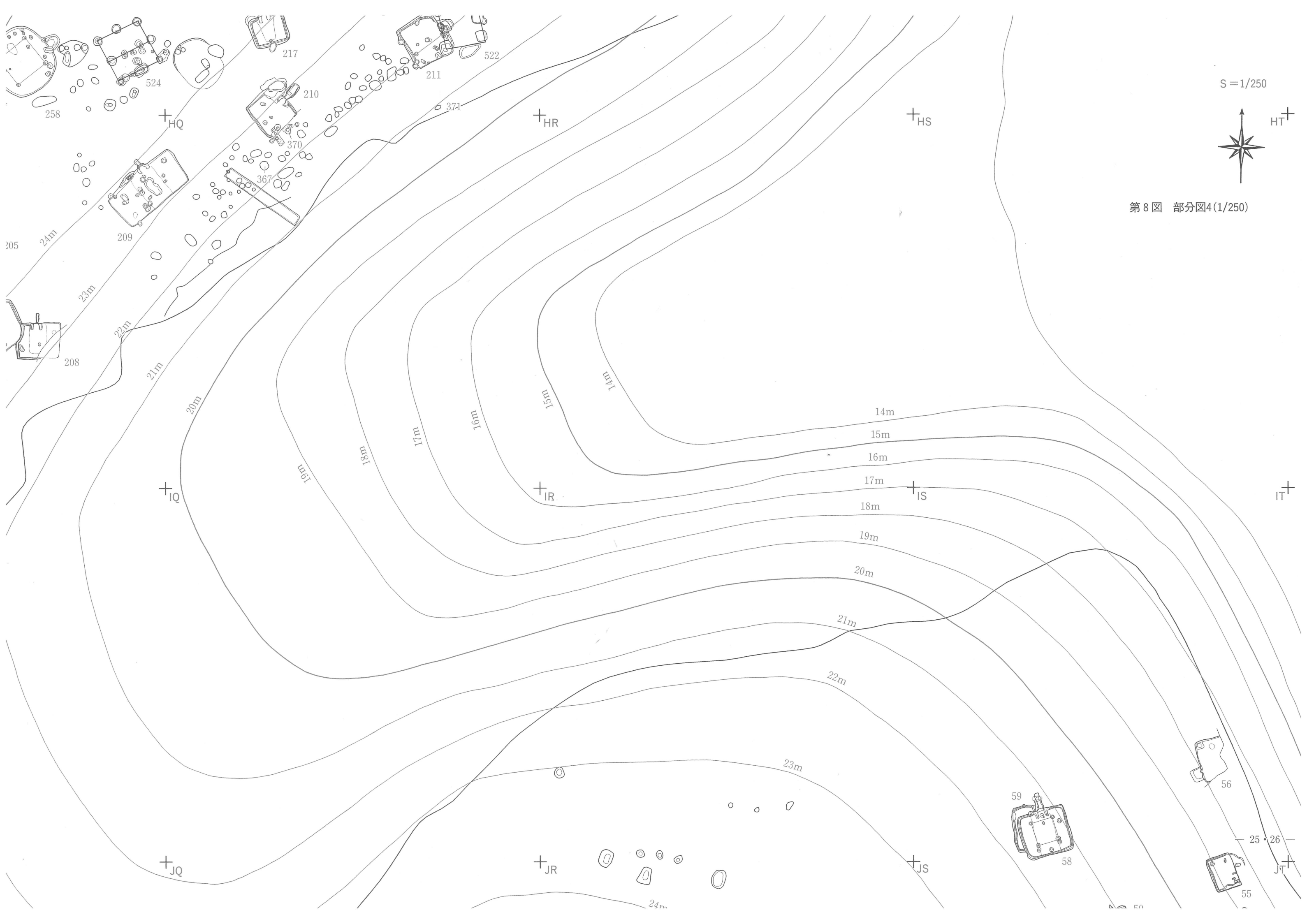


第5図 部分図1(1/250)

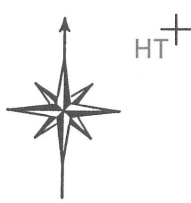




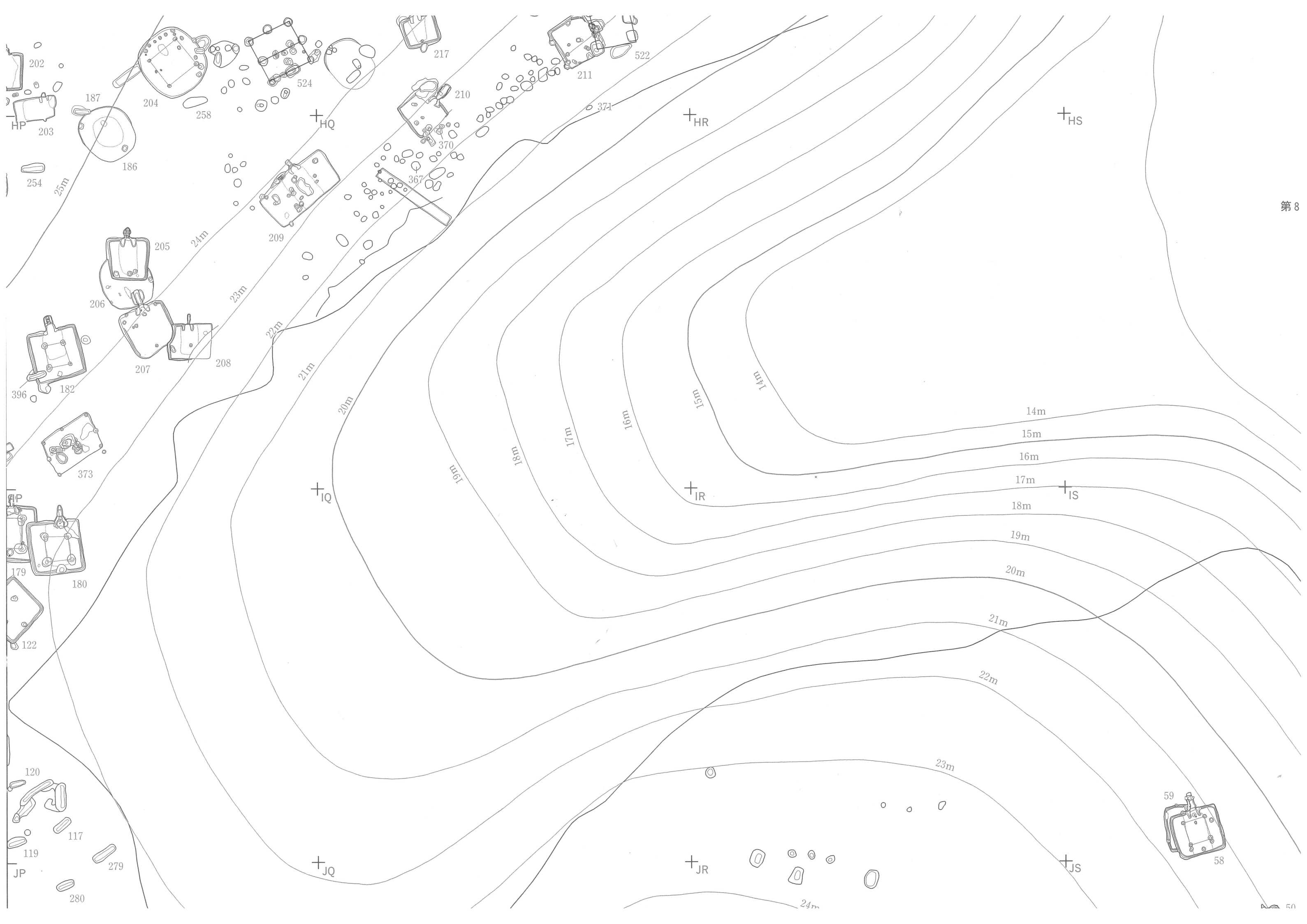
第7图 部分图3(1/250)

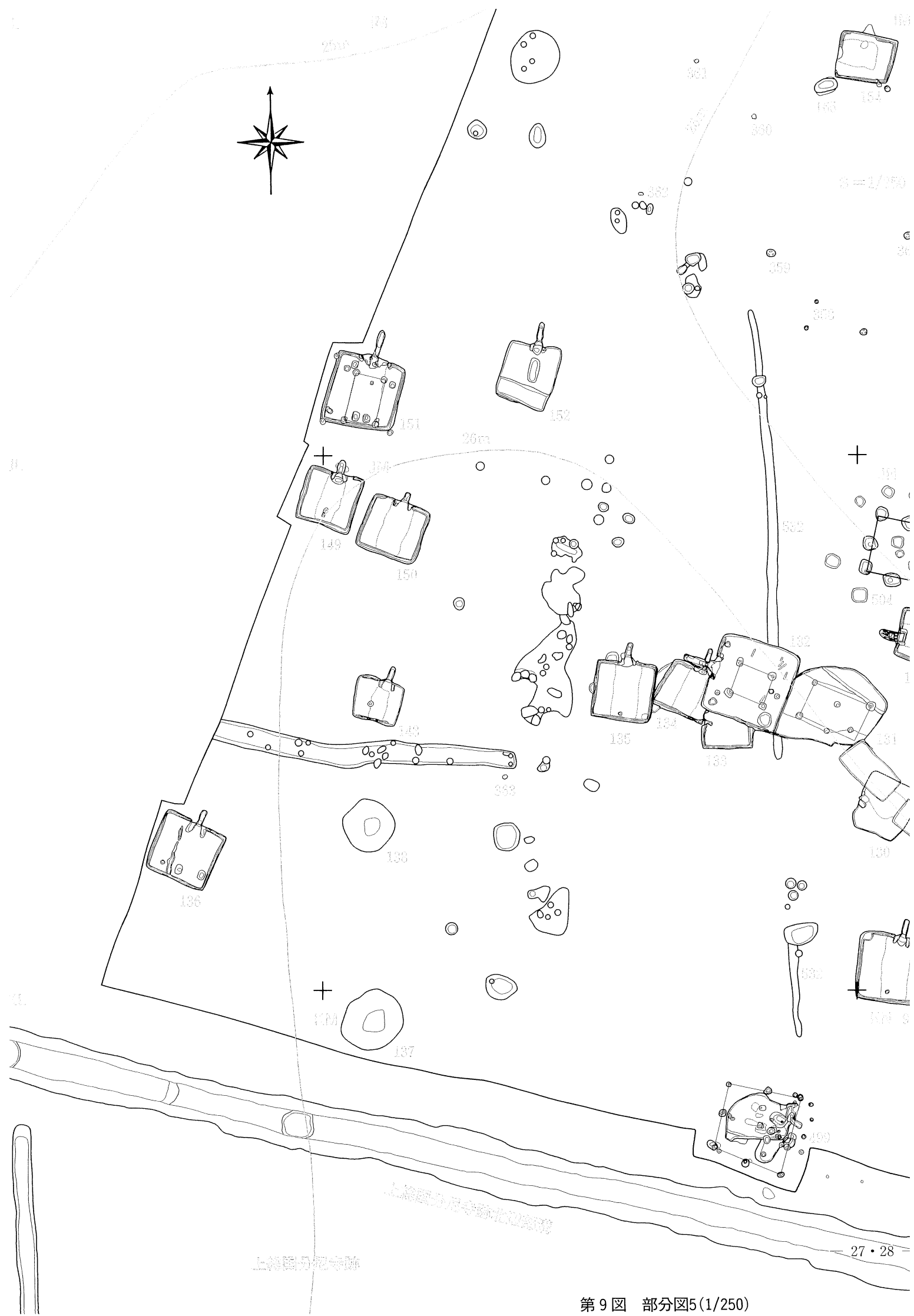


S=1/250



第 8 図 部分図4(1/250)





第9図 部分図5(1/250)

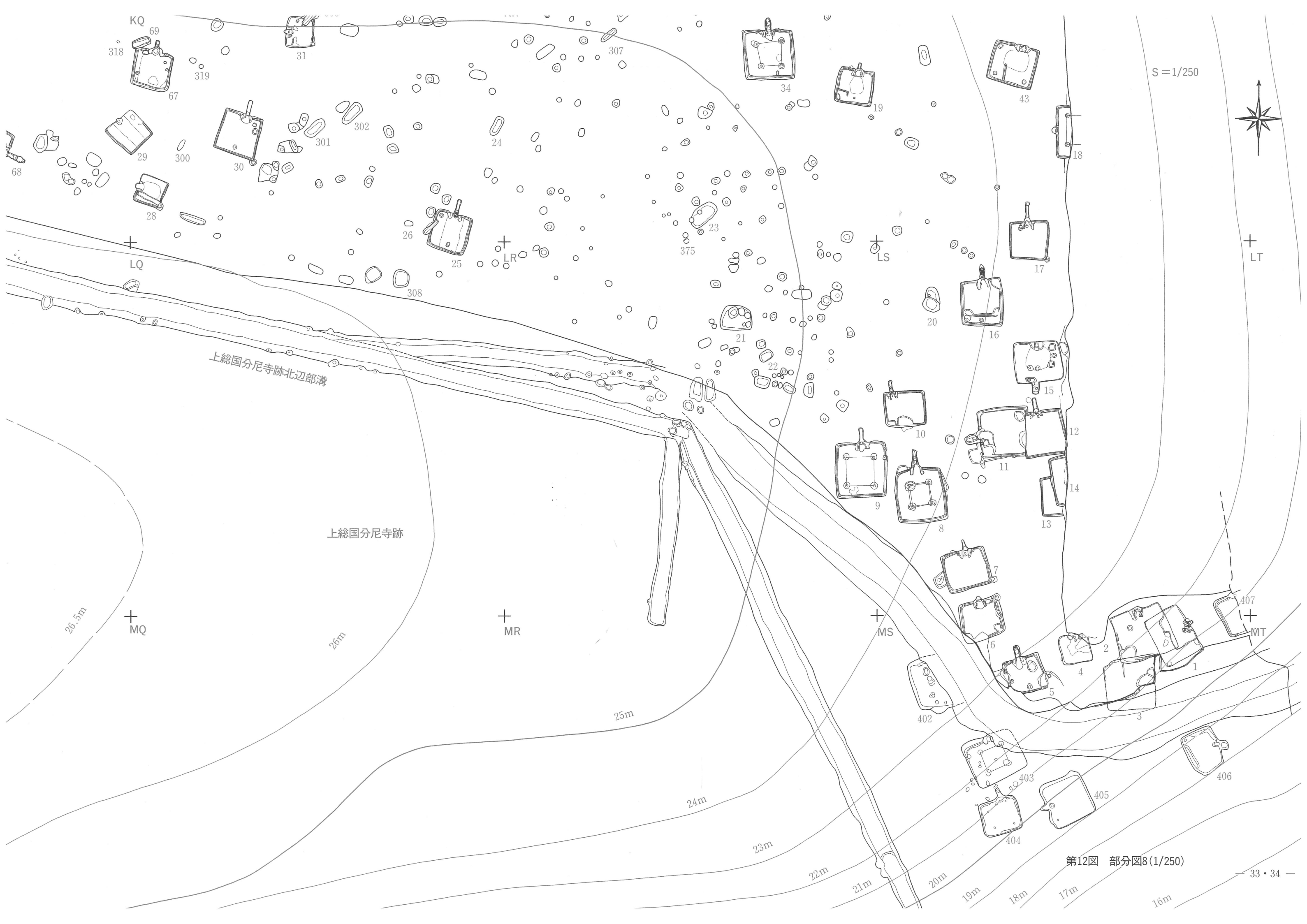


上総国分尼寺跡

上総国分尼寺跡北辺部溝



第11图 部分图7(1/250)



第12図 部分図8(1/250)

第II章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

第2節 弥生時代の遺構と遺物

第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

第4節 住居内および土坑内出土の貝の概要

第5節 その他の遺構

第II章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 炉穴

炉穴は、遺跡の北東尾根状台地基部の西側斜面を見下ろす平坦部分GN、HN区に集中して検出されている。広がりとしては、南北40m、東西20m、面積800㎡のなかに、単独の炉穴も所在するが、ほとんどが複数の炉を持ち、14群を数える。時期的には田戸下層式の後葉から野島式にかけてであり、台地に占める区域はまとまりがあるものの、時間的には幅があるものと考えられる。炉穴の構造は、全体的に東西方向に長軸をとるものが多く、火床面が西側に位置するものが多い。焼土の堆積は比較的厚く、範囲も円形を呈するものが主である。

146号炉穴（第14図、写真図版6・94）

HN—76、77区に所在する。2基の土坑が接するように切り合っている。南側の土坑は東西方向に長く、長軸3.2m、短軸1m、深さ60cm程で、底面に2カ所の焼土面を持つ。また北側部分の土坑は長軸1.6m、短軸1m、深さ50cm程で、南西部分に焼土面を持っている。東部分の底面から縄文土器が5点出土している。1～3は条痕を伴うが、1・3の内面は調整痕のみである。4・5は表裏に若干の調整痕を伴っているだけである。胎土には繊維を多く含んでいる。田戸上層式後葉であろう。

147号炉穴（第14図、写真図版6・94）

HN—55、56区に所在する。東西2.3m、南北1.3m、深さ0.5mの楕円形状の炉穴で、底面に2カ所の焼土面を有している。炉内から縄文土器2点が出土している。1・2は胎土に繊維を含み、器面はナデによる調整である。田戸上層式後葉であろう。

236号炉穴（第15図、写真図版6・7・94）

GN—87、97、98区に所在する。9カ所に焼土面が確認されている炉穴で、少なくとも4基以上の重複した1群と考えられる。全体の大きさは、南北4m、東西5.3m強で、折れ線状に連なって重なった炉穴である。炉内から縄文土器4点が出土している。1は口縁部近くの破片である。幅のあるへら状の工具による横位の連続した刺突文が2段に施文されている。内外面には擦痕が認められ、胎土に繊維が多く混入する。子母口式である。2は胎土に繊維を若干含んでいる。内外面は条痕が施されている。田戸上層式であろう。3・4は尖底である。3は丸味のある底部である。胎土に繊維を含み、1と同一個体の可能性があり、子母口式であろう。4も胎土に繊維を含むが3よりも少ない。田戸上層式ないしは子母口式であろう。

237号炉穴（第16図、写真図版7・95）

GN—76、77区に所在する。南北3.5m、東西2.5m、深さ0.6mの不整形な土坑状の落ち込みに6カ所の焼土面を有した炉穴である。少なくとも4基以上の重複した1群と考えられる。縄文土器が5点出土している。1・2は細沈線に刺突文を施している。田戸下層式である。3～5は繊維を多く含み、内外面はナデによる調整である。田戸上層式であろう。

238号炉穴（第16図、写真図版7・95）

GN—56、57、65、66、67区に所在する。南北3m、東西5.3m、深さ0.7mの横に長い不整形な溝状の土坑に5カ所の焼土面を有した炉穴である。少なくとも5基以上の重複した1群と考えられる。縄文土器8点が出土している。3・6は細沈線に刺突文を施している。田戸下層式である。1・2・4・5は内外面に擦痕状の調整痕を伴う。田戸上層式

であろう。

241号炉穴（第17図、写真図版7・8・96）

G N—80、90区に所在する。南北4m、東西2.2m、深さ0.6mの縦に長い不整形な土坑に7カ所の焼土面を有した炉穴である。少なくとも5基以上の重複した1群と考えられる。焼土面は1m前後の大型炉である。炉内から土器が4点出土している。1は胎土に繊維を多く混入している。器面はナデによる粗い調整である。2は繊維を含むが硬質の焼きである。田戸上層式であろう。3・4は平底である。時期は前期と思われ、遺構覆土上層での混入と考えられる。

242号炉穴（第17図、写真図版8・96）

H N—06区に所在する。2基の土坑が直角に切り合っている。南西側の土坑は長軸2.3m、短軸0.8m、深さ0.6m程で、底面に2カ所の焼土面を持つ。南側の焼土面は広く長さ1.2m、幅0.6mを持っている。この焼土面から縄文土器が1点出土している。胎土に繊維を多く含み、内外面の調整は粗い。田戸上層式から子母口式であろう。もう一方の土坑については、長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.3mで焼土面は持たない。

243号炉穴（第18図、写真図版8）

G N—85区に所在する。南北1.4m、東西0.6m、深さ0.4mの楕円形状の炉穴で、底面に2カ所の焼土面を有している。遺物の出土はない。

244号炉穴（第18図、写真図版8）

G N—84、85、94区に所在する。南北方向2.6m、幅0.8m、深さ0.4m程の細長い溝状の炉穴で、底面に2カ所の焼土面を有している。遺物の出土はない。

245号炉穴（第18図、写真図版8）

G N—84、85区に所在する。東西方向1.8m、幅0.7m、深さ0.3m程の細長い溝状の炉穴で、西側隅の底面に1カ所の焼土面を有している。遺物の出土はない。

246号炉穴（第13図、写真図版8）

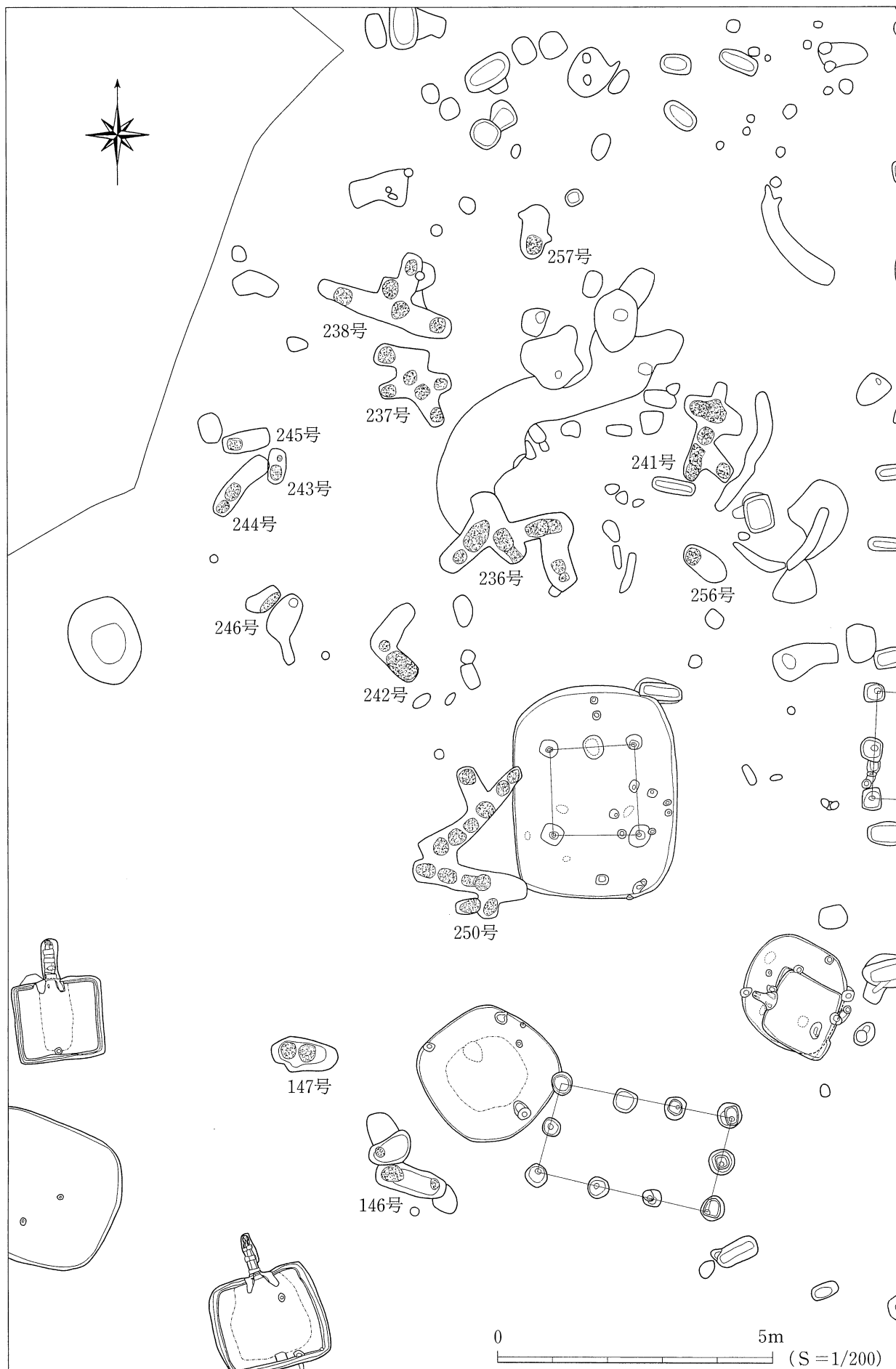
G N—95、H N—05区に所在する。長軸1.8m、短軸0.8mの北東—南西に長い楕円形状の炉穴で、南東側に1カ所の焼土面を有している。遺物の出土はない。（1/60遺構図はない）

250号炉穴（第19・20図、写真図版8・97）

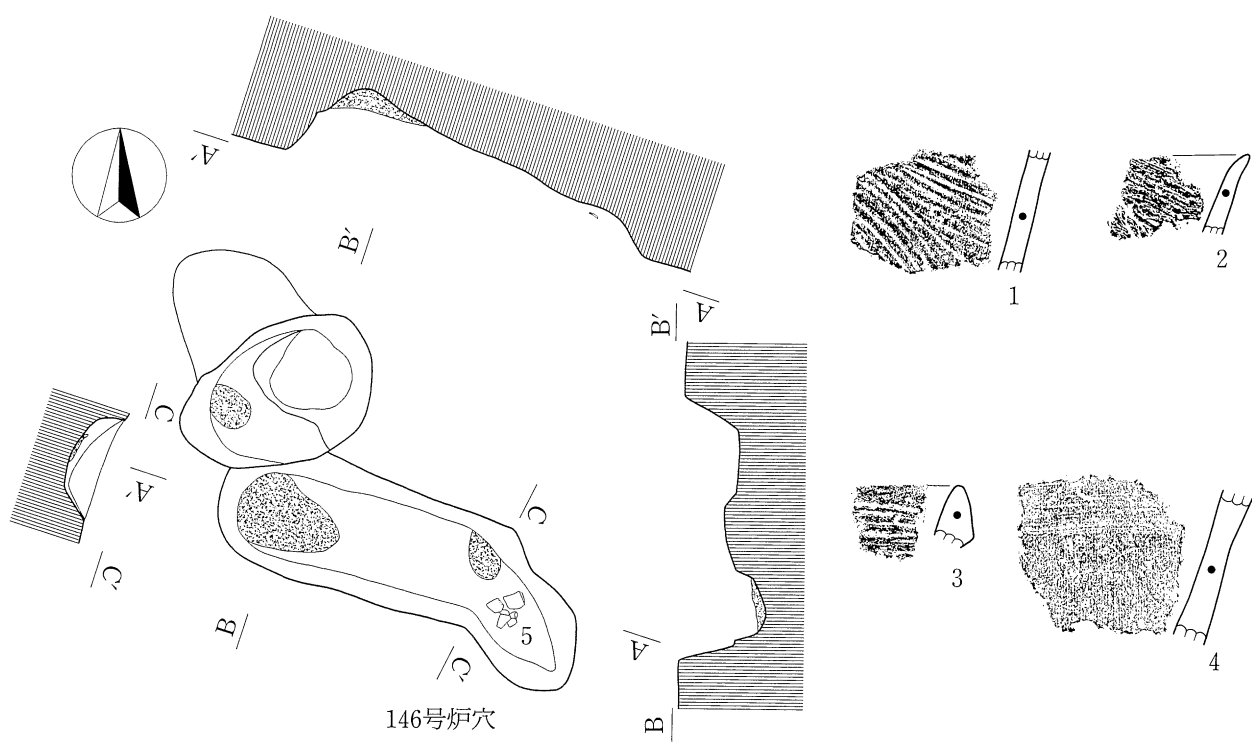
H N—27、28、37、38区に所在する。13カ所に焼土面が確認されている炉穴で、少なくとも7基以上の重複した1群と考えられる。全体の大きさは、南北5.8m、東西4.2m強で、折れ線状に連なって重なった溝状の炉穴である。南側の焼土面から、縄文土器が出土している。1～3は無文の口縁部である。胎土に繊維を含み、内外面ともにナデによる調整。1は焼成後の回転穿孔を伴う。4は太沈線と細沈線の結束部分に刺突文を施している。胎土には繊維を含まない。5は貝殻の背圧痕である。6は貝殻腹縁文を施している。7は横位の隆帯を伴う以外は無文で、内外面はナデである。8も内外面ナデ調整で文様を伴わない。9は縦に分割する沈線ではなく、L字状の区画線に斜行する数本の沈線を加えた単位文様で構成されているようである。施文工具は、半截竹管と棒状工具の2種類が使われている。胎土に繊維を多く混入し、内外面ともに明瞭な擦痕を伴う。口唇部にキザミを施すが、散漫な施文である。これら土器の時期は、4が田戸下層式、それ以外は絡条体圧痕文を伴う例などがないことから野島式前葉と判断されよう。

256号炉穴（第18図、写真図版8・96）

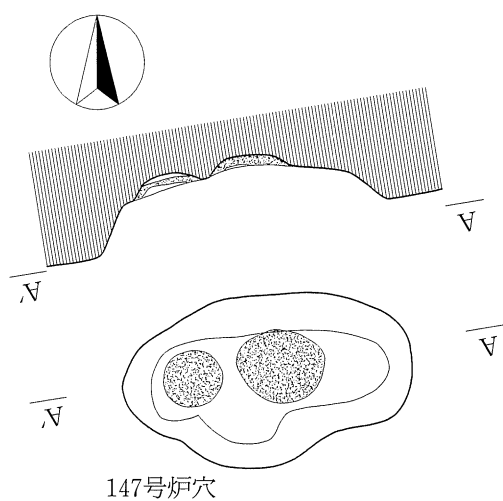
G N—100区に所在する。長軸さ1.8m、短軸0.6m、深さ0.6m程度の楕円形の炉穴で、北西隅部分に焼土面が見られる。焼土面からはずれた位置で、縄文土器1点が出土している。胎土に繊維を多量に含んでいる。内外面の調



第13图 炉穴群位置图



0 3m
(1/60)

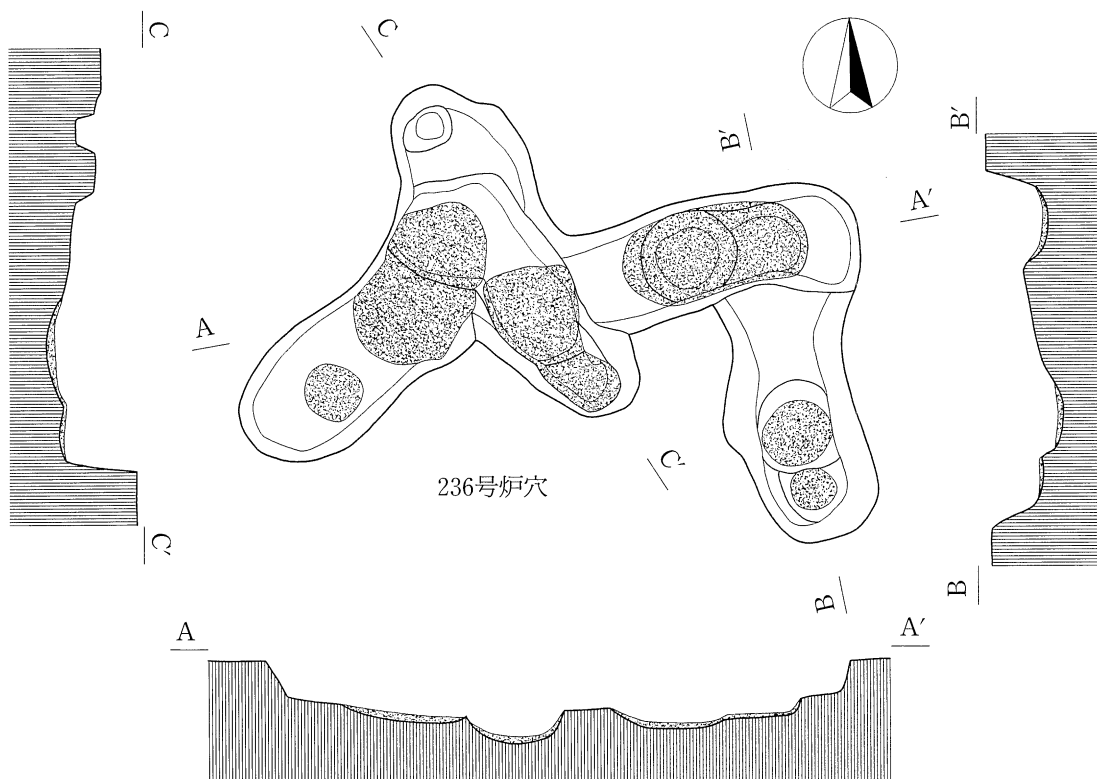


0 3m
(1/60)



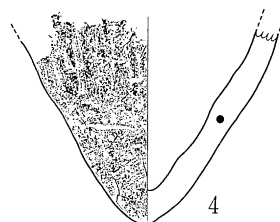
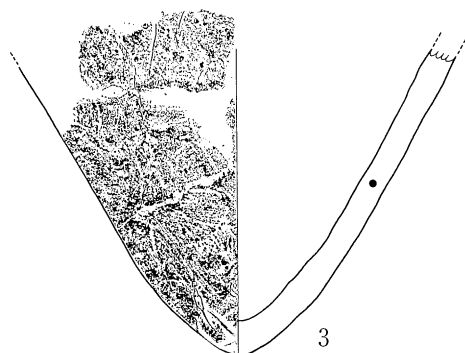
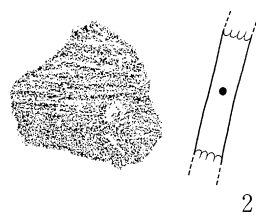
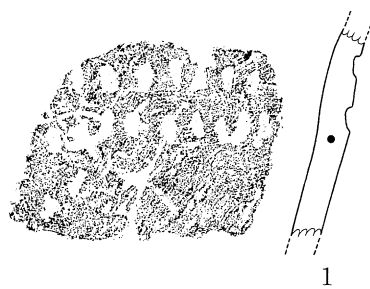
0 10cm
(1/3)

第14图 146号・147号炉穴



236号炉穴

0 3m
(1/60)

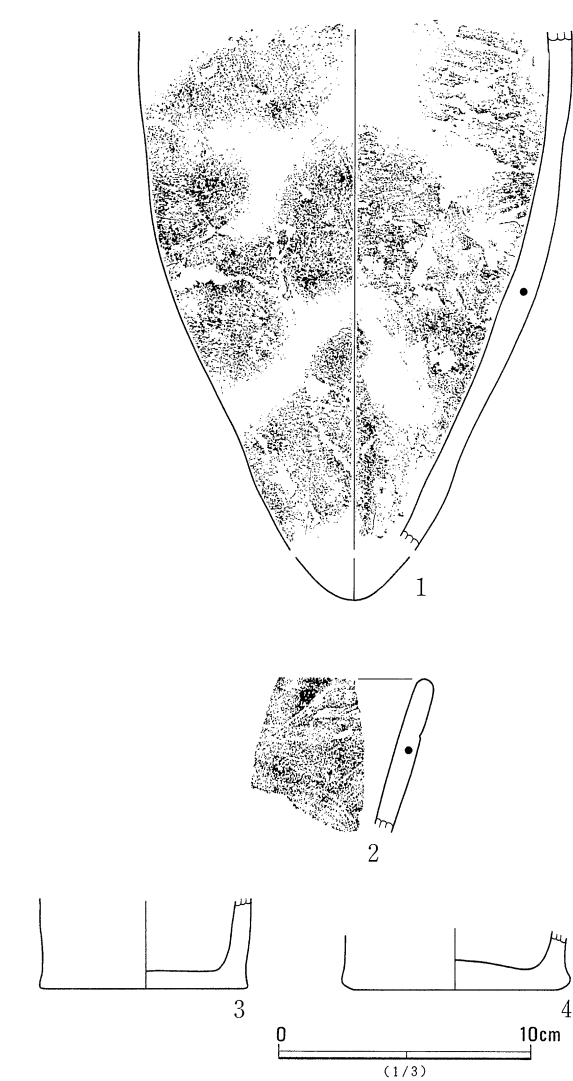
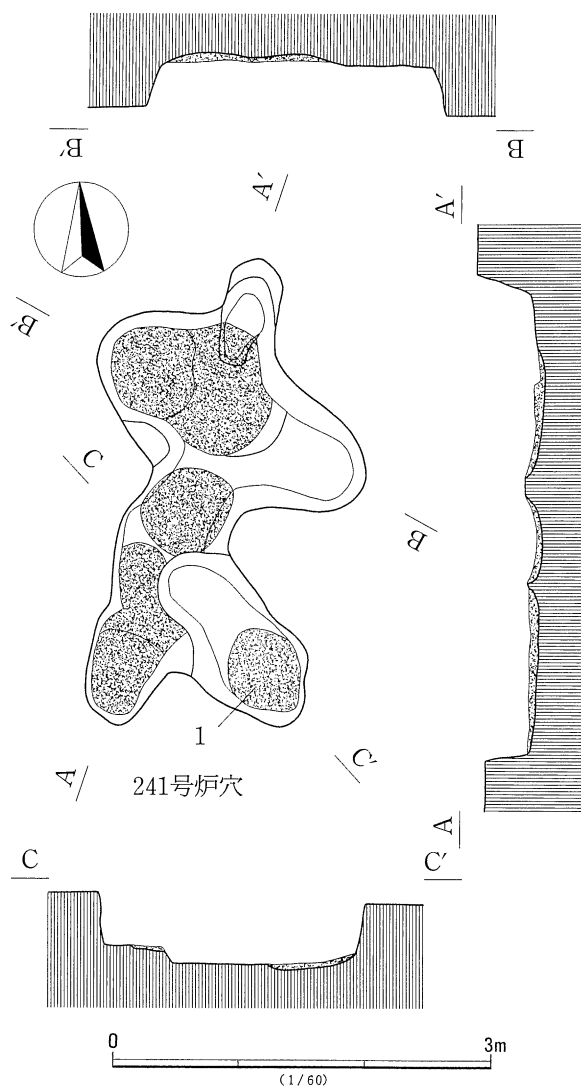


0 15cm
(1/3)

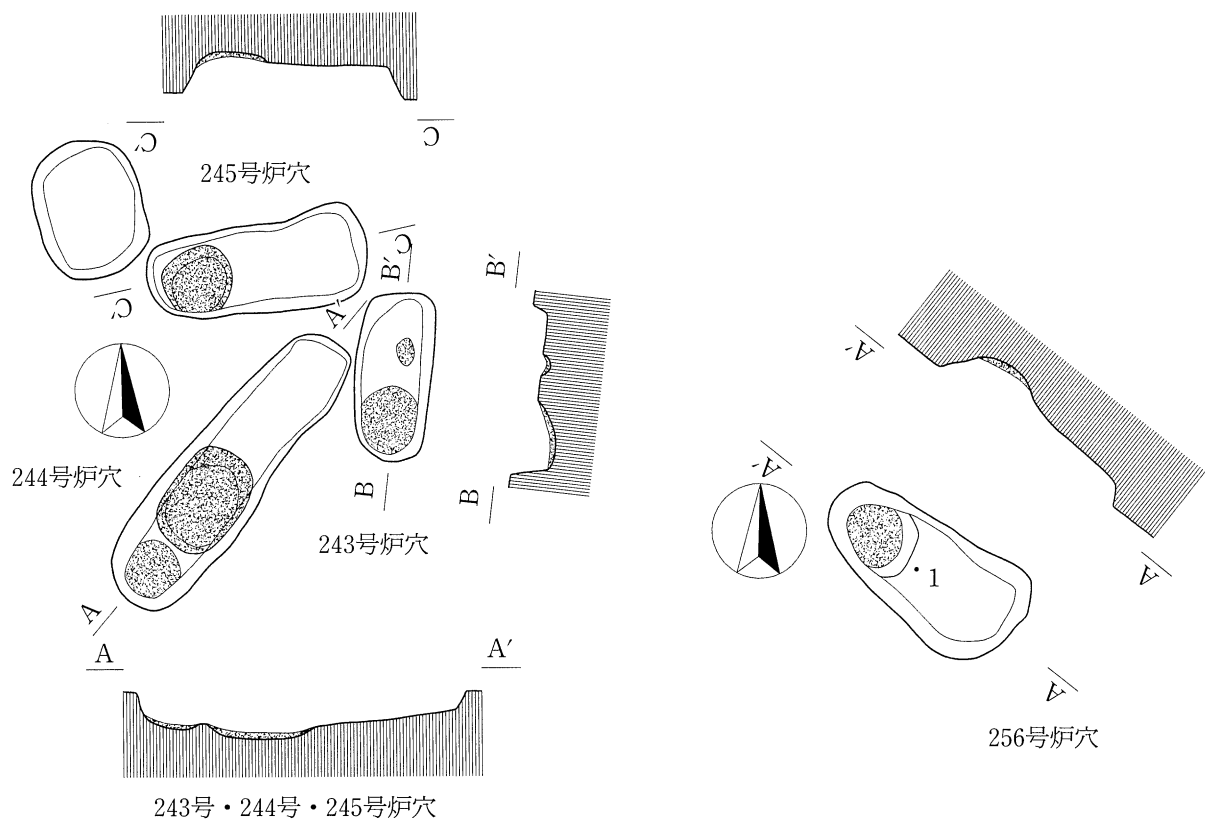
第15图 236号炉穴



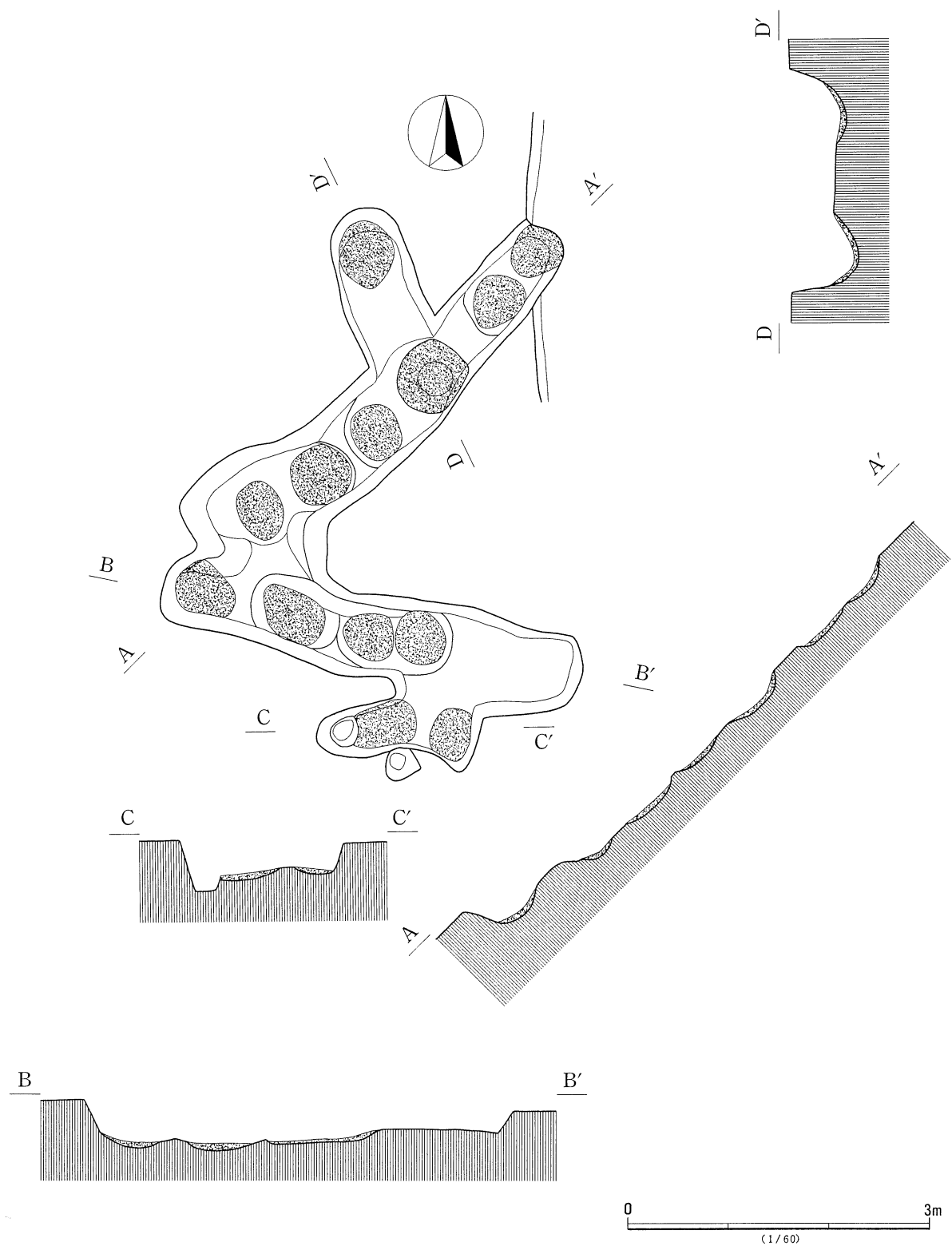
第16图 237号・238号炉穴



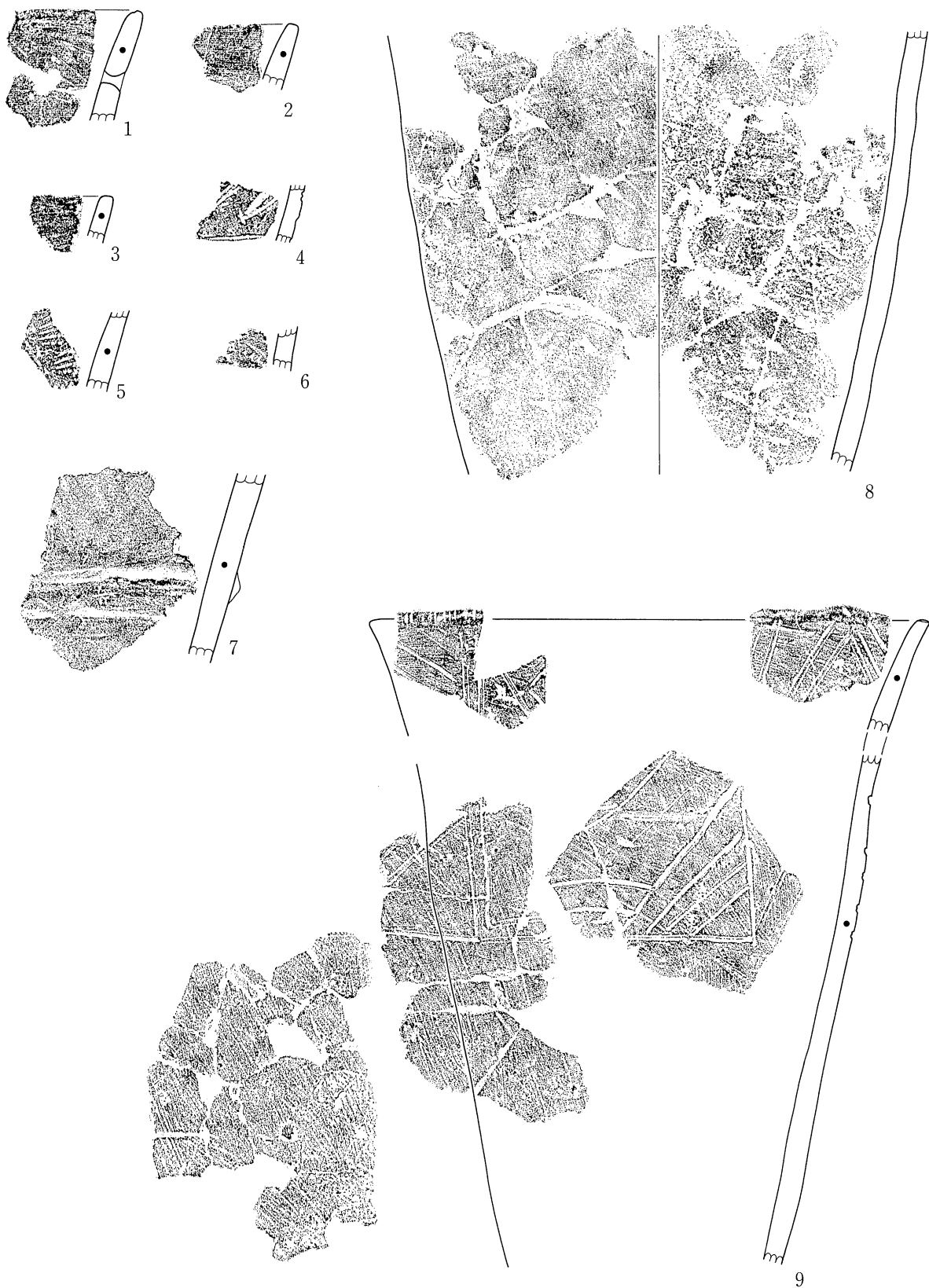
第17图 241号・242号炉穴



第18图 243号・244号・245号・256号・257号炉穴



第19図 250号炉穴



第20图 250号炉穴遗物

整は粗い。田戸上層式から子母口式であろう。

257号炉穴（第18図、写真図版8）

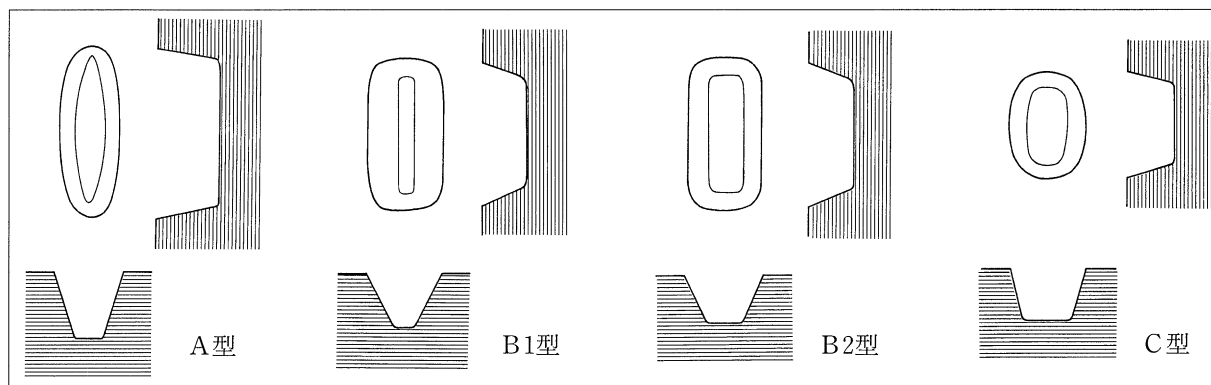
G N—58区に所在する。長軸さ2.1m、短軸1.1m、深さ0.5m程度の楕円形炉穴である。南側には径80cm程度の焼土面を有している。遺物の出土はない。

(2) 陥穴（第21～41図、写真図版9～19）

ここに言う陥穴(おとし穴)とは、山野に棲息する動物を捕獲するために掘られた土坑をさす。現在縄文時代を主体として陥穴と判断されている土坑は、日本列島全体で膨大な数にのぼっている。坊作遺跡の調査区内からは、この陥穴と考えられる土坑が全部で102基検出されている。陥穴はある程度の間隔をもって多数並列し、遺跡が立地する台地の北東から入り込む谷頭を囲むように、概ね北西から南東方向に向かって検出されている。一見して一部の陥穴は計画的に構築されたことは明らかである。ここでは、陥穴個々の内容については一覧表に譲ることにし、形態・方位・分布・時期などについてまとめてみることにしたい。陥穴の調査については土層断面の記録をとらなかったことから覆土の状況については残念ながら検討できない。また今回報告する陥穴の中には、調査区内の位置が不明なものや位置が判明しているが正確な形態が確認できないものが6基ある。従って一覧表には一部の陥穴について計測し得るデータのみを掲げていることをあらかじめお断りしておく。

陥穴の形態と規模

検出された102基の陥穴の形態は、楕円形ないしは長楕円形を呈するものが主体である。検出面の形態と底面の形態はほぼ相似形であるといえる。また、底面に杭痕と思われる小ピットなどの付属施設が検出されている例は皆無である。攪乱や他の遺構との切り合いによって検出面の形態が大きく損なわれているものもあるが、陥穴の形態についておおよそ以下のように分類することができる。



第21図 陥穴形態模式図

A型 長楕円形を呈し、両端の幅が狭く、特に底面では両端が尖り気味になるもの。規模は他の形態の陥穴に比べ大きく、検出面からの深さは比較的深いものである。平均の長径は206cm、短径34cm、検出面からの深さは118cmである。5基検出されている。全体の5%にあたる。394号跡を典型とする。

B型 長楕円形を呈し、四方がやや四角く張る形態で、底面形もほぼ検出面形に相似している。平均の長径は124cm、短径32cm、検出面からの深さは79cmである。78基検出されている。全体の76%を占めている。B型には底面の短径がある程度あり比較的広い安定した底面となるものと、短径が小さく狭小な底面となるものの2種類があり、便宜的に短径30cm未満のものをB1型、30cm以上のものをB2型として分類する。

B1型 29基あり、全体の28%を占めている。平均の長径は118cm、短径は23cmである。254号跡を典型とする。

底面の中が狭小な感じを受ける一群である。

B2型 49基あり、全体の48%を占めている。平均の長径は128cm、短径は37cmである。293号跡を典型とする。底面が巾広で安定した感じを受ける一群である。

C型 楕円形を呈し、全体に丸味のある形態である。底面もほぼ検出面形に相似している。平均の長径は92cm、短径47cm、検出面からの深さは79cmである。19基検出されている。全体の19%を占めている。111号跡を典型とする。

主軸方位

長径の方位を主軸として、第24図に方位を示してみた。2基の陥穴が全く方位を異にする以外は、ある程度まとまりのある主軸方位を示している。主体となる方位は、N-26°-EからS-60°-Eまでである。第25図の遺構分布図を見ると北東から入り込む小谷の谷頭に向かってこれら陥穴群が構築されていることは間違いないと言えよう。方位を全く異にする2基(293号と276A号)は、B2型及びC型であり他の陥穴との形態的な違いがないことから、2基は当時の地形や植生など何らかの影響によって主軸方位が変更されたのではないかとと思われる。

分布

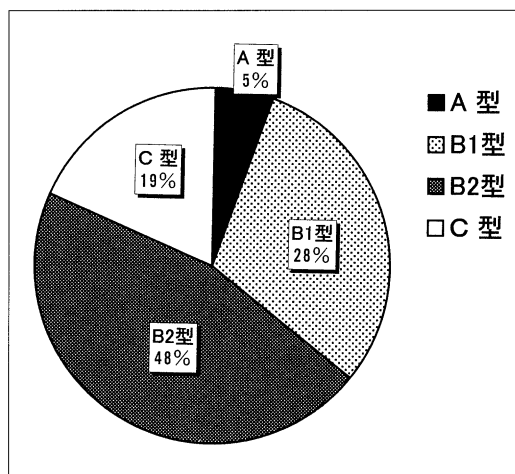
検出された陥穴群は、明らかにほぼ一定の間隔を保持して連なるグループを構成しており、その構築が計画的に行われたことは間違いなからう。短軸方向にある程度の間隔をもって北西から南東方向に並ぶグループ、北東方向から入り込む谷の谷頭を囲むように配置されたグループである。この2グループ以外の陥穴を含めて3つの群に分類してみる。

第Ⅰ群 北西から南東方向に並ぶ群で2支群に分けられるようである。西側をⅠa群、東側をⅠb群とする。2支群は、それぞれが独立して群を構成しているわけではなさそうで、谷頭の部分では両支群が重なり合うように見え、2支群が並列しているかあるいはX字状に交差していると考えられる。同一集団による計画的な構築と考えられ、時期的には2支群に大きな隔たりはないものと思われる。

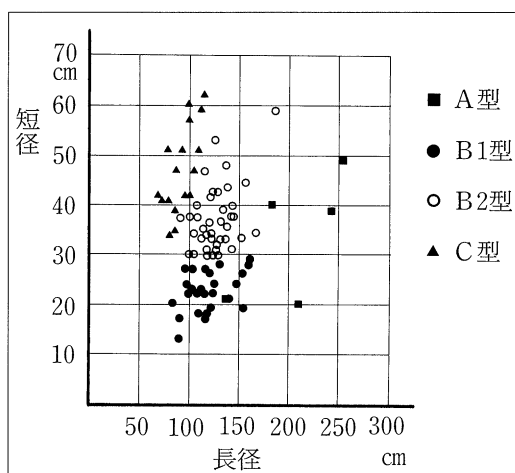
Ⅰa群 14基からなるグループをⅠa群とする。Ⅰb群よりも各陥穴の間隔があり散漫である。陥穴の形態は、B1型が4基、B2型が7基、C型が3基である。

Ⅰb群 28基からなるグループをⅠb群とする。各陥穴の間隔はⅠa群よりも密である。陥穴の形態は、B1型が10基、B2型が8基、C型が10基である。

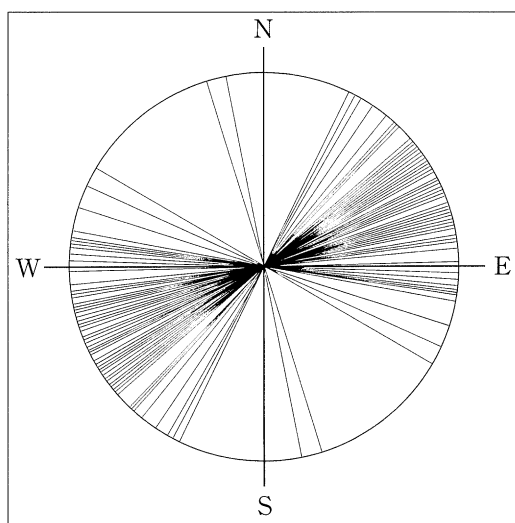
Ⅱ群 Ⅰ群に比べまとまりはないが、北東から深く入り込む谷の谷頭を中心とするグループである。どの程度



第22図 陥穴の形態別割合



第23図 陥穴の底面規模



第24図 陥穴主軸方位



第25図 炉穴および陥穴分布図

の範囲までをひとつのグループとするかは難しいところだが谷頭から大きく外れるものは含めないことにする。39基からなる。陥穴の形態は、B1型が12基、B2型が27基である。

III群 I・II群以外のものを本群とする。I・II群のようなまとまりはない。19基が含まれる。この中にはA型の5基が含まれておりIII a群とする。残る14基をIII b群とし一応分離しておく。III a群の陥穴は互いに関連性はないと考えられる配置であり、分散している。III b群についても同じ様なことが言える。III b群の陥穴の形態は、B1型が2基、B2型が6基、C型が6基である。

時 期

千葉県下で発見される陥穴の一般的なあり方と同じく、覆土内から遺物が出土した陥穴は皆無であった。遺構の性格上遺物を伴わないのは当然のことであろう。このため、陥穴群が構築された時期を特定するのは難しい事であるが、若干の検討を行い、陥穴群の構築時期を絞り込んでみることにしたい。まず形態の違いによる時期差があるのかどうかであるが、これまで見てきたようにI・II群はそれぞれ組織的で計画的な構築が行われた陥穴群であろうと考えられ、特にI群は陥穴の間隔からその計画性を強く示している。それぞれの群にはB1型・B2型・C型の陥穴が含まれており、形態的な違いによる時期差はないと考えられる。ただIII b群については、まとまりはなく群を構成しているわけではないことから、I・II群の構築時期とは若干前後するかもしれないが、形態的にI・II群の陥穴と同じ規模・形態のものが混在することから、I・II群と相互に補完する関係であろうと推測される。A型については、千葉県下の北総台地で一般的な縄文時代早期とされる溝型の陥穴に類似しており、他の形態の陥穴とは様相を異にしている。中村信博が溝型の陥穴の盛行時期を草創期後半から早期前半としており、同様の時期がA型に与えられる可能性が高いと思われる(中村 1998)。いったいI・II群の構築時期はいつ頃であろうか。本来、陥穴は居住域に構築される可能性は低く、狩猟を目的とするエリアに存在すると考えられることから、今回の調査によって検出された竪穴住居跡群の集落時期、すなわち弥生時代後期、奈良・平安時代の8世紀中葉から10世紀初めにかけての国分寺・国分尼寺の造営に関連した時期には、明らかに伴わないと考えられる。また、これらの時期の竪穴住居跡とは一部の陥穴が切り合う関係にある点からも、陥穴群が集落と同時期に構築された可能性はないと言える。隣接する祇園原貝塚の調査結果では、報告書によるB分類の土坑の中に坊作遺跡で検出された陥穴に類似したものが認められるが、連続した配置を示すまとまりはなく計画性はない(忍澤ほか 1999)。市原市内で同様の陥穴列が検出された例では上新関遺跡の例があるが、2～4基の小規模な陥穴列で、形態は早期と思われる溝型の陥穴である点から、B・C型を主体とする坊作遺跡の例とは異なっている(田所 1999)。前述したように遺物を伴わないことから時期を特定しにくいものの、いくつかの点から集落以外の時期である旧石器時代末葉から縄文時代、古墳時代、中・近世のいずれかの時期であろうと考えられる。古墳時代に作られたとされる陥穴の例は今のところ検出例を知らない。可能性としては薄いと考えられる。また中・近世の可能性がないわけではない。特に近世以降の構築であった場合は、地境に位置したり、馬土手などの遺構との何らかの関連性が見いだされてもよいと考えられる。発掘調査以前の地形図において陥穴の存在を推測させるようなデータを読みとることは難しく、近世以降の構築の可能性もまた低いのではないかと考えられる。消去法的な結論ではあるが、坊作遺跡から検出された陥穴の時期として最も可能性が高いのは旧石器時代末葉から縄文時代にかけての時期であろうと推測される。ただ、坊作遺跡から検出された唯一時期が明確な早期後半の炉穴とは場所的に重なる地点があることから早期後半の時期は除かれるであろう。

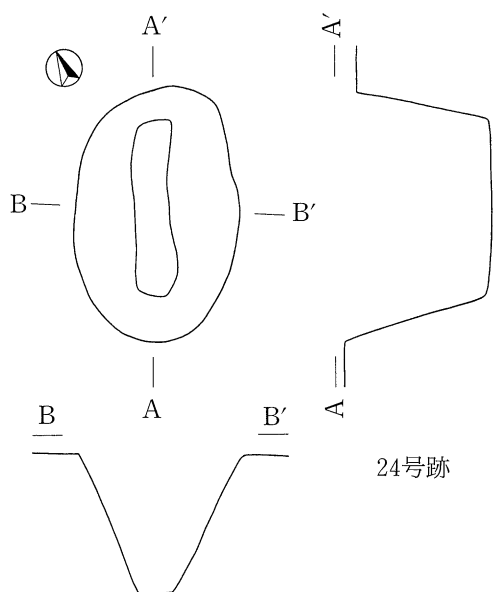
参考文献

- 中村信博 1998「溝型陥穴研究序説」栃木県考古学会誌第19集 栃木県考古学会
忍澤成視ほか 1999『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告V 市原市教育委員会
田所 真 1999『能満上細工多遺跡・能満上新関遺跡・能満番面台遺跡・能満旧三山塚』財団法人市原市文化財センター

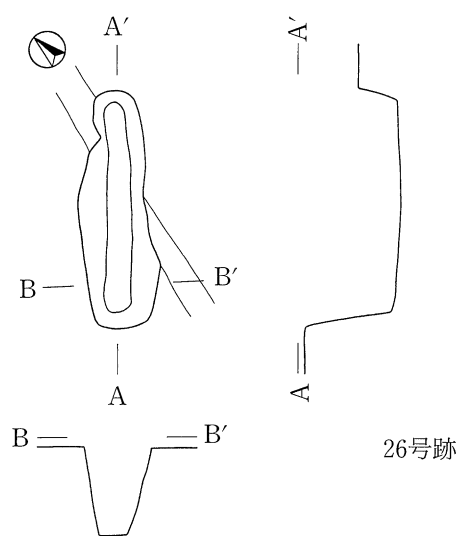
第2表 陥穴一覧表

No.	群 別	土坑 番号	位 置	形 態	検出面積(cm)		床面積(cm)		深さ (cm)	主軸方位	出土 遺物	特 記 事 項
					長 径	短 径	長 径	短 径				
1	II	24	KQ70	B2	169	110	117	30	99	N-26°-E	無	
2	II	26	KQ98	B1	157	54	139	21	61	N-49°-E	無	25号住居と切り合う
3	II	69	KQ41	B2	152	75	135	39	88	N-73°-E	無	67号住居と切り合う
4	II	79	JP79	B2	179	71	104	30	133	N-50°-E	無	
5	II	81	JP56	B2	142	77	116	31	53	N-71°-E	無	
6	II	82	JP65	B2	156	107	129	43	66	N-63°-E	無	
7	III b	96	JN87	C	119	86	87	47	72	N-49°-E	無	
8	I b	103	JO47	B2	176	115	112	33	69	N-78°-E	無	
9	I b	104	JO58	B1	153	93	112	23	86	N-53°-E	無	
10	II	105	JP43	B2	171	107	144	38	77	N-59°-E	無	
11	II	106	JP35	B2	168	88	124	43	54	N-65°-E	無	
12	II	108	JP21	B2	167	91	138	35	70	N-56°-E	無	
13	-	110	不明	B1	140	108	85	20	56	N-66°-E	無	位置不明
14	III b	111	JO26	C	118	91	74	41	88	N-44°-E	無	
15	II	117	IP84	B2	155	97	107	40	77	N-50°-E	無	
16	II	120	IP72	B2	144	79	117	34	54	N-64°-E	無	
17	I b	124	IO84	C	96	57	70	42	14	N-63°-E	無	
18	I b	125	IO85	B2	160	91	121	26	70	N-54°-E	無	123号住居と切り合う
19	I b	126	IO95	C	118	64	79	51	52	N-54°-E	無	123号住居と切り合う
20	II	140	IP61	B2	129	59	114	35	58	N-55°-E	無	121号住居と切り合う
21	II	141	IP62	B2	135	76	101	30	50	N-52°-E	無	121号住居と切り合う
22	III b	165	IM40	C	129	91	86	39	65	N-77°-E	無	
23	II	187	GP94	B1	154	81	112	23	101	N-88°-W	無	186号住居と切り合う
24	I b	195	GO42	C	144	111	99	60	86	N-79°-W	無	
25	I a	248	HN80	B2	160	90	127	30	75	N-61°-E	無	
26	I b	249	HO82	B2	160	122	117	47	116	N-68°-E	無	
27	I b	251A	HO42	C	186	132	111	59	96	N-85°-E	無	
28	III a	251B	HO42	A	220	-	139	21	89	N-50°-E	無	
29	I b	252	HO23	B1	169	78	122	19	50	N-84°-W	無	513号掘立柱建物と切り合う
30	II	253	HO70	B2	155	102	108	37	86	N-69°-E	無	
31	II	254	HP13	B1	195	78	148	24	84	N-85°-E	無	
32	III a	255	HO53	A	243	98	209	20	80	N-42°-E	無	
33	II	258	GP97	B2?	-	-	-	-	-	-	無	実測図がないため、詳細不明
34	III b	259	FP95	B1?	-	-	-	-	-	-	無	実測図がないため、詳細不明
35	III b	260	FP88	B2	-	-	-	-	-	-	無	実測図がないため、詳細不明
36	III b	261	GP09	B2	-	-	-	-	-	-	無	実測図がないため、詳細不明
37	III b	262	GQ61	C	115	85	79	51	61	N-52°-E	無	515号掘立柱建物と切り合う
38	III b	263	HO35	B2	178	68	152	33	66	N-64°-E	無	
39	I b	264	HO22	C	136	88	100	42	99	N-86°-W	無	
40	I b	265	HO02	C	130	79	96	42	90	N-81°-E	無	
41	I b	266	GO92	B1	148	52	117	17	60	N-84°-W	無	
42	I b	267	GO82	C	130	81	87	35	83	N-81°-E	無	
43	I b	268	GO73	C	117	59	82	34	79	N-89°-E	無	
44	I a	269	GN50	C	136	85	109	51	46	N-59°-W	無	
45	I a	270	GN40	B2	152	62	112	33	62	N-65°-W	無	
46	I a	271	HN19	B2	171	84	129	33	-	N-82°-W	無	235号住居と切り合う
47	I a	272	IO12	B1	181	108	116	27	87	N-69°-E	無	
48	I b	273	IO23	B2	110	59	95	29	70	N-75°-E	無	169号住居と切り合う
49	I b	274	IO33	B2	126	80	101	37	118	N-83°-E	無	169号住居と切り合う
50	I a	275	IO42	B2	244	91	144	40	70	N-72°-E	無	505号掘立柱建物と切り合う
51	III b	276A	IO44	C	157	-	114	62	116	N-17°-W	無	2基重複のため、短径は不明

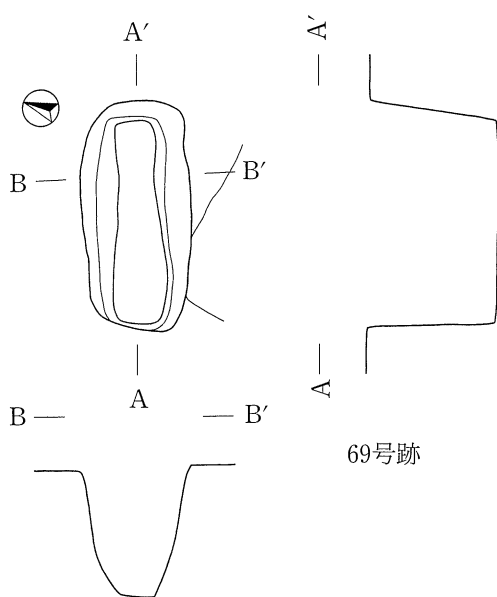
No.	群 別	土坑 番号	位 置	形 態	検出面積 (cm)		床面積 (cm)		深さ (cm)	主軸方位	出土 遺物	特 記 事 項
					長 径	短 径	長 径	短 径				
52	I b	276 B	I O 44	B 2	147	-	123	30	113	N-74°-E	無	2基重複のため、短径は不明
53	II	277	I O 88	B 1	182	70	161	29	59	N-61°-E	無	
54	II	278	I O 89	B 2	179	84	155	45	59	N-56°-E	無	
55	II	279	I P 95	B 2	206	75	165	34	96	N-57°-E	無	2基重複の可能性有り
56	II	280	J P 04	B 2	136	82	122	42	54	N-67°-E	無	
57	II	281	J P 23	B 2	142	99	124	43	61	N-43°-E	無	
58	II	282	J P 23	B 2	166	101	142	38	78	N-49°-E	無	
59	II	283	I P 92	B 2	174	87	143	40	52	N-73°-E	無	
60	II	284	I O 99	B 2	157	62	130	33	67	N-81°-W	無	
61	II	285	J P 58	B 1	170	107	99	24	81	N-49°-E	無	
62	II	286	K P 17	B 2	198	129	137	48	77	N-50°-E	無	
63	II	287	I P 91	B 2	150	72	137	33	66	N-53°-E	無	
64	I b	288	J O 37	B 2	193	92	144	31	83	N-52°-E	無	
65	I b	289	J O 16	B 2	136	67	121	33	76	N-69°-E	無	
66	III a	290	J O 75	A	323	139	253	49	166	N-30°-E	無	
67	I b	291	K P 02	B 1	178	118	118	18	98	N-54°-E	無	
68	I a	292	K O 29	B 2	172	132	119	36	88	N-61°-E	無	
69	III b	293	K P 42	B 2	234	107	186	59	128	N-12°-W	無	
70	I a	294	K P 41	C	141	98	105	47	103	N-51°-E	無	295号陥穴と切り合う
71	I a	295	K P 41	B 2	154	85	105	34	91	N-51°-E	無	294号陥穴と切り合う
72	I a	296	K P 62	C	146	117	100	57	94	N-55°-E	無	
73	I b	297	K P 34	B 1	191	126	125	24	88	N-55°-E	無	
74	I b	298	K P 45	B 1	204	144	91	13	85	N-57°-E	無	
75	I a	299	K P 74	B 1	185	98	154	26	86	N-79°-E	無	
76	II	300	K Q 72	B 2	164	106	125	31	83	N-54°-E	無	
77	II	301	K Q 65	B 2	171	112	125	53	69	N-55°-E	無	
78	II	302	K Q 66	B 1	195	83	153	19	78	N-50°-E	無	
79	II	303	K Q 35	B 1	194	96	160	28	103	N-42°-E	無	31号住居と切り合う
80	III a	304	J Q 96	A	249	91	185	40	114	N-39°-E	無	
81	III b	305	J Q 57	B 1	143	95	104	23	82	N-57°-E	無	
82	III b	306	J R 36	B 2	160	119	121	34	103	N-83°-W	無	
83	II	307	K P 43	B 1	141	90	92	17	89	N-57°-E	無	
84	I a	333	J O 77	B 2	186	85	126	32	91	N-63°-E	無	
85	-	365	不明	B 2	152	76	132	36	68	N-55°-E	無	位置不明
86	II	366	I O 20	B 1	125	81	97	27	-	N-55°-E	無	深さは不明
87	I b	379	GO 63	B 1	147	80	101	27	55	N-82°-E	無	380号土坑と切り合う
88	I b	381	GO 33	C	114	93	93	51	63	N-72°-W	無	382号遺構(性格不明)と切り合う
89	I a	383	GN 90	B 1 ?	-	-	-	-	-	-	無	実測図がないため、詳細不明
90	I b	384	I O 63	B 1	179	80	132	28	84	N-58°-E	無	
91	III b	385	J O 79	C	138	91	80	41	109	N-34°-E	無	
92	I b	386	J O 80	B 1	139	77	108	22	86	N-58°-E	無	
93	I a	387	J O 89	B 1	152	87	104	27	108	N-76°-E	無	
94	III b	388	J O 90	B 2	123	70	92	37	68	N-28°-E	無	
95	I b	389	J P 91	B 1	158	62	116	22	67	N-71°-E	無	
96	II	390	K P 07	B 2	154	73	138	44	73	N-50°-E	無	
97	II	391	K P 29	B 2	168	76	136	48	73	N-53°-E	無	
98	II	393	K Q 02	B 1	145	91	101	22	81	N-60°-E	無	
99	III a	394	G Q 19	A	233	94	244	39	139	N-68°-E	無	230号住居と切り合う
100	II	396	HP 63	B 1	158	56	124	22	88	N-73°-E	無	182号住居と切り合う
101	II	397	J Q 92	B 1	165	108	110	18	85	N-57°-E	無	309号土坑と切り合う
102	I b	398	J O 05	C	-	-	-	-	-	-	無	実測図がないため、詳細不明



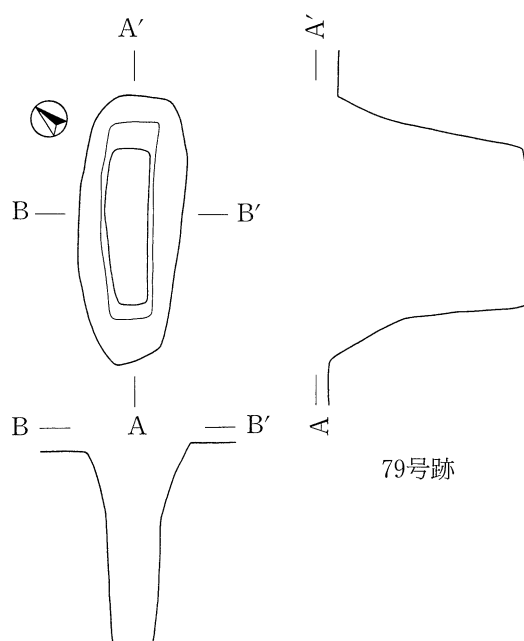
24号跡



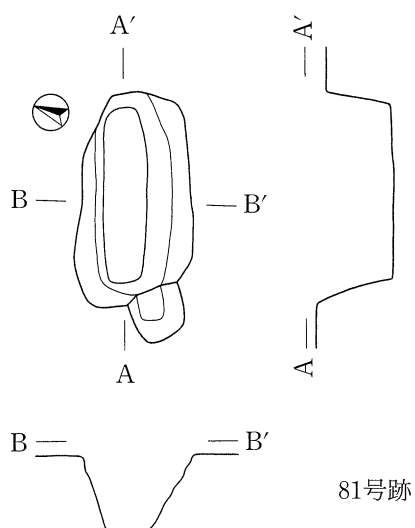
26号跡



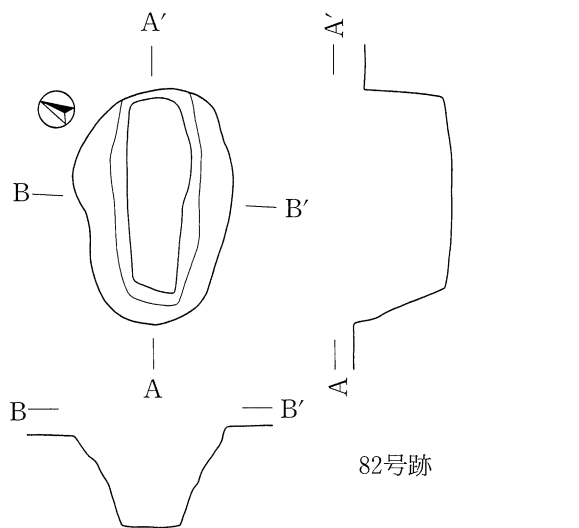
69号跡



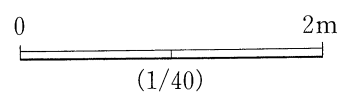
79号跡



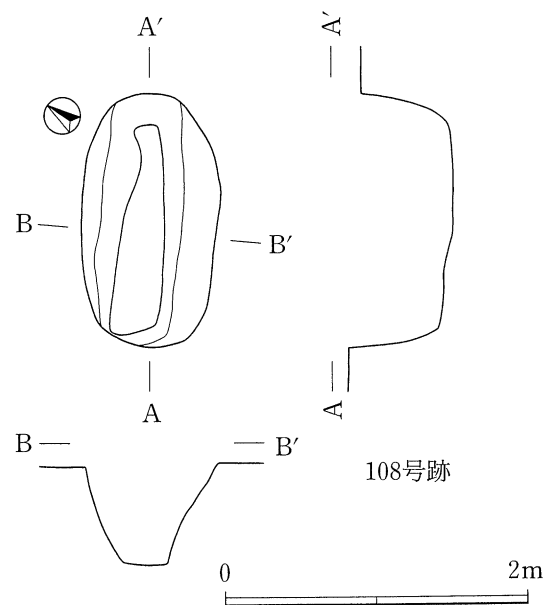
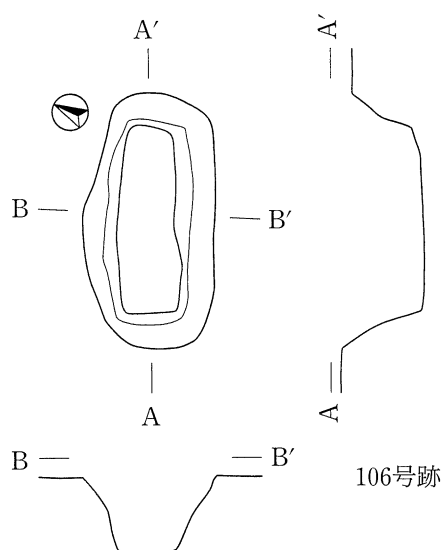
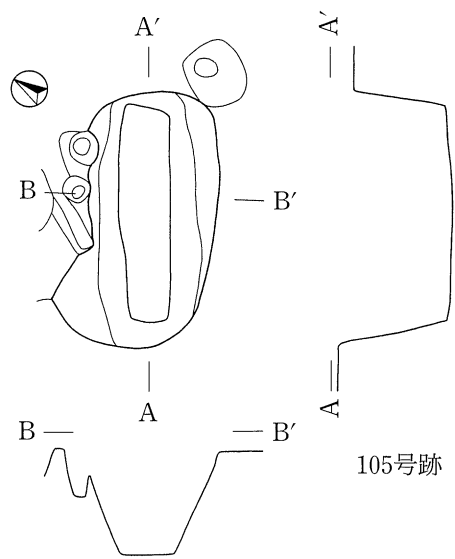
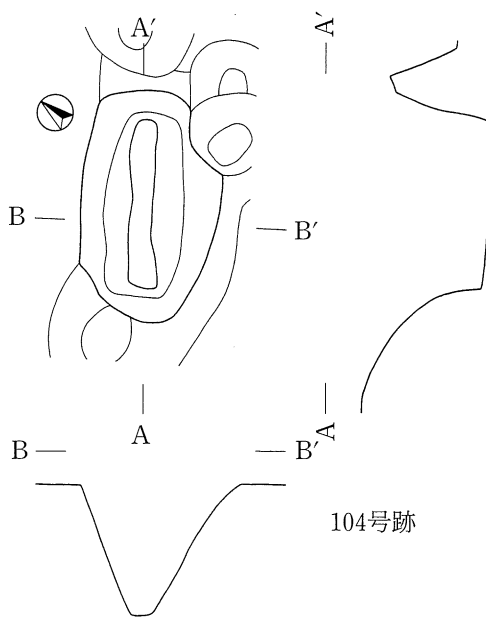
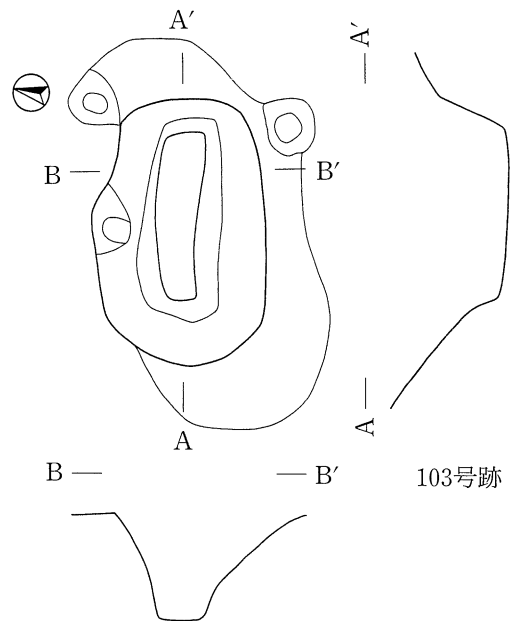
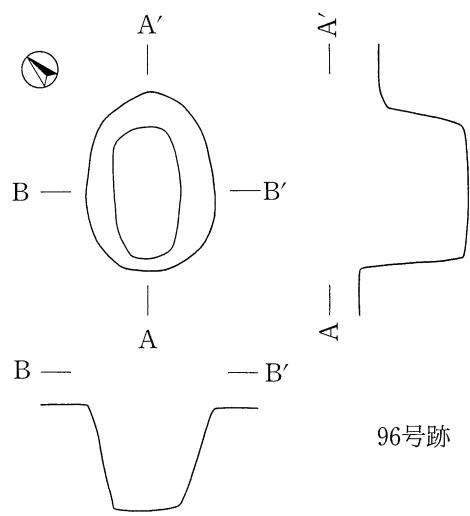
81号跡



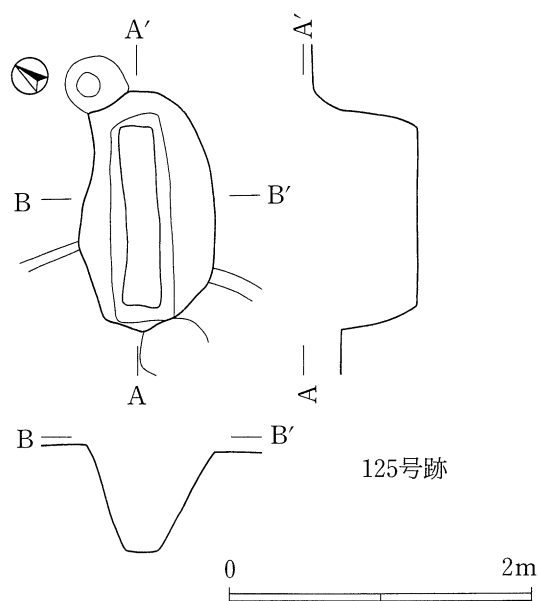
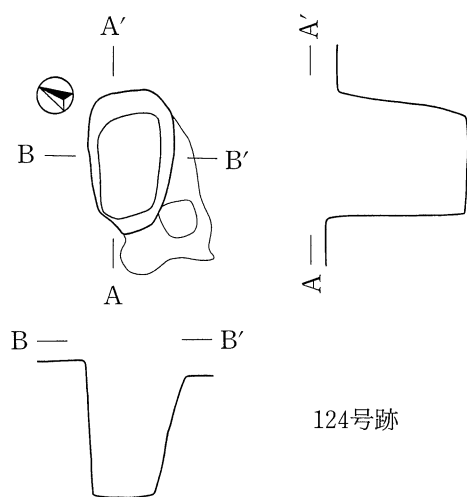
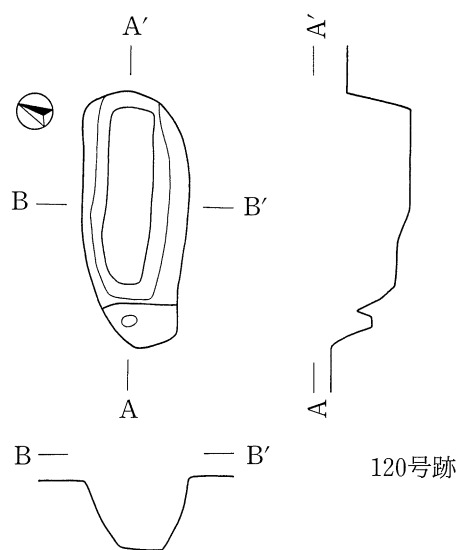
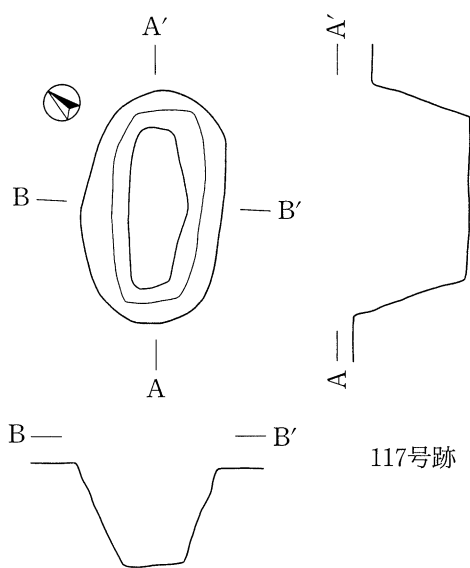
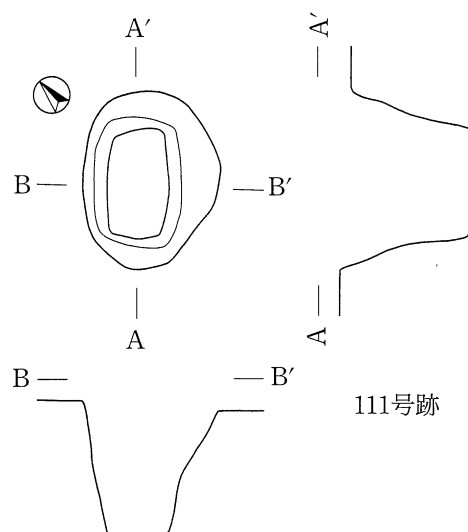
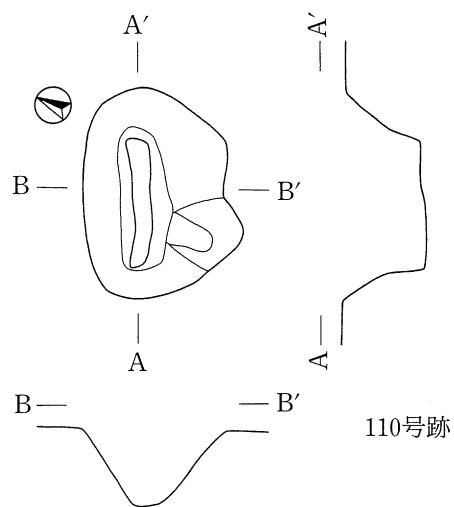
82号跡



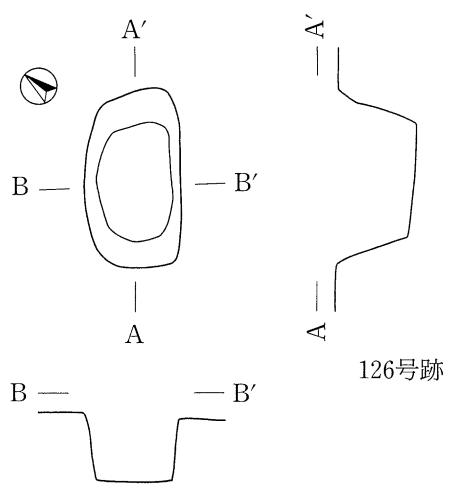
第26図 陥穴(1)



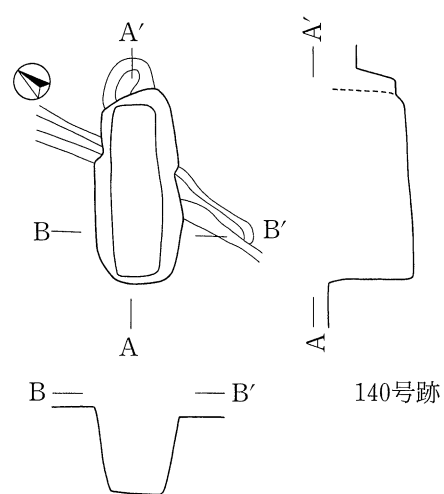
第27図 陥穴(2)



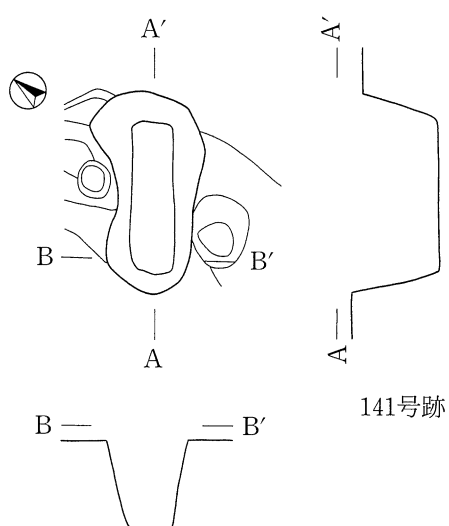
第28図 陷穴(3)



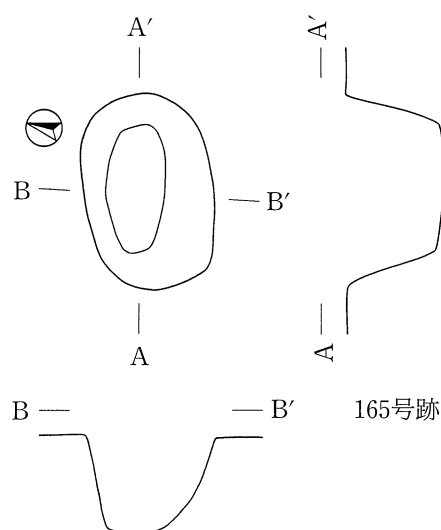
126号跡



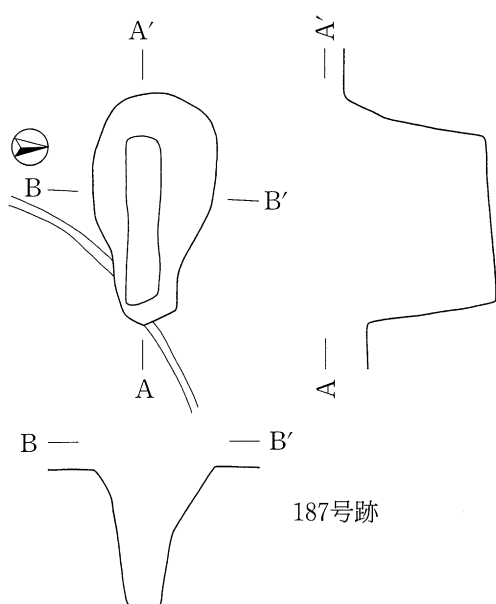
140号跡



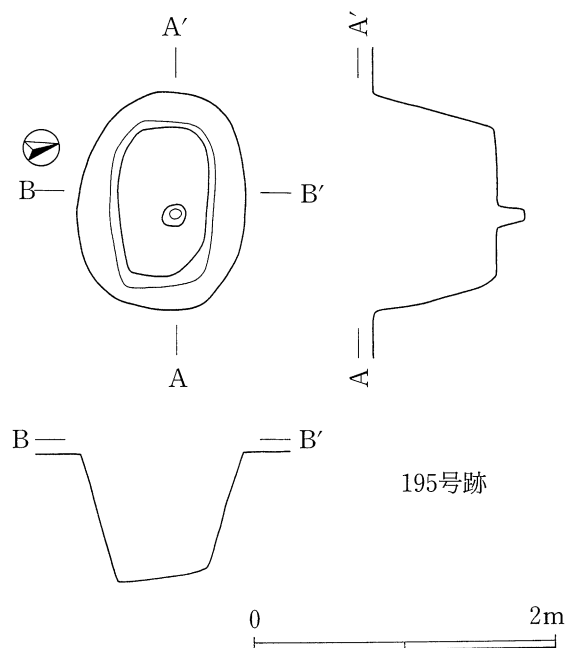
141号跡



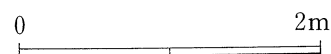
165号跡



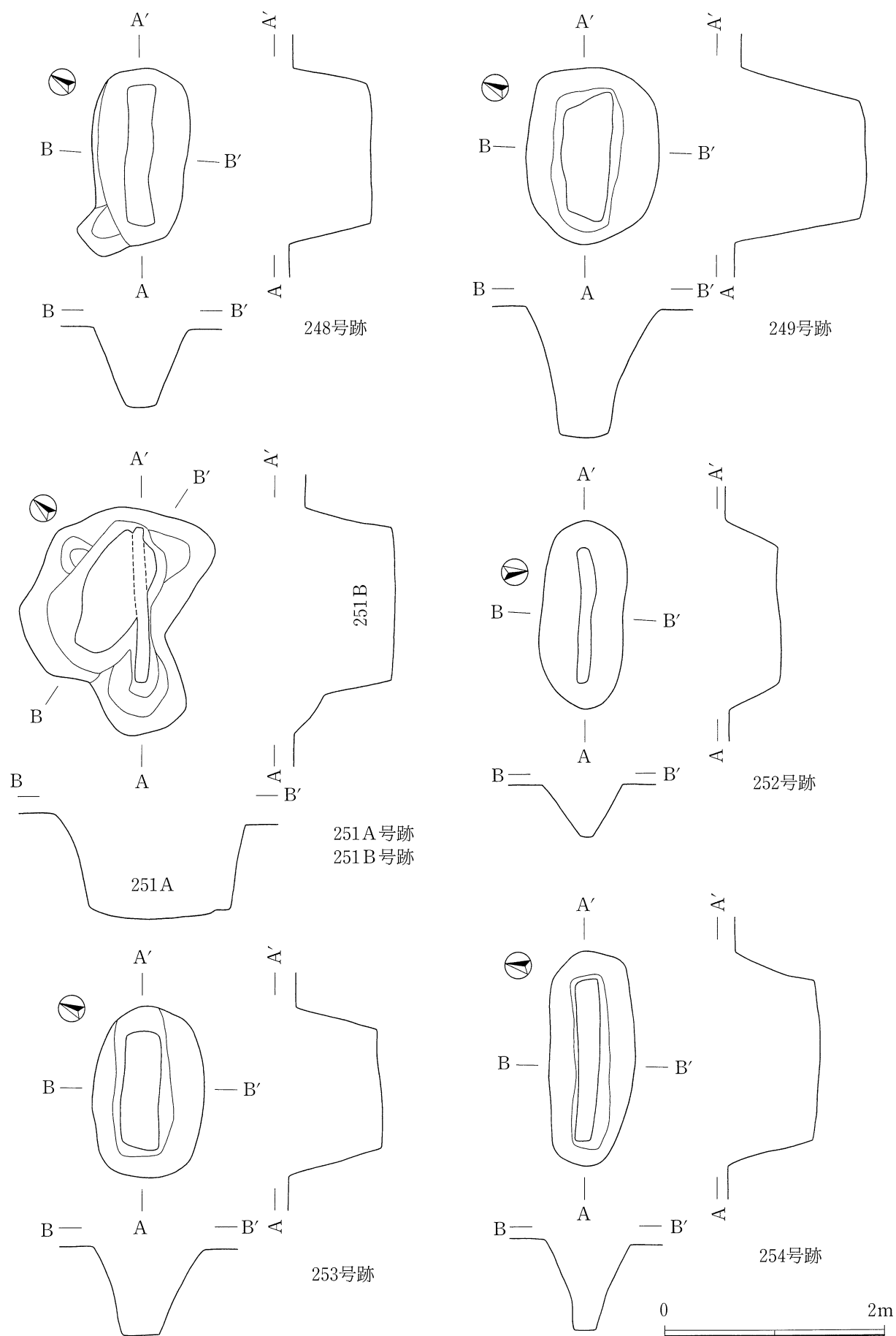
187号跡



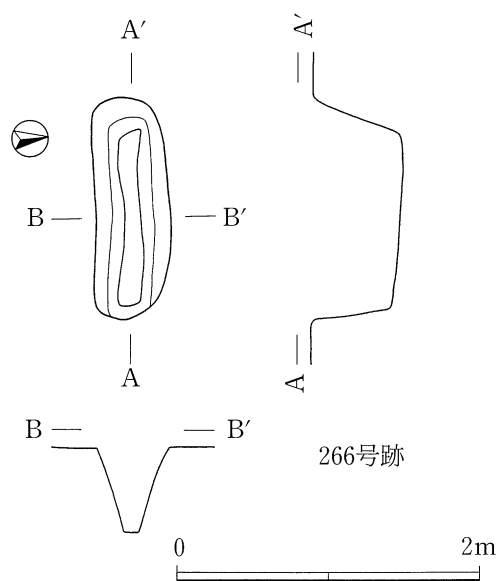
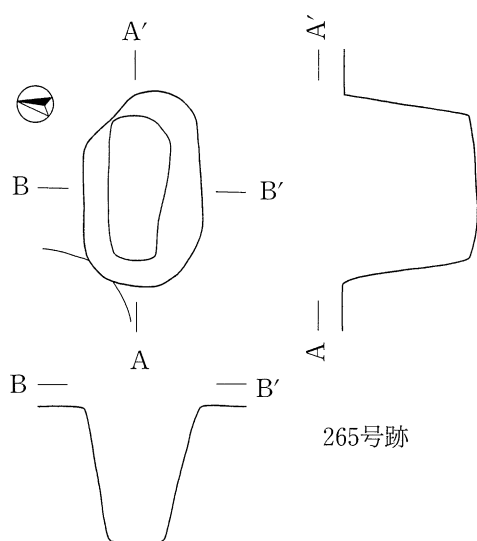
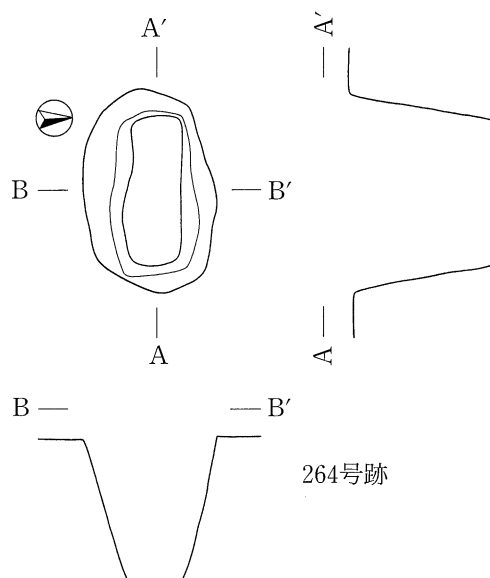
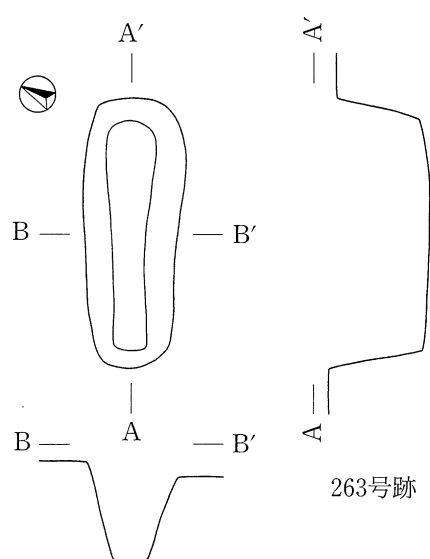
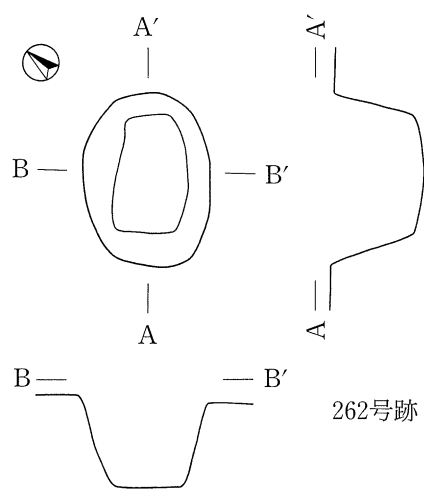
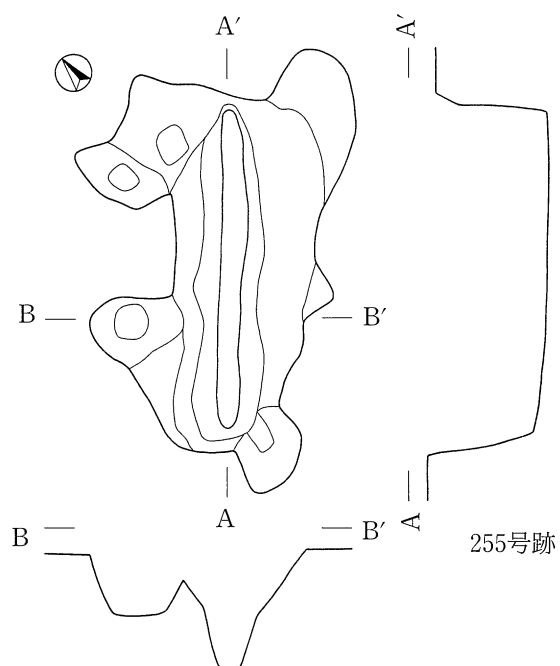
195号跡



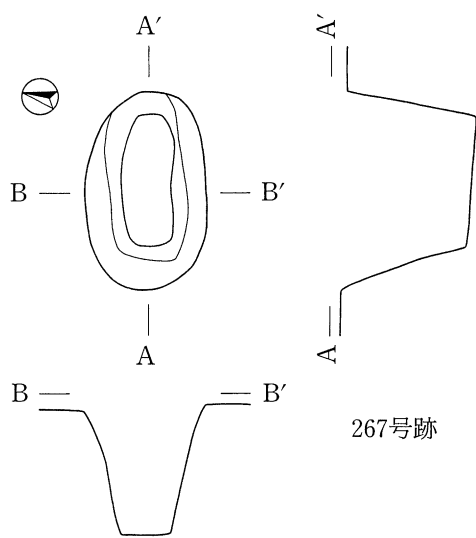
第29図 陷穴(4)



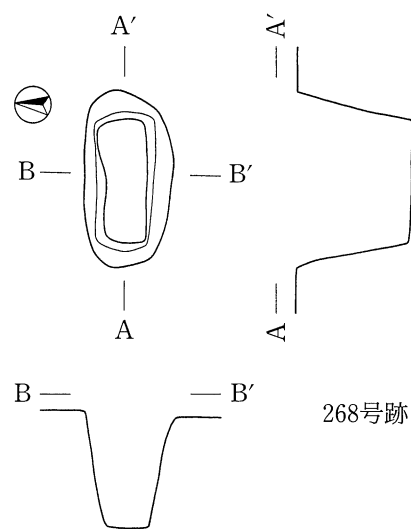
第30図 陷穴(5)



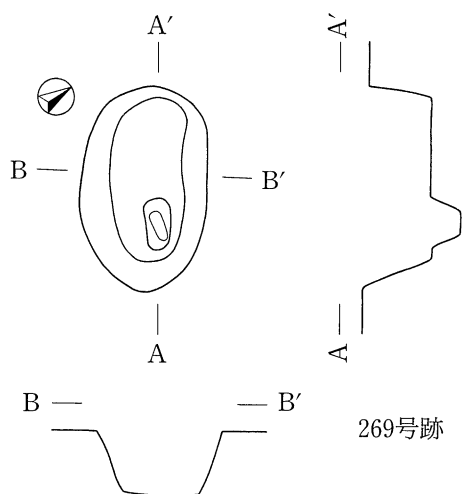
第31図 陥穴(6)



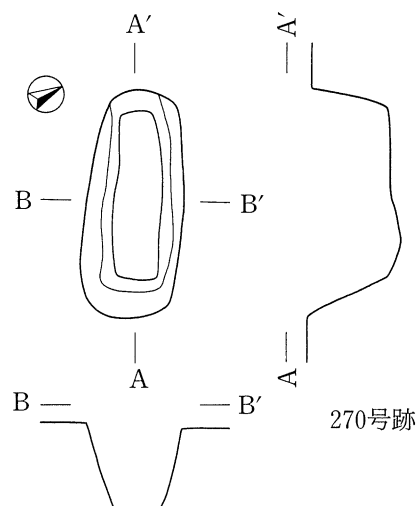
267号跡



268号跡



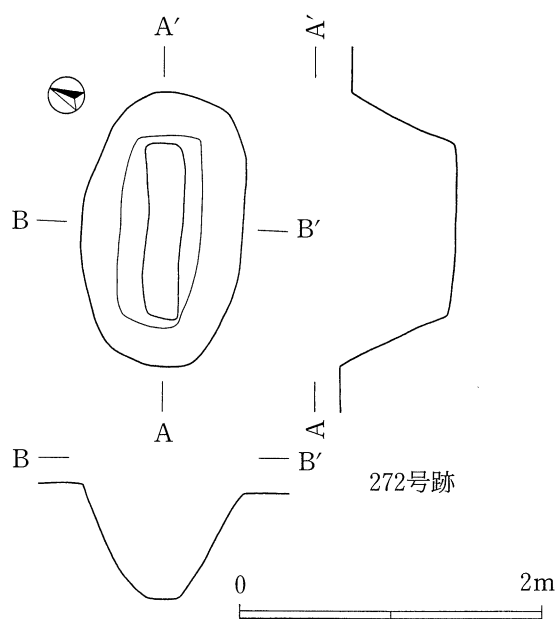
269号跡



270号跡

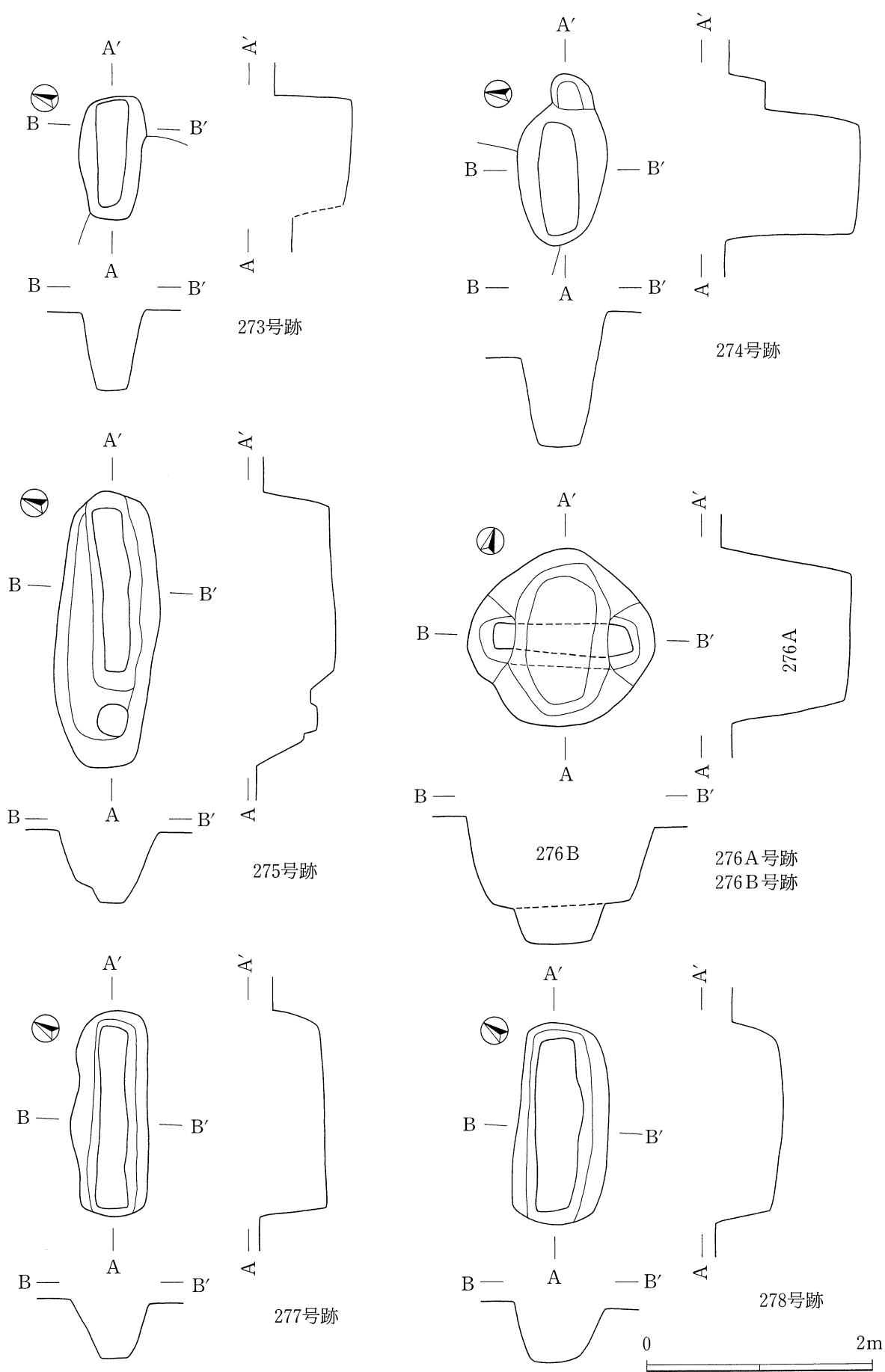


271号跡

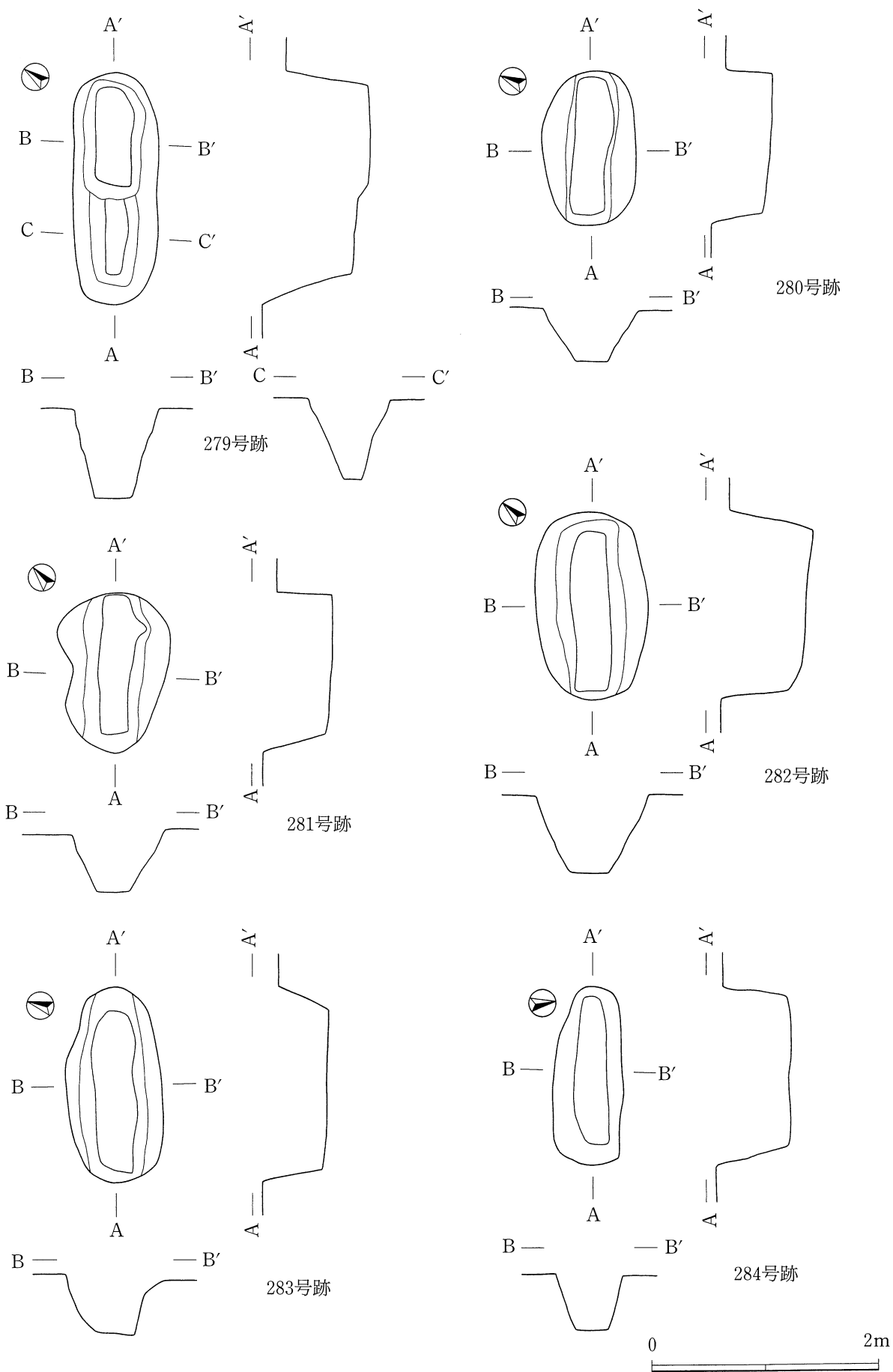


272号跡

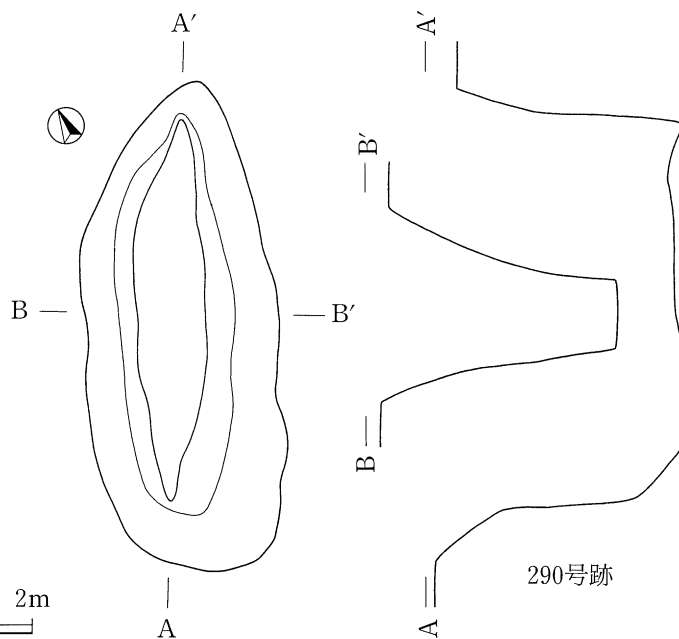
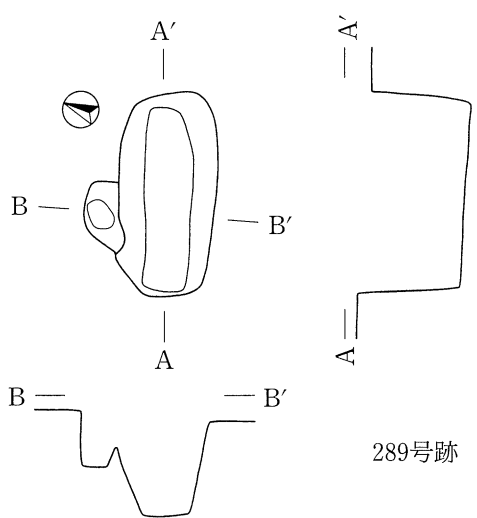
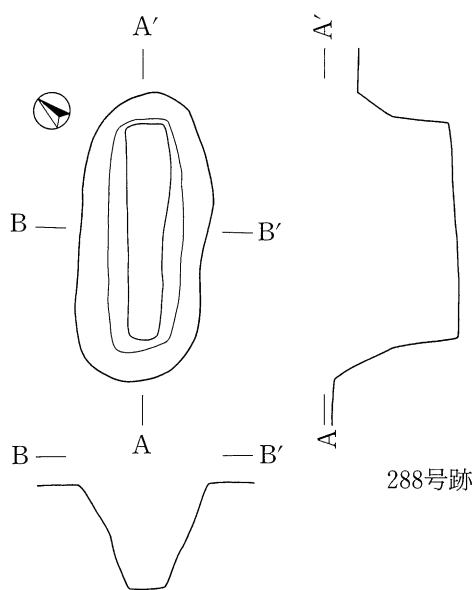
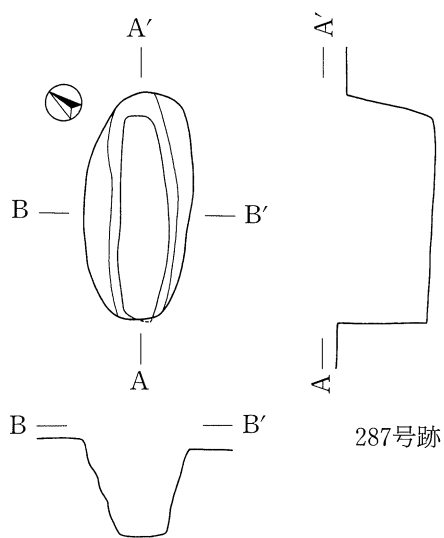
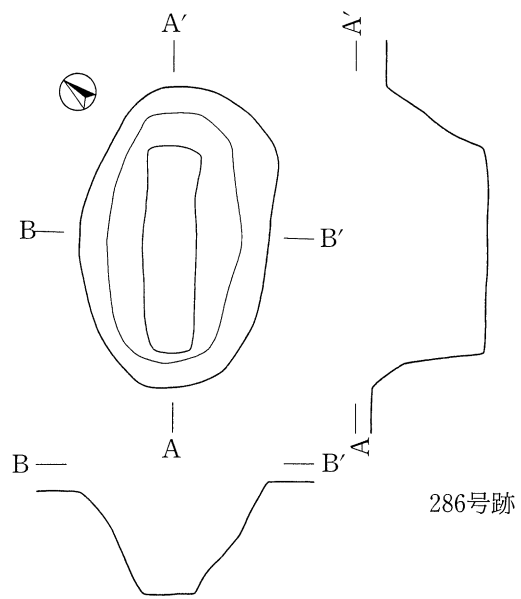
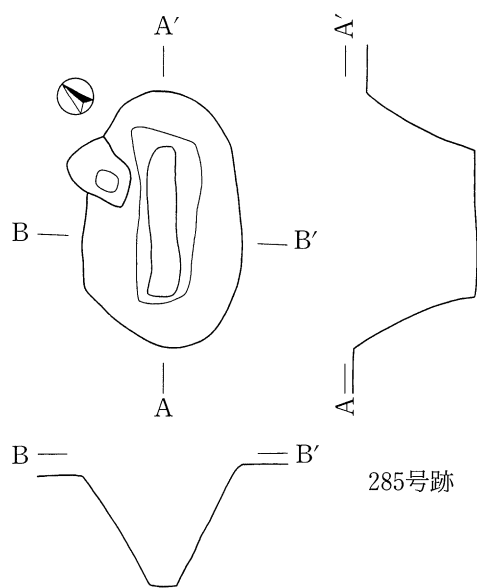
第32図 陷穴(7)



第33图 陷穴(8)

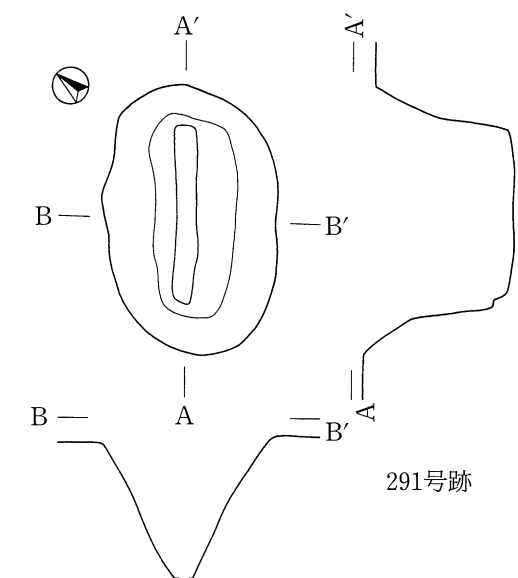


第34図 陷穴(9)

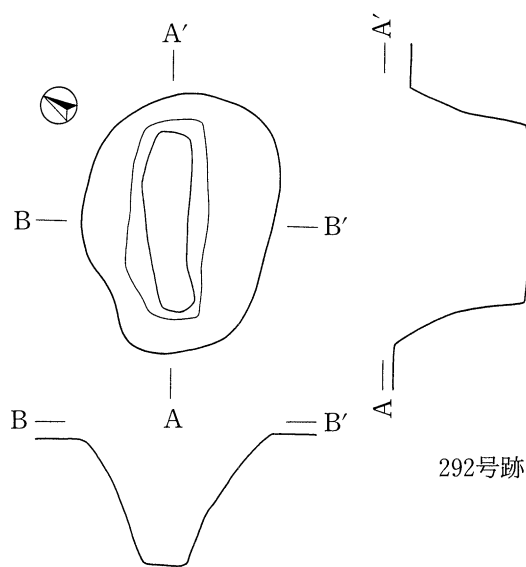


0 2m

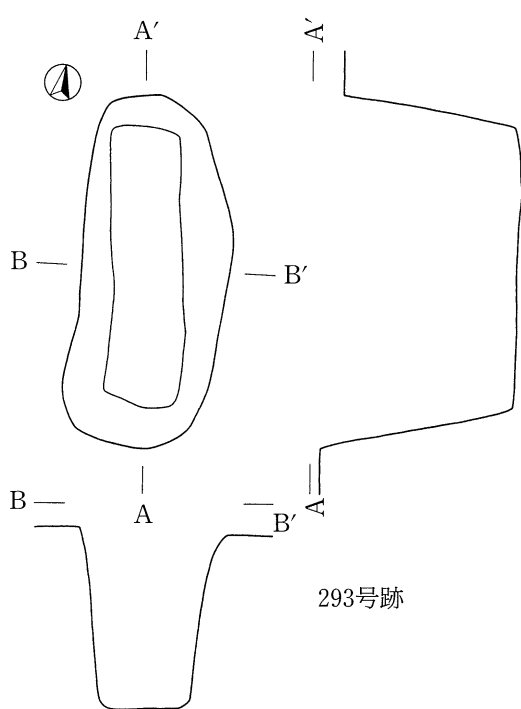
第35图 陷穴(10)



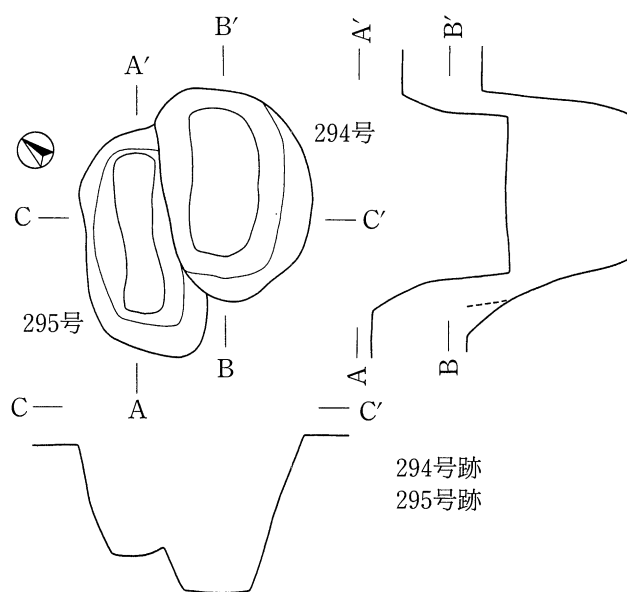
291号跡



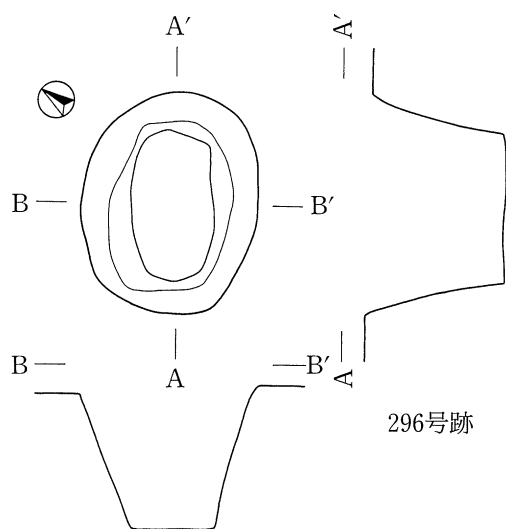
292号跡



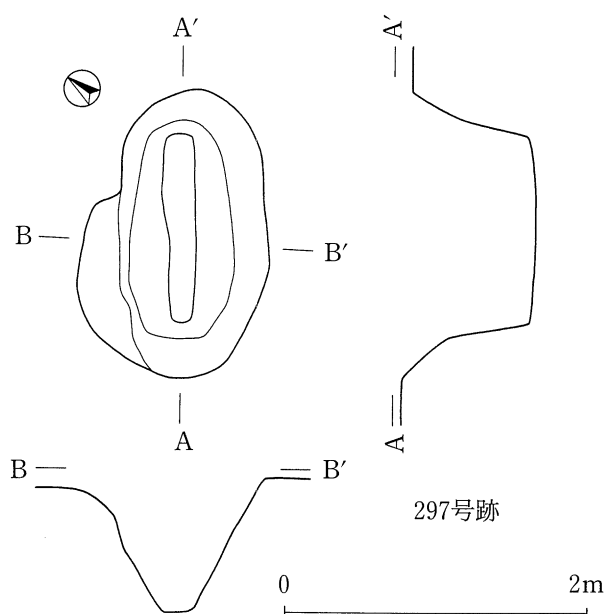
293号跡



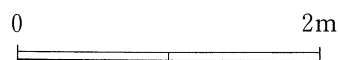
294号跡
295号跡



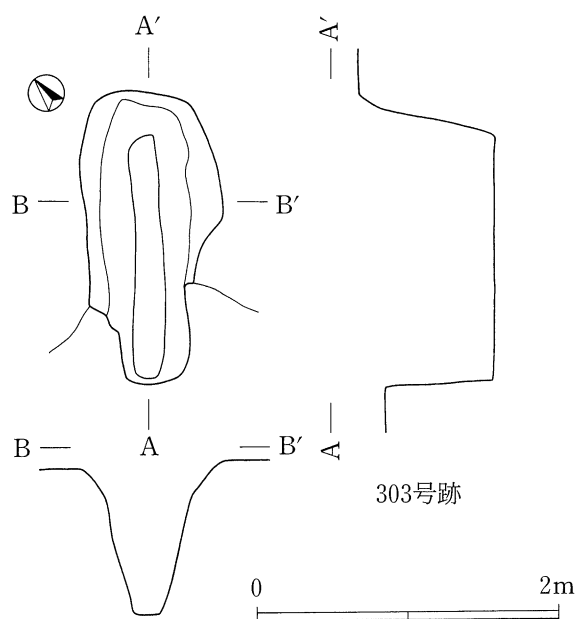
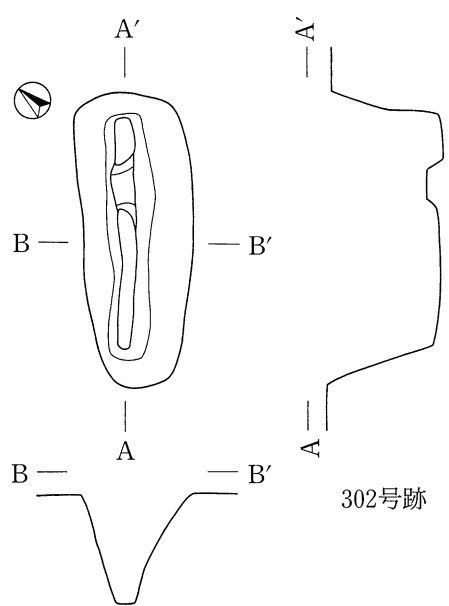
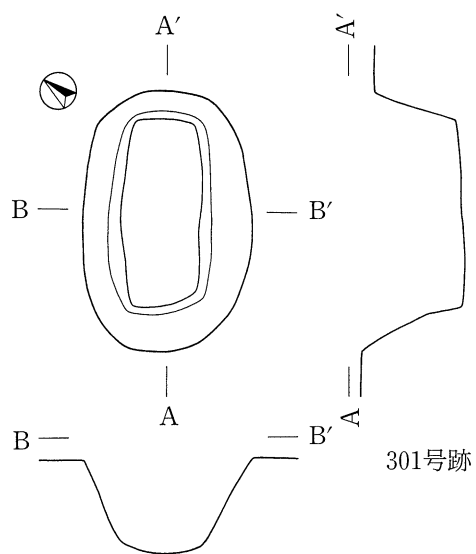
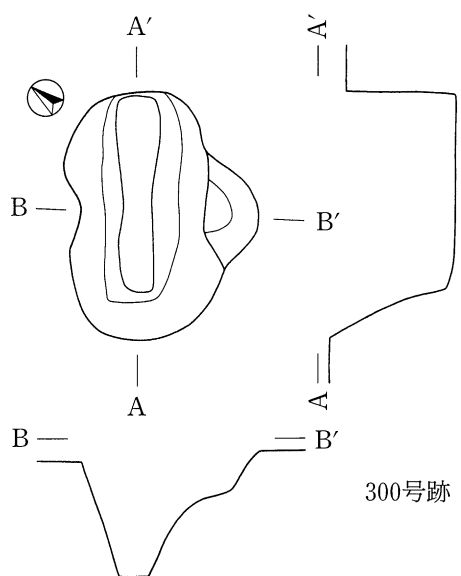
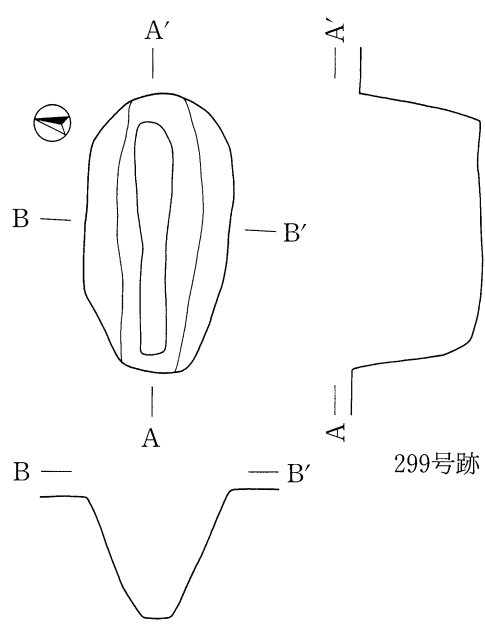
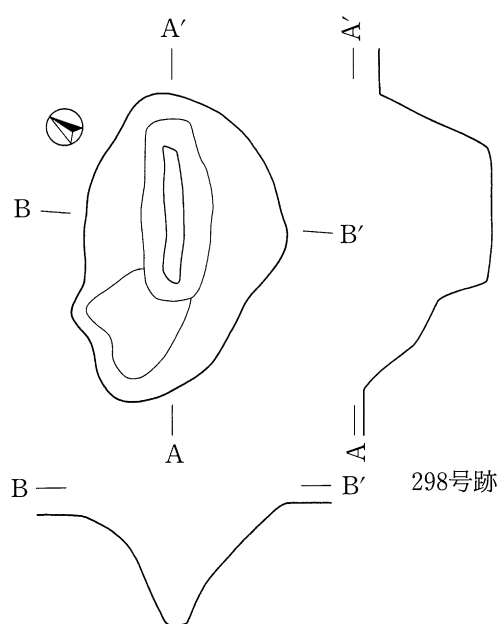
296号跡



297号跡

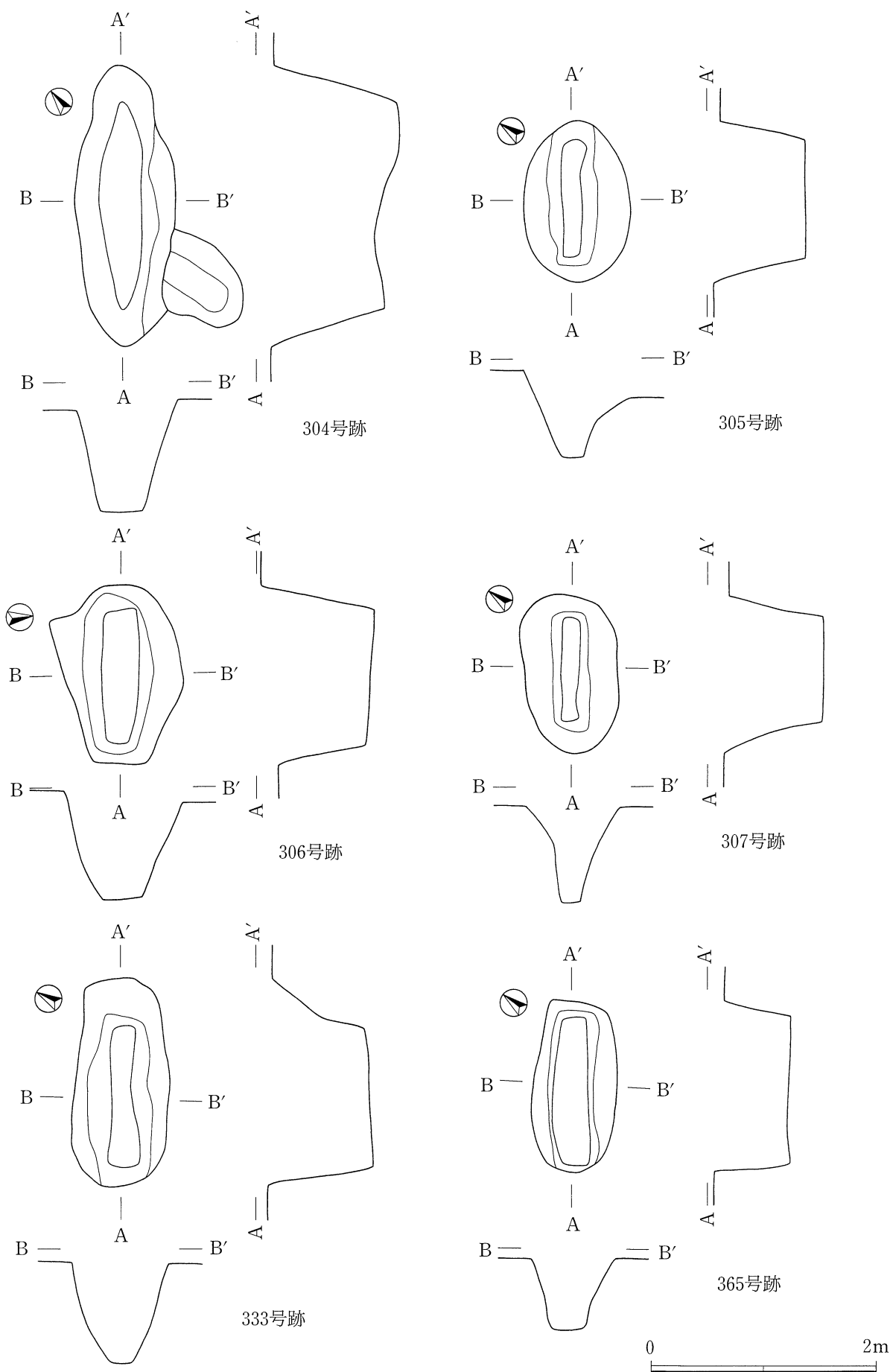


第36図 陷穴(11)

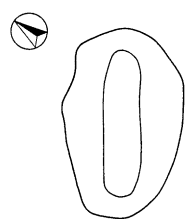


0 2m

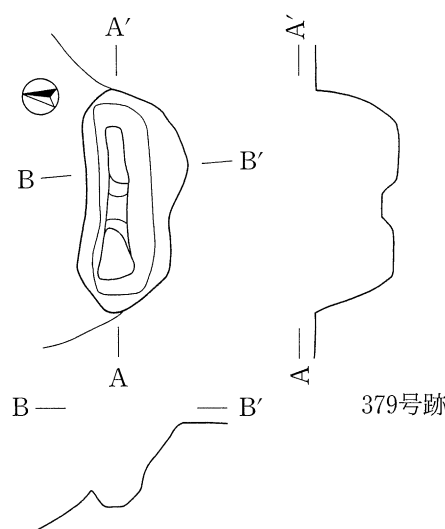
第37図 陥穴(12)



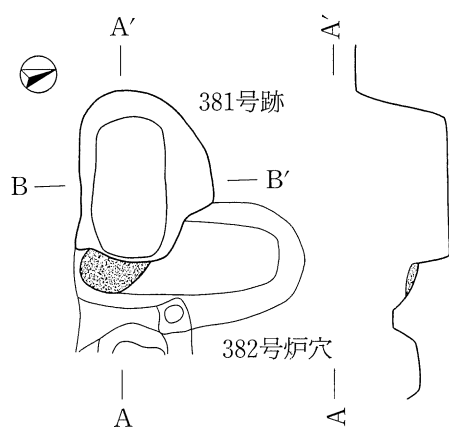
第38図 陷穴(13)



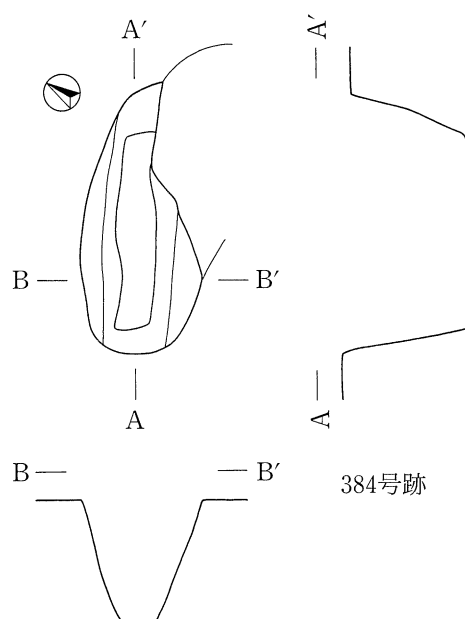
366号跡



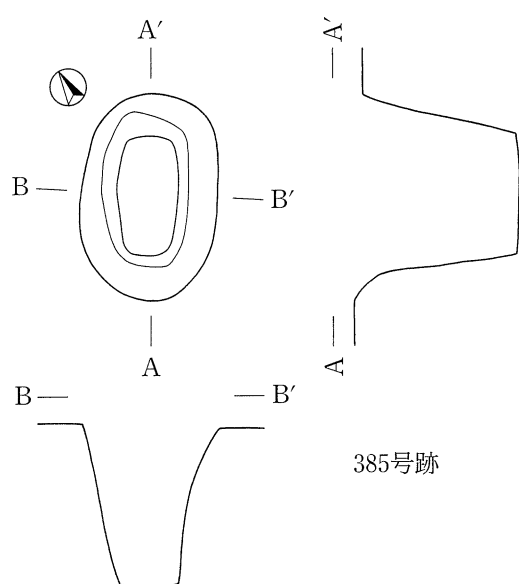
379号跡



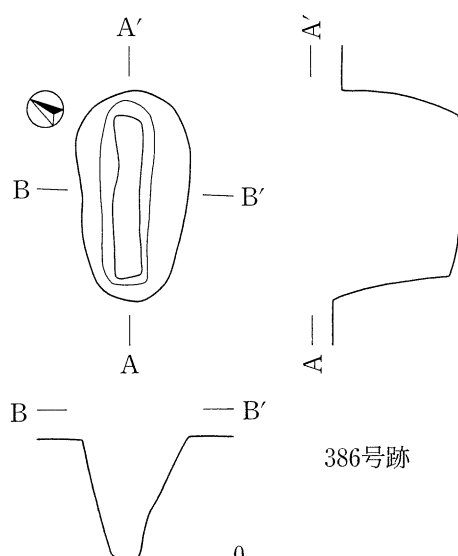
381号跡



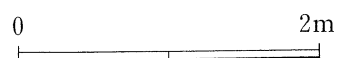
384号跡



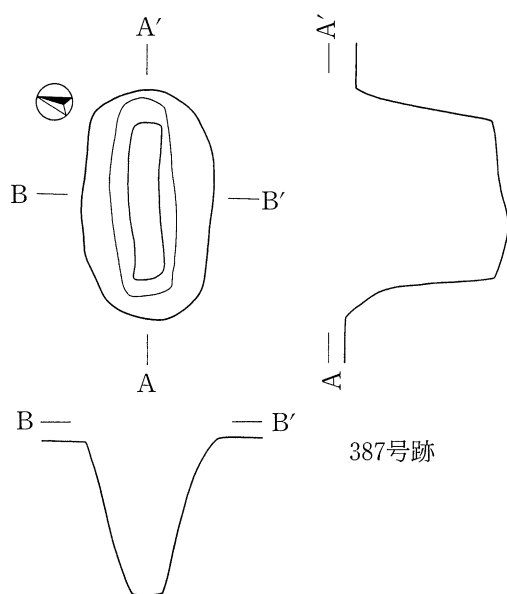
385号跡



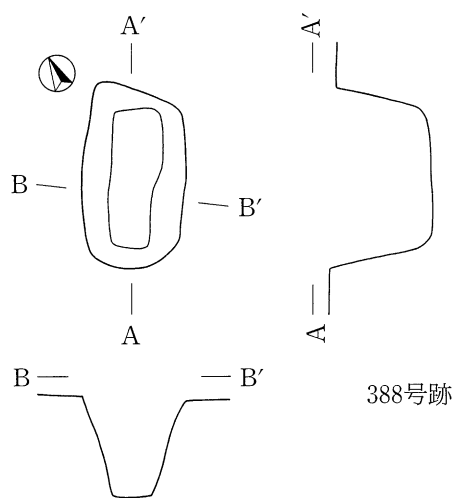
386号跡



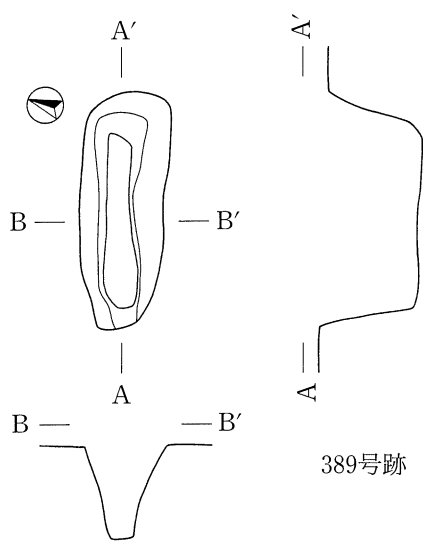
第39図 陷穴(14)



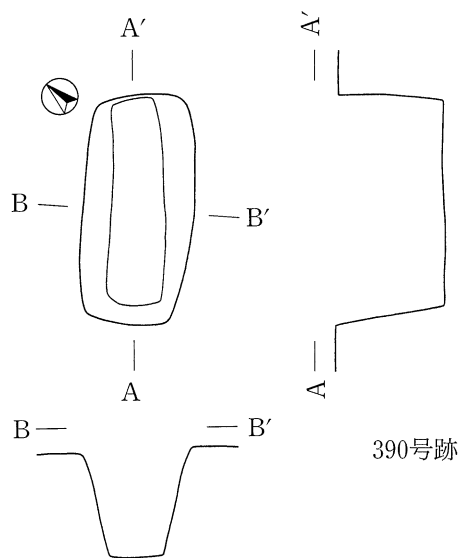
387号跡



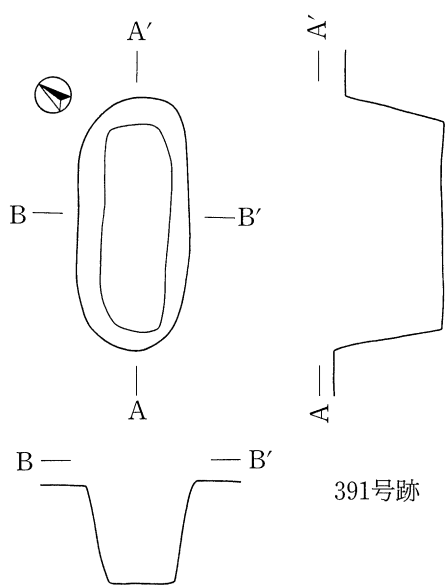
388号跡



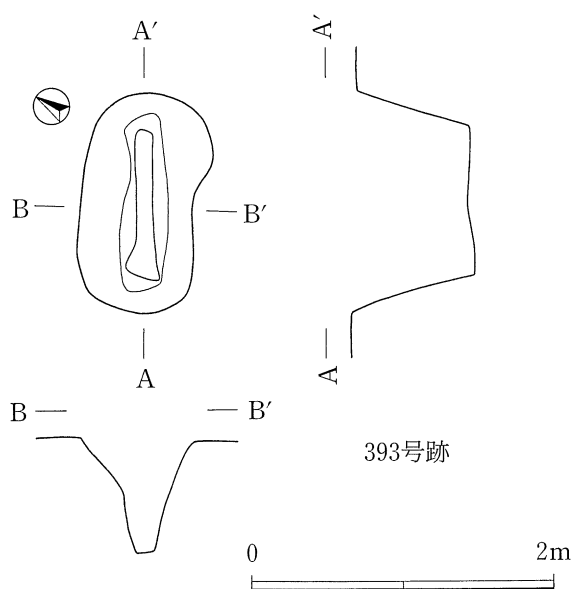
389号跡



390号跡



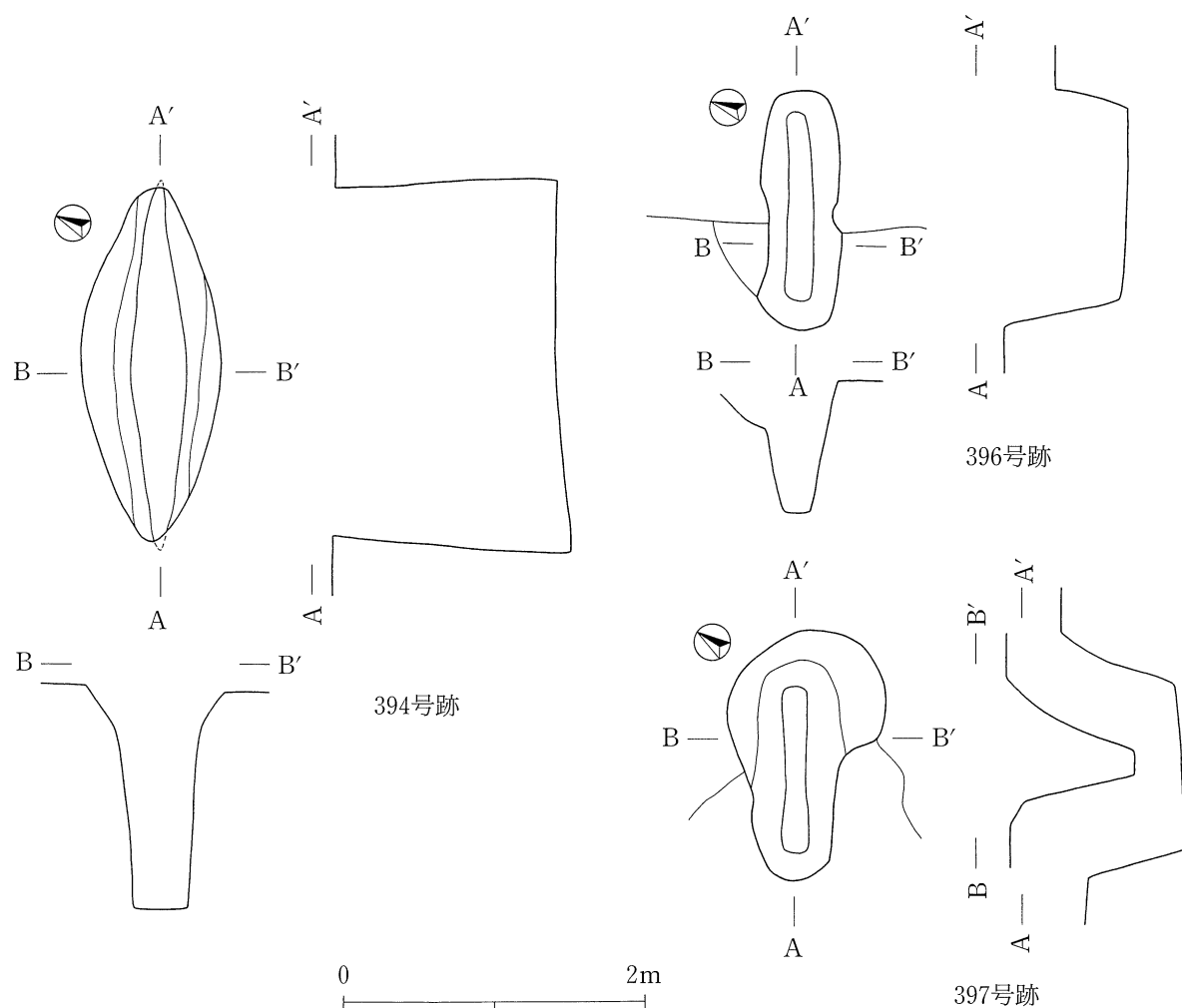
391号跡



393号跡

0 2m

第40図 陷穴(15)

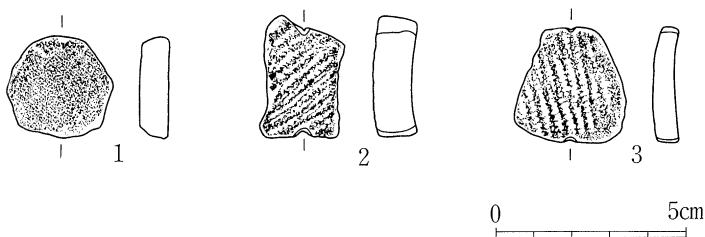


第41図 陥穴(16)

(3) 包含層の遺物

土器片円盤・土器片錘(第42図1~3、写真図版102)

縄文土器を除く出土遺物は、土器片円盤・土器片錘といった加工品に限られている。3点出土している。3点とも中期から後期と思われる深鉢の胴部破片を加工している。1は土器片円盤である。深鉢胴部の無文部分の破片を丸く加工している。胎土から加曾利B式と思われる。2・3は土器片錘である。長方形ないしは方形に土器片を加工し、長軸両端に切れ込みを入れている。2点とも完形のようなものである。2はLの無節縄文が施文されている。3はRLの単節縄文である。ともに中期の土器片を加工したものか。



第42図 土器片円盤・土器片錘

縄文土器

発掘調査によって検出された縄文時代の遺構は、早期の炉穴と縄文時代とみられる陥穴に限られ、遺構に伴う土器は少なかった。また、遺構外から出土した縄文土器は、遺構の内容に相応して少なく、縄文土器等の包含層の遺存状態が悪かった。出土した縄文土器の多くは弥生時代以降に構築された竪穴住居跡などの覆土から出土している。縄文土器の時期は、早期から晩期に及び、遺構が存在する早期の土器量が最も多かった。分類は早期から晩期までを以下のように5群に分け各型式について細分することにした。

第Ⅰ群 早期の土器

第Ⅱ群 前期の土器

第Ⅲ群 中期の土器

第Ⅳ群 後期の土器

第Ⅴ群 晩期の土器

第Ⅰ群 早期の土器を本群とする。型式内容は、撚糸文土器、田戸下層式土器、田戸上層式土器、子母口式土器、鵜ガ島台式土器などからなるが、量的には全体に少ないといえる。

1類(第43図1～4、写真図版98)

撚糸文土器を本類とする。遺跡内からわずか4点の出土である。全て図示した。1は口唇部がやや肥厚し、口唇部直下から縄文が施文されている。外面には焼成後の穿孔が認められる。2～4はややまばらな撚糸が施文されている。いずれも底部近くである。1～4は夏島式に比定される。

2類

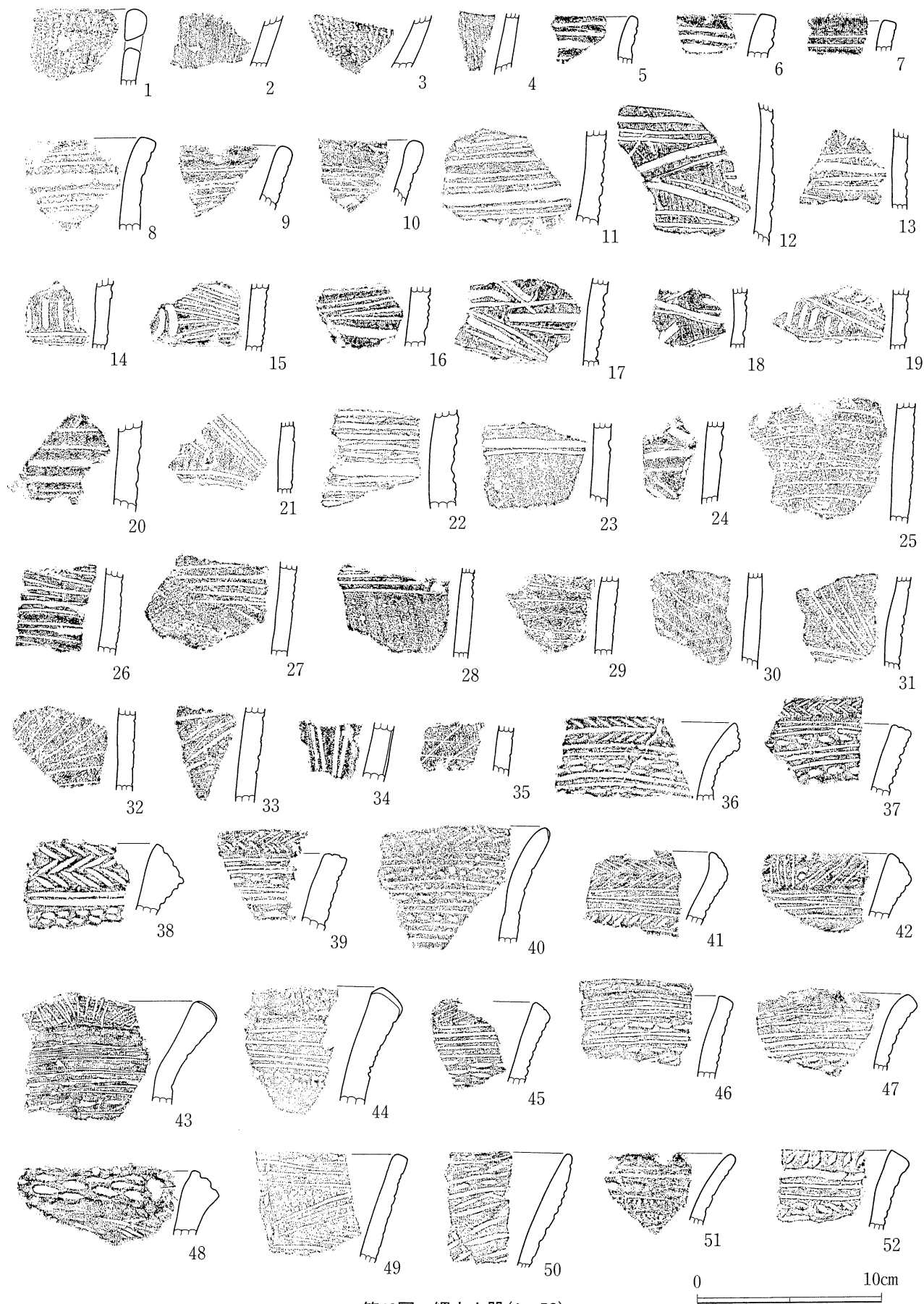
田戸下層式を本類とする。施文された文様の要素から以下のように細分する。

2類 a 種(第43図5～35、写真図版98)

沈線文を主体とするものを本種とする。5～10は口縁部である。外傾ないしは若干外反している。胎土は粗い砂粒の混入はほとんどなく良好で、内外面の調整は丁寧である。横位の太沈線と細沈線がほぼ等間隔に施文されている。11～35は胴部から底部近くまでの部位である。11～20・22～24は太沈線と細沈線が施されている。21は沈線の交点に刺突が施されている。25～35は細沈線のみによる横位ないしは斜位の施文である。

2類 b 種(第43・44図36～79・105・106、写真図版98・99)

細沈線や刺突文を主体とするものを本種とする。胎土は粗い砂粒の混入がほとんどなく良好であり、2類 a 種と変わりはない。36～41は外削ぎ状ないしは角頭状を呈する口縁部である。口唇部には綾杉状の沈線文を施し、横位の沈線と刺突文を交互に配置している。36～40は二条から三条の横位の沈線の間に一列ないし二列の刺突文が施される。41は斜めの刺突文である。42は口唇部の沈線文の間にわずかな刺突文が施されている。44は緩やかな波状縁の波頂部である。横位の細沈線の下に半截竹管による押引文が一条施文されている。46は口唇部に横位の刺突文が施されている。48は肥厚した口唇部に二列の刺突文を施している。58は半截竹管に近い刺突具による刺突文である。59は縦の刺突文である。62も縦方向の刺突文である。66は細い竹管による刺突文である。68・69は同一個体である。角頭状の刺突具による連続刺突文である。70は沈線文と刺突文がともに縦位施文されている例である。72・73・75・77・79などは斜位ないしは縦位の沈線文の間に刺突文が施されている。78は2種類の刺突文が施されている。105・106は同一個体である。斜位の太沈線がV字状に配され、太沈線に沿って半截竹管による刺突文が施されている。胎土にはやや粗い砂粒が混入している。



第43図 縄文土器(1~52)

2類 c 種(第44図80～87、写真図版99)

貝殻文を主体とするものを本種とする。80～83は沈線で区画された中に貝殻腹縁文を充填している。84～87は同一個体と思われる。細沈線と太沈線の平行線で菱形の文様を描いているものと思われる。沈線の末端には刺突文が施される。沈線文の内部には弱い貝殻腹縁文が施文されている。

2類 d 種(第44図89・90、写真図版99)

東北地方の明神裏3式に類似したV字状の押引文を施すものを本種とする。先端が三角形の工具による押引文によって文様が構成されるが、破片のため文様の構成や単位はよく分からない。胎土には繊維が含まれず、砂粒の混入も少ない。89はやや外半する口縁である。口縁に沿って押引文が施され、斜位の押引文が間隔をおいて施文されている。90は菱形文を思わせる構成である。本遺跡の2類は田戸下層式の後半段階に位置づけられ、3類の田戸上層式の内容は極めて貧弱であることから、本種が2類の田戸下層式に並行する可能性が高いと考えられる。

3類(第44図88・91～93、写真図版99)

田戸上層式を本類とする。本類に含まれる個体は量的に限られている。88は貝殻腹縁文に挟まれた隆帯上に刺突を施している。91・92は同一個体である。口唇部が肥厚し先端のささくれた工具による刺突文が施され、胴部には弱い貝殻腹縁文が横位に施文されている。93は口唇直下に横位の貝殻腹縁文が施文されている。

4類(第44・45図94～104・107・108、写真図版99)

田戸下層式後葉から田戸上層式前葉くらいに並行するのではないかとされる特殊なものを本種とする。94～97は同一個体である。緩いキャリパー形の器形であろう。胎土に繊維を含まず、やや粗めの砂粒が混入する。外面の調整は粗いが内面は比較的丁寧である。地文に間隔のあいたRL縄文を施文し、太めの半截竹管によって深い押引文を施しながら渦巻状の文様を作出している。94の口縁部破片の状況から若干の波状縁を呈するようで、波頂下に渦巻状の沈線文が施される。95から横位の沈線は一定の間隔で切れているようである。波頂下の渦巻文は田戸下層式末から田戸上層式に見られる蕨手文などの曲線文の類似性が見られることから本類に含めた。ただ地文に縄文が施され、半截竹管を用いている点は特異である。98・99は同一個体である。砂粒が目立つ。太い半截竹管によって斜行する短い沈線文が施されている。口唇部は角頭状を呈する。94～97と同じく緩いキャリパー形の器形であろう。100～104も同一個体である。地文として縦位の細かい茎束条痕が密に施されているが、内面は丁寧なナデである。さらに半截竹管による鋸歯状の沈線文が施文され、下段にも横位の沈線が施されている。早期とするには半截竹管である点が特異であるが、地文が条痕であることから本類に含めることにした。

5類(第45図109・110、写真図版99)

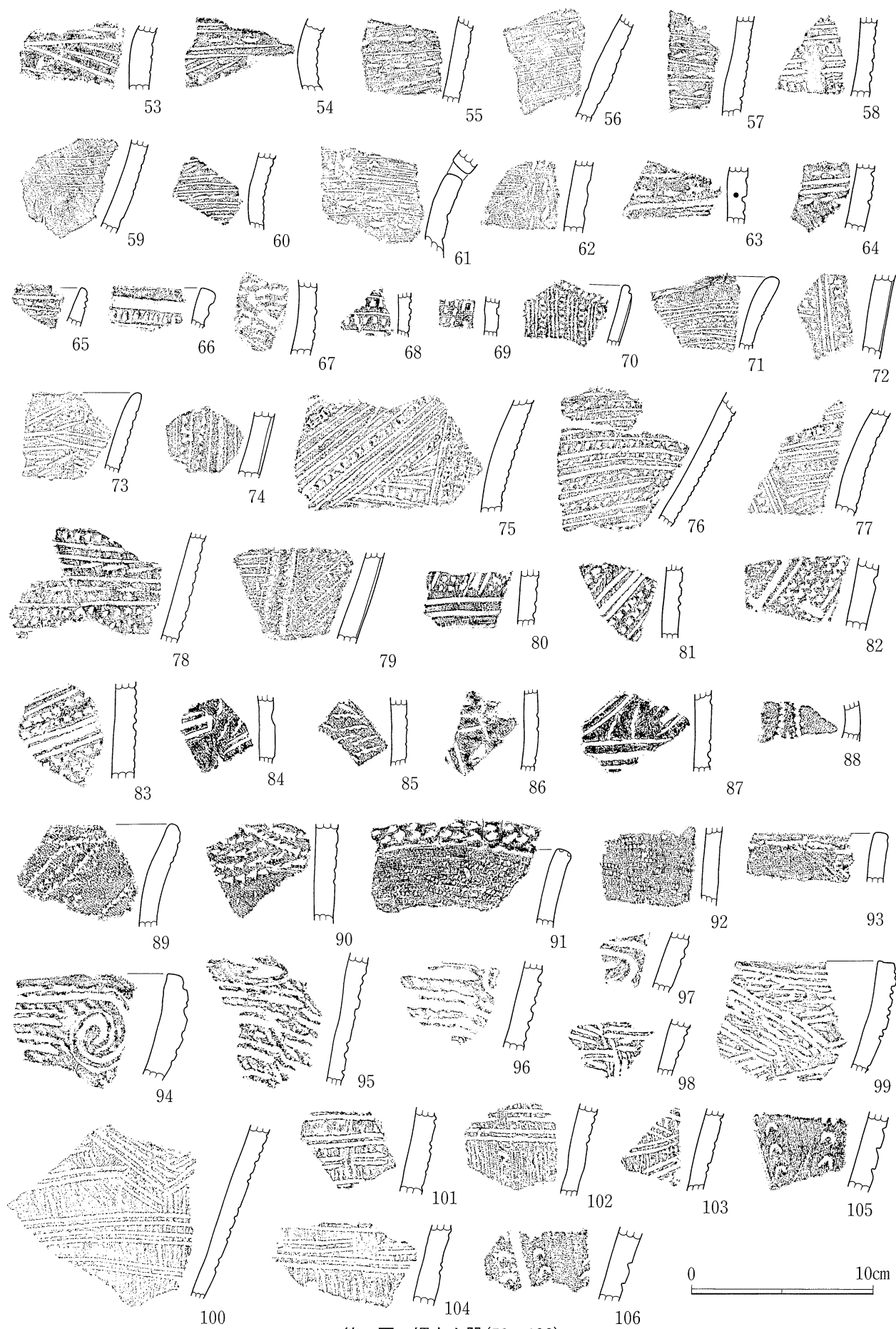
子母口式を本類とする。わずか2点の出土であった。ともに胎土中の繊維が目立つ。109は口唇部にキザミを伴い、口縁外面に連続した刺突文を施している。110も口縁部近くの破片である。109に比べやや間隔のあいた刺突文である。

6類(第45図111、写真図版99)

鵜が島台式を本類とする。わずか1点である。沈線による区画文を施し、沈線の交差部に円形の刺突文を施している。区画内部には竹管による押引文を充填している。内面は貝殻条痕である。

7類(第45図112～152、写真図版99・100)

胴部に文様が施されない無文の土器を本類とする。繊維を胎土中に混入しているものがほとんどである。繊維の量は比較的多いと言える。砂粒の混入量は少ない。器面の調整は内外面ともに擦痕状の調整痕を伴っている。112は繊維を含まない。外反する口縁で口唇部が外削ぎ状を呈する。田戸下層式であろう。113～118は角頭状の口



第44図 縄文土器(53~106)

唇部で、やや外反ぎみの口縁である。119～126は丸味のある口唇部で外傾するものが多い。127～130は口唇部に連続した刺突文ないしは押引文が施されている。128・130は焼成後に回転穿孔が行われている。131～152は胴部の破片である。器厚が安定せず、厚いものが多い。113～152はおおよそ田戸上層式から子母口式に並行するものであろう。

8類(第46図153～182、写真図版100)

条痕文を伴い胎土に繊維を含むものを本類とする。条痕は貝殻条痕が主体であるが、茎束条痕と思われる例もある。時期的に多くは田戸上層式以降と思われるが、茅山上層式までは下らないであろう。特定するのは難しい。158～160は繊維が少なく内面に条痕を伴わず、焼成もよいことから田戸上層式に伴うものであろう。153～157は口唇部にキザミを伴う。器厚が薄く口唇部近くで外反する。内外面ともに条痕が施されている。161～182は胴部である。繊維量は比較的多く内面に条痕を伴うものと伴わないものがある。器厚が一定しないものが目立つ。

9類(第46・47図183～186・187～203、写真図版100)

早期後半と思われるその他のもの及び底部を本類とする。183は横位の隆帯が二条貼り付けられている。胎土には繊維が目立つ。口唇部にわずかなキザミが施される。茅山上層式か。184～186は同一個体である。繊維を多量に混入し、縦方向の羽状縄文を伴う。184の口唇部には縄文が施文されている。早期末から前期初頭にかけての時期であろう。187～203は尖底部である。いわゆる天狗の鼻状にのびるものはないが、比較的尖りぎみのものが多い。繊維の混入がないものが多く、混入したとしても微量である。縦方向の調整痕が明瞭に確認できる。188・200などには貝殻条痕が施文されている。田戸下層式の後半から田戸上層式の前半にかけての有文土器が主体であることから尖底もこれらに伴うものであろう。

第Ⅱ群 前期の土器を一括する。諸磯式土器、浮島式土器、興津式土器などからなる。

1類(第48図204～207・215～221、写真図版100・101)

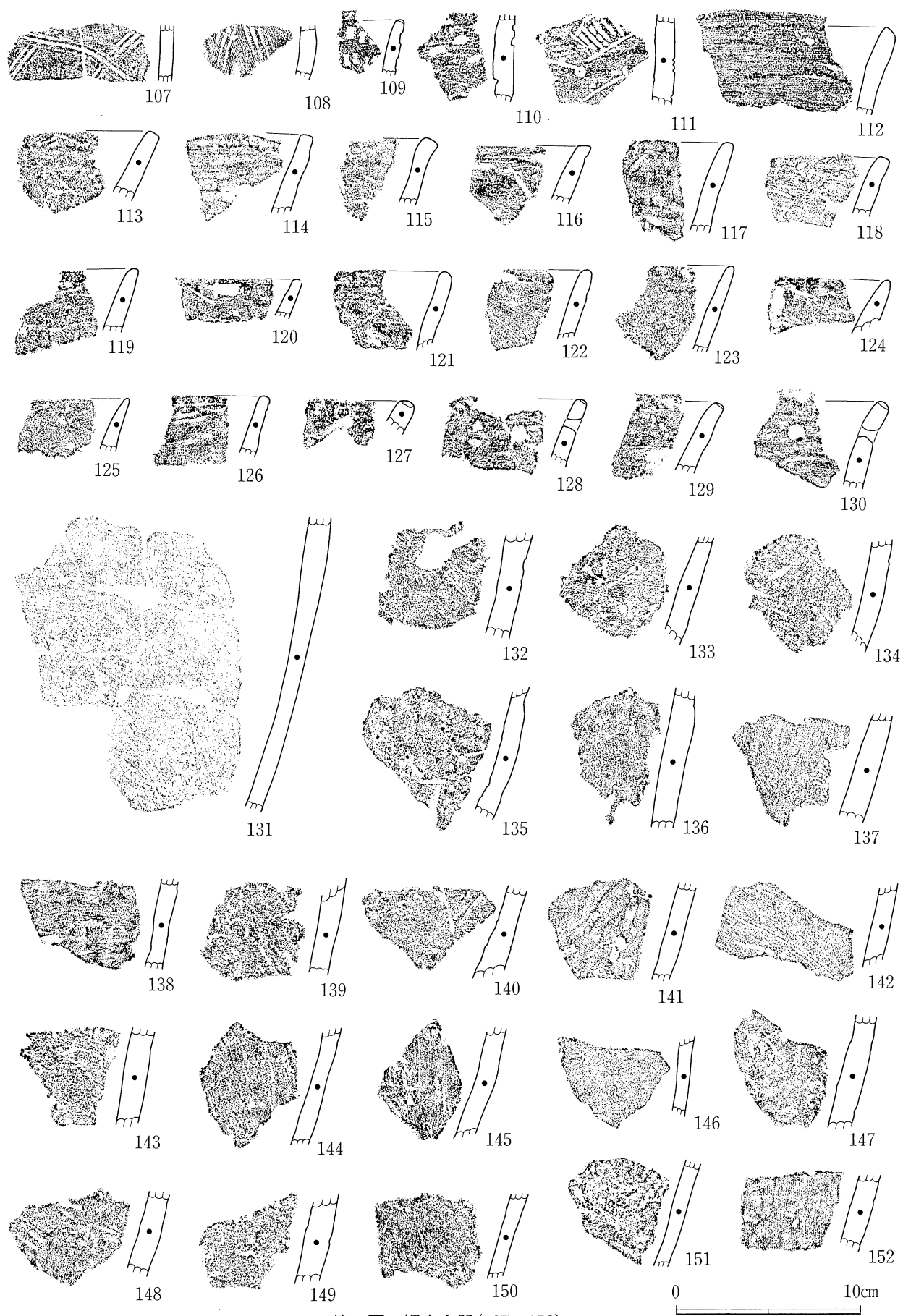
諸磯b式を本類とする。204～207は同一個体の可能性が高い。地文縄文に浮線文が密に貼り付けられている。胎土には多量の粗粒砂が混入されている。焼成はよく堅緻である。215～221は半截竹管による沈線文である。弧線文を主体としている。221は刺突文も伴っている。

2類(第48図208～214、写真図版100)

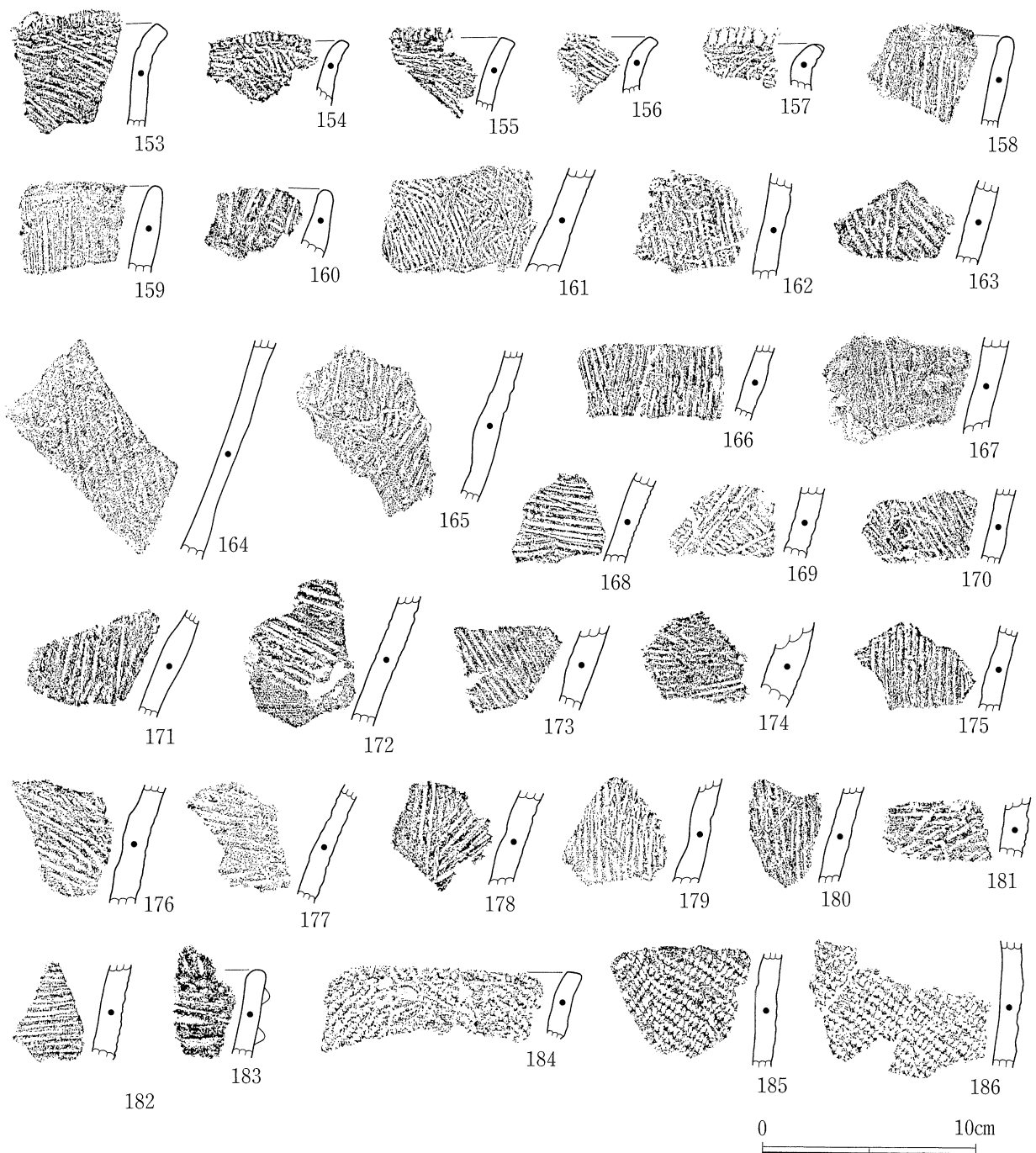
諸磯c式土器を本類とする。ボタン状貼付文や貼付文を特徴とする。個体数は少ないものと考えられる。208は沈線文を地文とし、ボタン状貼付文と縦長の貼付文が施されている。209・211・212～214は同一個体と思われる。鋸歯状の沈線文と縦の結節沈線文、さらに一對の小さな貼付文が施されている。

3類(第49図222～247、写真図版101)

浮島式・興津式に含まれるものを本類とする。222～225は太い竹管による連続した刺突文によって文様を作出しているものである。222は胴部中位の文様帯で半截竹管による刺突文が施され、胴部下半に横位ないし斜位の条線が施されるらしい。223・225は同一個体で、222と近似した胎土であるが使用している半截竹管の幅が異なることから別個体と判断される。斜位の条線文の間に刺突文が充填されている。全体の文様構成はよく分からない。224は薄手で他とは別個体である。226は連続刺突文のみである。227～229は櫛状工具による波状条線文である。230は波状縁で波頂部外面に貼付文を伴う。半截竹管による横位の区画の間に貝殻文を充填している。231は口唇部にキザミを伴い、指頭による凹凸文が施されている。以上222～231は興津式に比定されよう。232～235は同一個体である。口唇部がやや肥厚し深いキザミが施されている。拓本では不明瞭だが沈線で区画された中段に竹管



第45図 縄文土器(107~152)

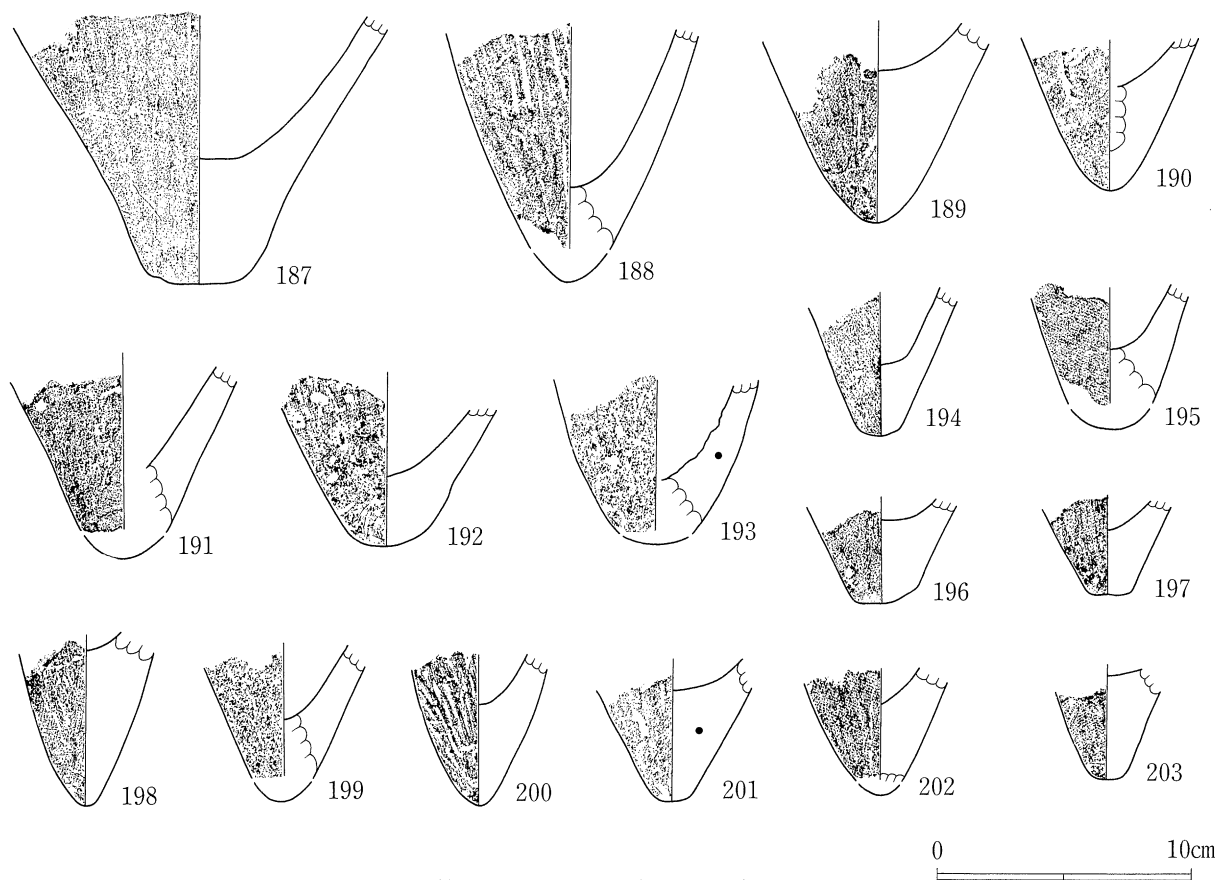


第46図 縄文土器 (153~186)

による変形爪形文が施文されている。236は口唇部に刺突を伴う。竹管による変形爪形文が施文されている。232~236は浮島Ⅲ式であろう。237~241・245は波状貝殻文である。245は底部と思われ、底面にも貝殻文が施されている。浮島Ⅱ式。242~244は三角文である。浮島Ⅲ式。246・247は波状貝殻文であるが、施文が弱く三角文に近似しており、浮島Ⅲ式か。

4類 (第49図248~260、写真図版101)

諸磯b式から前期末葉に位置づけられる縄文を施したものを本類とする。248・249は3条のLの撚糸圧痕を施し、同一の原体によって無節の回転縄文を施文している。波状縁を呈する。前期末に位置づけられよう。250~252・



第47図 縄文土器(187~203)

254・255・258・259・260はR Lの回転縄文。253・256・257はLの回転縄文である。250は横位の沈線が施されている。252・254~257・259は多段の結節縄文が伴う。251は結節を口唇部に施文している。252は胴部施文の縄文を口唇部にも施している。250~260については諸磯b・c式期にも結節文を伴う縄文施文の土器が含まれる可能性があり、形式的には幅があるものと思われる。

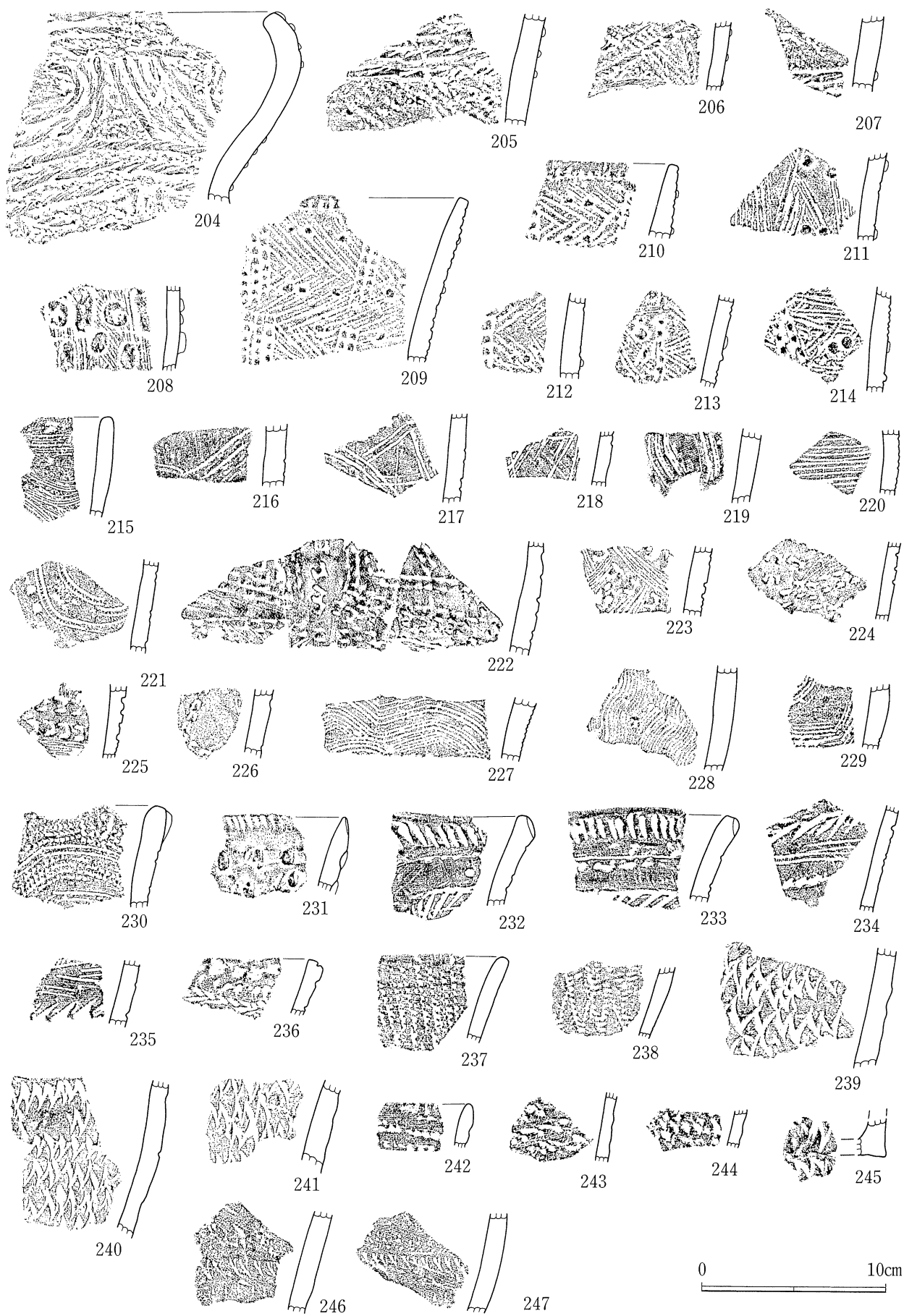
第III群 中期の土器を一括する。型式内容は、五領ヶ台式土器、阿玉台式土器、加曽利E式土器などからなる。

1類(第50図261~263、写真図版101)

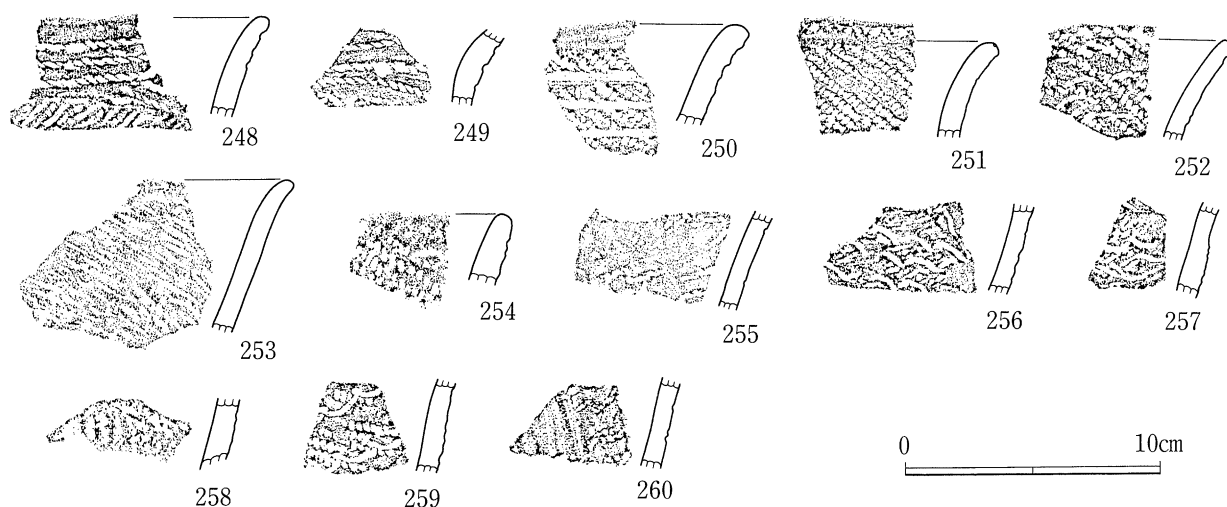
五領ヶ台式を本類とする。261は口唇部にキザミを施し、外面に無文帯を伴う。指頭圧痕を伴う隆帯の下に横位の沈線を施している。262は口縁部近くの破片である。横位の沈線の上に三角形の刺突文を施している。263は口唇部にキザミを施し、口唇直下に横位の沈線、三角形の刺突文を施している。みな五領ヶ台I式であろう。

2類(第50図264~272、写真図版101)

阿玉台式を本類とする。264は口縁外面に角押文が一条施されている。胴部は無文で、口縁部内面は肥厚し、稜線を伴う。265は隆帯上にキザミを伴う。266は横位の押引文を施している。267は折り返し口縁である。268は垂下する隆帯を貼り付けている。269は緩い波状縁で波頂部に隆帯が垂下する。口縁下から隆帯にかけて押引文を施している。270は小型の深鉢である。口縁部に小突起を伴い隆帯による長楕円の区画文帯を形成している。内部には押引文がめぐる。頸部は無文帯となり、さらに下段に口縁部と同じ長楕円区画文帯が形成され、胴部下半には逆U字状隆帯文が貼り付けられている。この隆帯文の両側には押引文が施されている。264~270は阿玉台Ia式に比定される。271・272は爪形文が施文されている。阿玉台III式に比定される。



第48図 縄文土器(204~247)



第49図 縄文土器(248～260)

3類(第50図273～283、写真図版101・102)

加曽利E式を本類とする。量的には少なく、器形はキャリパー形の深鉢に限られている。時期は加曽利E II～E III式である。施文される縄文は、283はL Rその他はR Lである。273・274は楕円区画文を伴う口縁部破片である。273は頸部無文帯をもつ。275～280は垂下する沈線によって区画された内部を磨消している。281は条線である。283は胴部下半を欠いているが比較的遺存状態がよかった。口縁部に押引刺突文をめぐらし、横位の沈線で数段の区画帯を作り出している。頸部には蛇行沈線文を施している。地文はL Rの縄文である。

第IV群 後期の土器を一括する。堀之内式土器、加曽利B式土器などからなる。出土量はわずかでそのほとんどを図示した。

1類(第51図284～287、写真図版102)

堀之内式土器を本類とする。堀之内1式に限られている。284は口縁部が外反する深鉢の口縁である。L R縄文を地文とし、蕨手文を施していると思われる。285・286は同一個体である。L R縄文を地文とし変形した蕨手文と思われる沈線文を施している。287は竹管による刺突文を楕円状に施している。さらに半截竹管による垂下沈線を施している。

2類(第51図288～305、写真図版102)

加曽利B式土器を本類とする。後期の土器のうちでは最も出土量が多かった。288は浅鉢である。口縁内面に沈線をめぐらせ、細かいキザミを施している。289・290は紐線文の下部に沈線を施している。291は横位の沈線を施し、胴部には粗いR L縄文を施している。292は口縁に貼付文を付け、L R縄文を施している。292は粗いL R縄文である。294はR L縄文を地文とし、沈線文を施している。295は深鉢の上半部に施文された沈線文であろう。298は地文に縄文を施さず垂下及び斜方向の沈線を密に施している。頸部はミガキによる無文帯が作り出されている。296は斜格子状に沈線文を施している。297はR L縄文、299は密な沈線である。300は台付鉢の高台であろう。301・302は無文の浅鉢である。ともに内面と外面のみがきが丁寧に行われている。301はほぼ完形で口縁部外面に段をつけている。口唇部には浅いきざみが施される。303はそろばん玉状の注口土器である。横位の沈線のみの単純な構成である。304・305は底部である。305の底面には網代が残っている。本類は加曽利B1式からB2式に比定されよう。

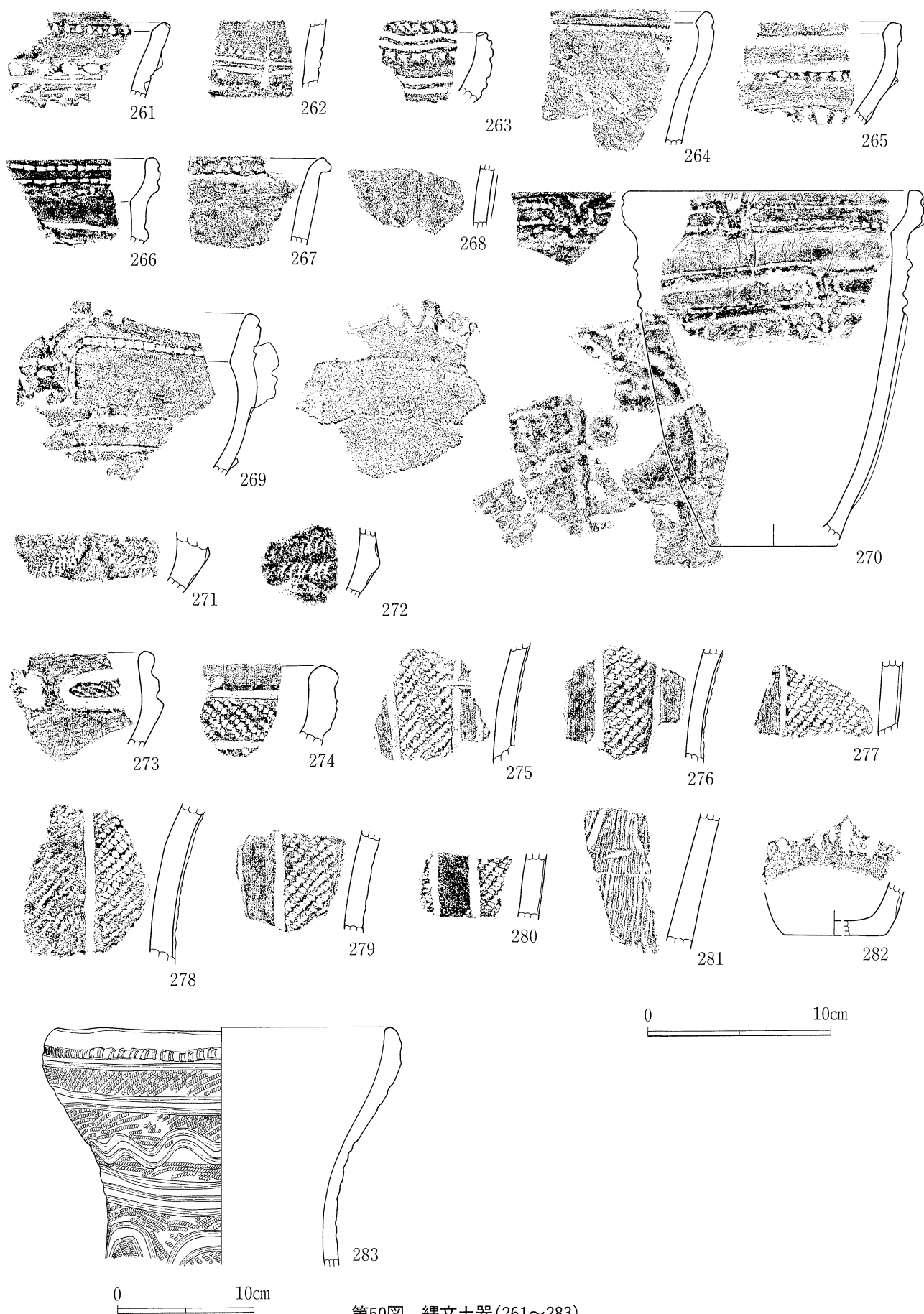
第Ⅴ群 晩期の土器を一括する。安行式土器と千網式土器が微量出土している。

1類(第51図306～308、写真図版102)

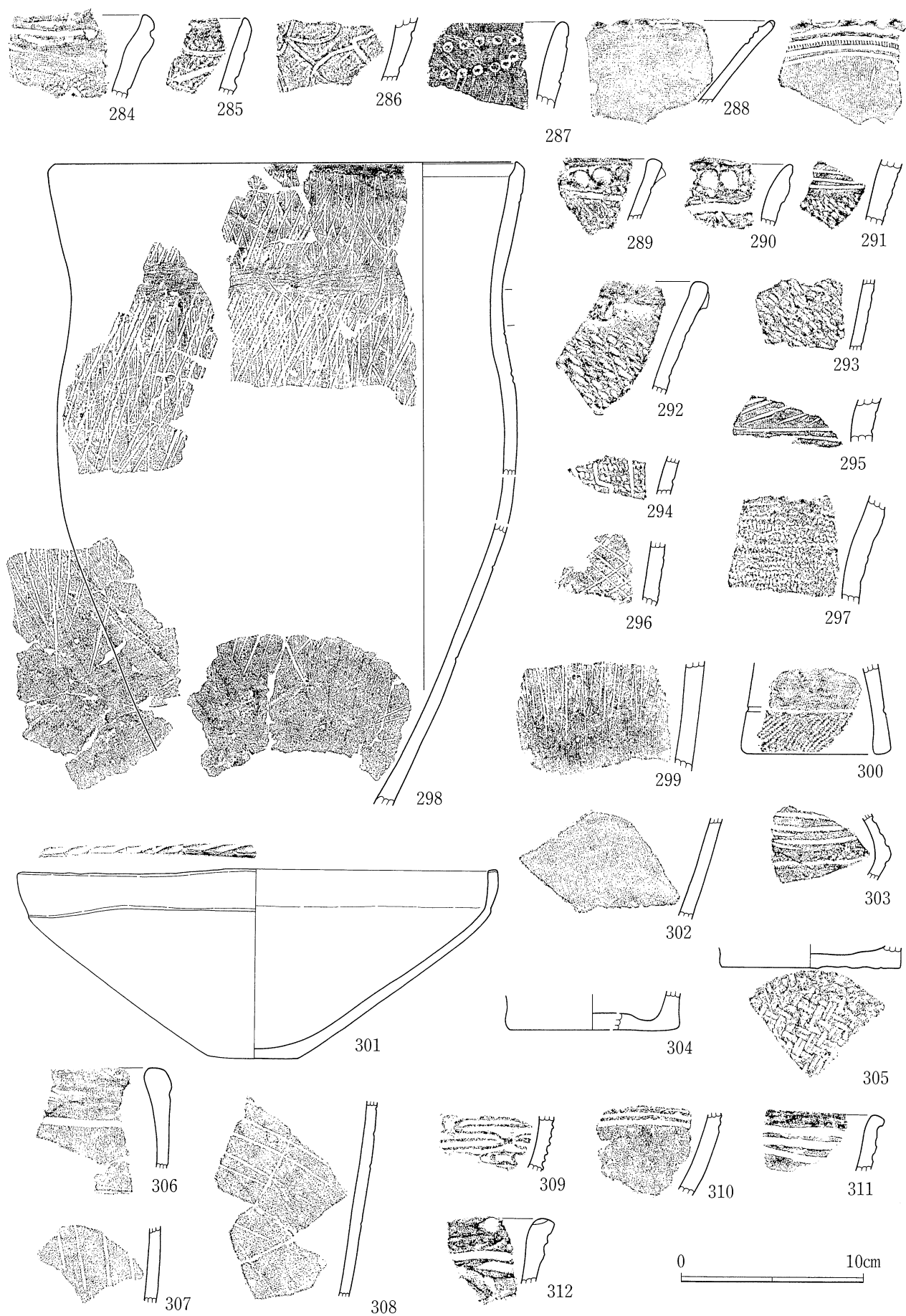
安行3b～3c式の粗製土器が破片で1個体分出土している。内湾する深鉢である。口縁に沈線区画による無文帯を伴い、胴部にはまばらな弧線文を施している。

2類(第51図309～312、写真図版102)

千網式土器を本類とする。4点出土している。すべて掲げた。309・310は浅鉢である。ともに浮線文で、309は工字文、310は横位の沈線である。311も鉢ないし浅鉢であろう。口唇部がやや肥厚し太めの横位沈線を施している。312は太い沈線文である。文様の構成はよくわからない。



第50図 縄文土器 (261~283)



第51図 縄文土器 (284~312)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、遺跡内の谷を挟んだ北側の細長い舌状台地に、ほぼまとまって分布している。総数は、42軒を数える。遺構は、同時代での切り合い・重複関係はなく、単独で所在している。以下、住居跡ごとに概要を記述する。

113号住居跡（第130図、写真図版20・103）

北東側から入り込む谷の最奥部から上がった台地上 J O-25区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-57°10'-Wである。形状は、南東側が不整形な円形状で東西軸2.8m、南北軸3mを測る。壁は、浅いが垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で7cm、西壁で10cm、南壁で6cm、東壁で8cmを測る。面積は、確認面で6.73m²、床面で6.09m²となる。床は、ソフトローム面を直接床面とするが、固い部分が無くきわめて不明瞭である。周溝についても認められない。床面上にはピットが多数見られるが、どれが確実に伴うのか不明である。

炉は検出されなかった。

遺物については、中央床面(床直)から頸部から口縁部にかけて輪積痕を残す甕(1)、甕の胴部下半部分(2)、大型壺の胴部下半および底部(3)が出土している。

123号住居跡（第130図、写真図版20）

北東側から入り込む谷の最奥部から上がった台地上 I O-84、85、94、95区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-62°45'-Wである。形状は、北西-南東に長い楕円形状で長軸5.2m、短軸4.22mを測る。壁は、垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で34cm、西壁で48cm、南壁で34cm、東壁で16cmを測る。面積は、確認面で16.63m²、床面で15.16m²、内区(主柱穴内側)で5.41m²となる。床は、ソフトローム面に暗褐色土とローム土の混合土を敷き詰め、貼床としている。床面は、炉の付近が若干固く踏み固められているほかは、全体的に軟弱である。主柱穴は、ほぼ均等間隔で対角線上に4本認められる。長軸50~60cm、短軸40~50cm程度の四角形状で、ほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が40cm、P2が42cm、P3が43cm、P4が38cmである。柱間は、ほぼ均等で、P1・P2が2.3m、P1・P3が2.35m、P2・P4が2.45m、P3・P4が2.25mである。P2の柱は南北のいずれかの方向から抜き取った痕跡が見られる。また南東側壁際の床面中央部分に、50cm×40cm、深さ90cm程度の横長形状のピット(P5)、およびその外側で、一段上がった幅25cm程の半円形テラス状の平坦面に1m間隔で並列する径30cm、深さ30cm程度の小ピット(P6・P7)が認められる。これは、住居出入口施設に関連した柱穴と思われる。なお対置する形で、北西方向の壁際には、床面から20cm程度上がった部分に長さ200cm、幅40cm程度の張り出し状のテラスが認められ、その部分に1m間隔で並列する径30cm、深さ25cm程度の小ピット(P8・P9)が認められる。周溝については、認められない。南西床面および北東の壁際には125号、126号陥穴が見られる。

炉は、主柱穴のP1-P2間の中央部で検出された。長軸110cm、短軸70cm、深さ20cm程度の大型でしっかりとした長楕円形である。火床の範囲も広く、厚さ8cm程度にわたりよく焼けている。

遺物については、検出されなかった。

129号住居跡（第131図、写真図版20・103）

遺跡南側の台地中央部 J N-18、19、27、28、29、38、39区に位置する。住居は西方向に傾き、主軸方位はN-71°30'-Wである。形状は北西-南東に長い楕円形状で、長軸5.36m、短軸4.75mを測る。壁は、垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で36cm、西壁で41cm、南壁で33cm、東壁で22cmを測る。面積は、確認面で21.02m²、床面で19.01m²、内区(主柱穴内側)で5.89m²となる。床は、ソフトローム面に暗褐色土とローム土の混合土を厚く敷

き詰め、貼床としている。床面は、炉の付近が若干固く踏み固められているほかは、全体的に軟弱である。主柱穴は、対角線上に4本認められる。長軸35cm、短軸30cm程度のやや小さい四角形状の掘形である。柱穴の深さは、P1が34cm、P2が32cm、P3が48cm、P4が33cmである。柱間は、P1・P2が2.4m、P1・P3が2.4m、P2・P4が2.6m、P3・P4が2.35mである。柱の抜き取りは、認められない。なお、長軸方向の南東側壁際中央の床面部分に35cm×20cm、深さ12cm程度の横長形状のピット(P5)が認められる。これは、住居出入口施設の柱穴と思われる。また、その北東側の壁際には、40cm×30cm、深さ18cm程度の方形状ピット(P6)が所在するが、位置的に貯蔵穴と思われる。周溝については、認められない。

炉は、主柱穴のP1—P2間の中央部に見られる。長軸110cm、短軸80cm、深さ18cm程度の大型でしっかりとした長楕円形である。火床の範囲も広く、厚さ8cm程度にわたりよく焼けている。

遺物については、炉の内部から壺の胴部下半部分(1)が出土している。

131号住居跡 (第131図、写真図版20)

遺跡南側の台地中央部JM-49、50、59、60区に位置する。住居の西側部分は、132号平安時代住居跡によって、壁および床部分を壊されている。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN—65°10′—Wである。形状は、北西—南東に長い不整形円形状で、長軸推定5.5m、短軸5.2mを測る。壁高は浅く、北壁で10cm、西壁で14cm、南壁で8cm、東壁で4cmを測る。面積は、確認面で20.52㎡、床面で19.68㎡、内区(主柱穴内側)で7.07㎡となる。床は、ソフトローム上面を直接床としている。床面は、長軸方向に中央部が固くしまっている。主柱穴は、対角線上に3本認められる。均等な大きさではなく30～50cm程度の幅のある円形状の掘形である。柱穴の深さは、P1が16cm、P2が25cm、P4が61cmである。柱間は、P1・P2が2.05m、P2・P4が3.45mである。柱の抜き取りは認められない。周溝、炉については確認できなかった。

遺物は土師器甗、杯類などが出土しているが、これは隣接の132号平安時代住居跡のものであろう。

144号住居跡 (第132図、写真図版20)

北東側から入り込む谷の最奥部から上がった台地上IO-26、27、36、37区に位置する。住居の中央および南東の大部分は、145号奈良時代住居跡によって壊されている。住居は北方向に傾き、主軸方位はN—16°40′—Eあたりであろう。形状は、南北に長い楕円形状で長軸推定4.2m、短軸推定3.7mと思われる。壁は、垂直に掘り込まれており、壁高は、北壁で40cm、西壁で45cmを測る。145号住居跡の床面との比高差は、20cm程高い。面積は、確認面で推定12.88㎡、床面で推定10.44㎡と思われる。床は、ハードローム面を直接床としている。床面は、固くしまっており良好である。主柱穴、炉および周溝は認められなかった。

遺物は覆土中から壺の頸部破片(1)が1点出土している。

156号住居跡 (第132図、写真図版21)

北東側尾根状台地基部の中央部IN-47、48、57、58区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位は、N—68°30′—Wである。形状はやや角張った円形状で、規模が小さく北西—南東軸3.3m、北東—南西軸3.2mを測る。壁は、浅く掘り込まれている。壁高は、北壁で17cm、西壁で19cm、南壁で10cm、東壁で6cmを測る。面積は、確認面で8.78㎡、床面で7.98㎡を測る。床は、ソフトローム面を床面としているが、踏み固めた部分はごくわずかで、全体的に軟弱である。主柱穴は認められない。南東側の壁際付近の床面中央部分には、径35cm、深さ22cm程度の円形状のピット(P1)が認められる。これは、住居出入口施設の柱穴と思われる。また、その北東側の壁際には、40cm×30cm、深さ25cm程度の方形状ピット(P2)が所在するが、位置的に貯蔵穴と思われる。周溝については、認められない。

炉は、北西側中央床面に見られる。径30cm程度のもので、若干焼けているものの長期にわたって使用したものではない。

遺物の出土は見られない。

157号住居跡（第132図、写真図版21）

北東側尾根状台地基部の西側斜面を見下ろす平坦部分 I N-61、62、63、71、72、73区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-68°20'-Wである。形状は、隅が丸い小判形の隅丸長形状で、北西-南東軸6.5m、北東-南西軸5.25mである。壁は、垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で31cm、西壁で18cm、南壁で30cm、東壁で32cmを測る。面積は、確認面で30.46㎡、床面で28.28㎡である。床はソフトローム面を床面とし、くぼんだ部分には暗褐色土を埋め込み平坦としている。踏み固められた部分が全くなく、炉も検出されない。柱穴については、中央部分に長軸方向に並ぶ径20cm、深さ16cm程度の小ピット(P1・P2)が見られるが、あるいは主柱穴となるのかもしれない。周溝については認められない。

遺物については、台帳では弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土していることになっているが、遺物が行方不明であるため、図示しえなかった。

160号住居跡（第133図、写真図版21・103）

北東側尾根状台地基部の中央部分 H N-96、97、I N-06、07、08、16、17、18区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-40°15'-Wである。形状は、隅が丸い小判形の楕円形状で、北西-南東軸6.82m、北東-南西軸5.93mである。壁は、垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で32cm、西壁で42cm、南壁で40cm、東壁で28cmを測る。面積は、確認面で34.35㎡、床面で32.19㎡、内区(主柱穴内側)で10.13㎡である。床は、ソフトローム面を直接床面としている。踏み固められた形跡はなく、全体に軟弱である。主柱穴は、対角線上に4本見られる。40~60cm程度の楕円形や円形状の掘形である。柱穴の深さは、P1が38cm、P2が28cm、P3が32cm、P4が32cmである。柱間は、P1・P2が3.2m、P1・P3が3.3m、P2・P4が3.15m、P3・P4が3.2mである。柱の抜き取りは、認められない。なお、長軸方向の南東側壁際の床面中央部分に60cm×30cm、深さ30cm程度の楕円形状のピット(P5)が認められる。これは、住居出入口施設の柱穴と思われる。また、その東側の壁際には、径50cm、深さ25cm程度の円形状ピット(P6)が所在するが、位置的に貯蔵穴と思われる。周溝については、認められない。

炉は、主柱穴のP1-P2間の中央部に見られる。長軸100cm、短軸60cmの楕円形状で床を若干掘りくぼめて作られている。火床の範囲も広く、厚さ6cm程度にわたりよく焼けている。中央部よりやや南よりに小規模な炉が認められるが、床面をわずかに掘りくぼめた程度のものである。この部分には、焼土が認められるものの下に土層が10cm程介在しており、炭化物および床面に焼けた痕跡が認められないため、炉であった可能性は疑問である。なお、南西側壁際の床面からは、長さ2m、幅60cm、厚さ20cm程度の焼土の塊が見られる。

遺物については、P2柱穴付近(+10cm)から口縁、頸部に輪積痕を残す甕(2)、覆土中から甕の口縁部(1)、沈線区画山形文に斜縄文を施した壺の胴部片(3)が出土している。

163号住居跡（第134図、写真図版21）

北東側尾根状台地基部の中央部 I O-41、51、52、58区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-38°50'-Wである。形状は、やや楕円形な不整円形状で、規模が小さく北西-南東軸3.78m、北東-南西軸3.26mを測る。壁は、浅く掘り込まれている。面積は、確認面で10.04㎡、床面で8.92㎡を測る。床は、ソフトローム面を床面としているが踏み固めた部分のごくわずかで、全体的に軟弱である。主柱穴は認められない。

炉は、北西側中央床面に見られる。長軸60cm、短軸40cm程度のものである。

遺物の出土は見られない。

164号住居跡（第134図、写真図版22）

北東側尾根状台地基部の中央平坦部分HN-99、100、IN-09、10区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-55°55'-Wである。形状は、隅が丸いやや四角形に近い隅丸長方形で、北西-南東軸4.44m、北東-南西軸3.9mである。壁は浅いが、垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で26cm、西壁で29cm、南壁で24cm、東壁で29cmを測る。面積は、確認面で15.88㎡、床面で14.55㎡である。床は、ソフトローム面を直接床面とし、全体的に軟弱である。踏み固められた部分は認められない。支柱穴については、認められない。なお、長軸方向の南東側壁際の床面に径50cm、深さ20cm程度のピット(P1)が見られる。これは住居出入口施設の柱穴と思われる。また、その北東側壁際には径50cm、深さ22cm程のピット(P2)が認められるが、位置的に貯蔵穴と思われる。周溝については、認められない。

炉については、北西側中央の床面に所在する。大半を後世の攪乱によって壊されている。推定長45cm、幅30cm程度のものである。

遺物については、台帳では弥生土器の壺片などが出土していることになっているが、遺物が行方不明であることや小片のため、図示しえなかった。

174号住居跡（第134図、写真図版22・103）

北東側尾根状台地基部の西側部分HN-57、58、67、68区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-42°00'-Wである。形状はやや角張った不整円形状で、北西-南東軸4.72m、北東-南西軸4.69mである。壁は浅く痕跡程度で、壁高は、北壁で6cm、西壁で8cm、南壁で6cm、東壁で7cmを測る。面積は、確認面で18.54㎡、床面で17.63㎡である。床は、暗褐色土層を直接床面としている。床面は中央部分のみが踏み固められているだけで、周囲は軟弱である。柱穴、周溝については検出されなかった。南東側壁際の床面には径40cm、深さ25cm程度のピット(P1)が見られ、北西方向に抜き取った痕跡が認められる。住居出入口施設に関連したものであろう。

炉は、北西側の中央床面に作られている。焼土が若干見られる程度である。

遺物については、北西側床面(+3cm)から最下段に輪積みの痕跡を残す有段の甕(1)、北側床面(+2cm)から壺の底部(2)、北東床面(床直)から甕の底部(3)、中央床面(床直)から鉢の口縁部片(5)が出土している。また覆土中からは、破片のため形状が不明な穿孔のある土製品(4)が出土している。

177号住居跡（第135図、写真図版22）

北東側尾根状台地基部の中央部分HO-41、42、51、52区に位置する。住居の中央および南西の大部分は175号奈良時代住居跡によって壊されている。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-61°45'-Wである。形状は、やや角張った不整円形状で径3.7mを測る。壁は浅く、壁高は北壁で13cm、西壁で19cmを測る。145号住居跡の床面との比高差は12cm程高い。面積は、確認面で推定7.97㎡、床面で推定7.32㎡となる。床は、ソフトローム面を直接床としている。支柱穴、炉および周溝は現状では認められなかった。北側壁際の床面には、径40cm程度の焼土の塊が見られる。

遺物は、西側隅の床面(+6cm)から壺の底部片(1)が出土している。このほか鉢、甕の破片が出土しているが図示しえなかった。

178号住居跡（第136図、写真図版22・103）

北東側尾根状台地基部の中央からやや先端部分HO-48、49、57、58、59、60、68、69、70区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-43°30'-Wである。形状は、隅が丸い小判形の楕円形状で、北西-南東軸7.1

m、北東—南西軸6.14mである。壁は、垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で32cm、西壁で46cm、南壁で34cm、東壁で22cmを測る。面積は、確認面で35.41㎡、床面で32.7㎡、内区(主柱穴内側)で9.67㎡である。床は、ハードルーム上面を直接床面としている。主柱穴内側の内区は、あまり踏み固められていないが、内区以外の部分は直接踏み固められて固いのが特徴である。主柱穴は、対角線上に4本見られる。70～80cm程度の楕円形状の掘形で、底に近い部分は略方形状である。柱穴の深さは、P1が59cm、P2が61cm、P3が60cm、P4が55cmである。柱間は、P1・P2が3.1m、P1・P3が3.0m、P2・P4が3.1m、P3・P4が3.3mである。柱穴の形状から、柱は外側方向に抜き取られた可能性も考えられる。なお、長軸方向の南東側壁際の床面中央部分に、径30cm、深さ27cm程度の円形状のピット(P5)が認められる。これは、住居出入口施設の柱穴と思われる。また、その北東側壁際には径40cm、深さ28cm程のピット(P6)が認められるが、位置的に貯蔵穴と思われる。周溝については認められない。

炉は、主柱穴のP1—P2間の中央部に見られる。長軸110cm、短軸70cmの楕円形状で床を若干掘りくぼめて作られている。床面には、部分的に焼土が認められるものの、下に暗褐色の土層を介在しており、炭化物が見られることから火災に遭ったものとは思われない。

遺物については、床面から多く出土している。北西隅の床面(床直)から頸部に輪積痕を残す甕(1)、大型の壺底部片(2)、折り返し口縁で下端にキザミを施し、沈線区画内に斜縄文を加えた鉢(4)、壺の頸部片(7)、覆土中から壺の底部片(3)、ハケ目を残す甕(5)、輪積痕を残す甕頸部片(6)が出土している。

184号住居跡 (第135図、写真図版23・103)

北東側尾根状台地の中央部分HP-11、12、21、22区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN—14°30′—Wである。形状は、やや角張った不整円形状で、北西—南東軸4.42m、北東—南西軸4.35mである。壁は、垂直に掘り込まれており、壁高は、北壁で40cm、西壁で39cm、南壁で17cm、東壁で22cmを測る。面積は、確認面で16.2㎡、床面で14.8㎡である。床は、ハードルーム上面を直接床面としている。床面は、周辺部分が踏み固められて固く、中央部分では踏み固められた形跡が認められない。主柱穴については、認められないが、住居東西方向の壁に径20cm、深さ22cm程の2基のピット(P1・P2)が見られる。あるいはこの部分が柱穴となるのかもしれない。また、南東側壁には径50cm、深さ27cm程のピット(P3)が見られる。位置的に貯蔵穴の可能性もある。周溝については、検出されなかった。壁に接して焼土塊が残っている。

炉は、北側中央床面部分に長軸90cm、短軸70cm程度で、若干床を掘りくぼめて作られている。よく焼けており良好である。

遺物については、壺(1・6)、キザミ文様を施す高杯の脚部(3)、ハケ調整の残る台付甕の脚部(4)、鉢(7)、壺の底部(2)などが北側隅の床直上から、また折り返し口縁で下端にキザミを加え、斜縄文を施した鉢(5)が、炉の下位部分から出土している。

186号住居跡 (第137図、写真図版22・103)

北東側尾根状台地の中央部分GP-94、95、HP-04、05、06、15区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN—37°25′—Wである。形状は不整円形状で、南東側部分は削平を受け、痕跡程度の残存である。規模は、長軸で推定4.4m、短軸4.2mである。壁は浅く痕跡程度で、壁高は北壁で7cm、西壁で4cm、東壁で3cmを測る。面積は、確認面で15.35㎡、床面で14.86㎡である。床は、ソフトルーム上面を直接床面としている。踏み固められた部分は中央のみで、周辺は全体に軟弱である。柱穴、周溝については検出されなかった。南側部分の床面に見られる50cm×40cmの長方形ピット(P1)は貯蔵穴と思われる。

炉は、北側中央床面部分に見られる。長軸50cm、短軸40cm程度で、若干床を掘りくぼめて作られている。あま

り焼けてなく、長期に使用したものとは思えない。

遺物については、南側床面のピット内から壺の胴部(1)、底部片(2)、甕の口縁部片(3)などが出土している。

188号住居跡 (第137図、写真図版23)

北東側尾根状台地の中央部G P-81、91区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-49°30'-Wである。形状はほぼ円形状で、規模が小さく径2.95×2.9m前後である。壁は浅いが、垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で8cm、西壁で16cm、南壁で9cm、東壁で4cmを測る。面積は、確認面で6.6㎡、床面で5.8㎡である。床は、ソフトローム面を直接床面としているが、踏み固められた形跡はなく、全体的に軟弱である。支柱穴、周溝は、認められない。

炉は、中央のやや北よりに見られる。径40×30cm程度のもので、若干焼けてはいるが、長期にわたって使用したものではない。

遺物の出土は見られない。

189号住居跡 (第138図、写真図版23・104)

北東側尾根状台地の中央部分G O-99、100、H O-09、10区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-25°30'-Wである。形状はやや角張った不整形円形状で、北西-南東軸4.18m、北東-南西軸4.21mである。壁は、垂直に掘り込まれており、壁高は、北壁で43cm、西壁で40cm、南壁で36cm、東壁で44cmを測る。面積は、確認面で15.14㎡、床面で13.33㎡である。床は、ハードローム上面を直接床面とし、全体に固く良好である。床面全体にわたり、炭化物、焼土が多量に散乱し火災に遭ったことが伺われる。柱穴、周溝については検出されなかった。なお、南側壁際の中央床面には、径50cm、深さ12cm程度のやや楕円形状のピット(P1)が認められる。これは住居出入口施設のものであろう。また、その北東側壁際には一辺30cm四方、深さ27cm程のピット(P2)が認められるが、位置的に貯蔵穴と思われる。

炉は、北西側中央部分および中央西側の2カ所に見られる。いずれも長軸60~70cm、短軸40cm程度で、若干床を掘りくぼめて作られている。よく焼けており良好である。

遺物については、北西側炉内から甕の胴部下半~底部(2)、素口縁壺で斜縄文を8条以上施した口頸部(1)、覆土中から下段に有段を残す甕の胴部破片(3)および鉢の口縁部(4)が出土している。

191号住居跡 (第139・141図、写真図版24・104・177)

北東側尾根状台地中央部分の西側斜面を見下ろすG O-40、50、60、G P-31、32、33、41、42、43、51、52、53、61、62、63区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-51°50'-Wである。形状は隅が丸い隅丸長方形で、当遺跡の弥生時代の住居跡では最大の規模となる。北西-南東軸で10.7m、北東-南西軸で8.5mである。壁は、垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で49cm、西壁で61cm、南壁で70cm、東壁で51cmを測る。面積は、確認面で76.27㎡、床面で68.09㎡で、内区(支柱穴内側)で23.15㎡である。床は、ハードローム上面を直接床面とし、全体によく踏み固められている。床面全体にわたり、焼土、炭化材が散乱しており火災に遭ったものと思われる。支柱穴は、対角線で横長の長方形に4本認められる。柱穴内の覆土は、柱を埋め込んだ当初のままで、柱の抜き取りは、認められない。火災に遭ったため、柱はそのまま残されたものと思われる。柱穴は、長軸80~90cm、短軸40~50cm程度の長方形・楕円形状で深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が51cm、P2が87cm、P3が62cm、P4が97cmである。柱間は、P1・P2が5.1m、P1・P3が4.7m、P2・P4が4.7m、P3・P4が4.9mである。また長軸方向の南東側壁際中央部分の床面に60cm×30cm、深さ30cm程度で、住居外側方向から斜めに掘り込んだ楕円形状のピット(P5)、および壁部分に径60cm、深さ45cm程度の柱穴(P6)が認められるが、住居出入口のハシ

ゴ設置部分の柱穴と思われる。また住居主軸方向の北西壁際には、径60cm、深さ60cm程度の柱穴(P7)が認められる。これは、主柱を補助するものであろう。なおP5柱穴の南東側壁際付近には80cm、深さ25cm程の四角形状のピット(P8)があるが、位置的に貯蔵穴であろう。壁の部分には、浅く幅の狭い周溝と、その中に所々に径20cm程度の小ピットが並んでいるが、これは壁の補強部材を埋め込んだ痕跡と思われる。

炉は北西側のP1—P2柱穴間の中央部分に作られている。長軸120cm、短軸110cm、深さ10cm程度の楕円形状でよく焼けており良好である。

遺物については、球形状の胴部で口縁部を欠失した直口縁の土師器埴(1)、壺の胴部下半～底部(2)および砂岩製・凝灰岩製の砥石2点(3・4)が覆土中から出土している。なお、(1)の埴は伴うものではなく混入品と考えている。

192号住居跡(第140・141図、写真図版24・104)

北東側尾根状台地中央部分の西側斜面を見下ろすGO-44、45、46、54、55、56、57、64、65、66、67、75、76、77区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-61°30'-Wである。形状は、楕円形状で、北西—南東軸で10.2m、北東—南西軸で7.82mである。壁は浅いものの垂直に掘り込まれており、壁高は、北壁で20cm、西壁で12cm、南壁で20cm、東壁で31cmを測る。面積は、確認面で67.61㎡、床面で64.33㎡、内区(主柱穴内側)で20.48㎡である。当遺跡の弥生時代の住居跡では、隣接して所在する191号住居跡に次ぐ規模である。床は、ハードローム上面を直接床面とするが、くぼんだ部分に暗褐色土およびローム土を埋め込み平坦にしている。床面は、部分的に踏み固められ硬化しているものの、全体的には軟弱である。主柱穴は、対角線で横長の長方形に4本認められる。柱穴内の覆土は、柱を埋め込んだ当初のままで柱痕跡が認められることから、住居の放棄後、柱を切断したかそのまま放置されたものと思われる。柱穴は、長軸60～70cm、短軸50～60cm程度の長方形で深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が86cm、P2が76cm、P3が80cm、P4が76cmである。柱間は、P1・P2が4.95m、P1・P3が4.1m、P2・P4が4.2m、P3・P4が4.9mである。なお、長軸方向の南東側壁際の床面中央部分に110cm×70cm、深さ36cm程度の楕円形状のピット(P5)が認められる。これは、住居出入口の施設に関連した柱穴と思われる。P5柱穴の東側隣接の壁際には、80×60cm、深さ50cm程の四角形状ピット(P7)が見られるが、やや深いものの位置的に貯蔵穴と思われる。また住居主軸方向の北西側床面に、径50cm、深さ35cm程度の柱穴(P6)が認められる。主柱を補助するものであろう。周溝は、認められない。

炉は、北西側のP1—P2柱穴間の中央部分に作られている。長軸80cm、短軸70cm、深さ35cm程度で、当住居跡の規模から見ると以外に小さいものであり、またあまり焼けてはいない。床面があまり硬化していないことを含めて、長期に使用しなかったのではないかとと思われる。

遺物については、南東側床面を中心に比較的多く出土している。南東隅の床面(床直)から口縁部に沈線区画と交互斜縄文を施した鉢(1・4)、長胴の甕(5)、甕底部片(6)、小型の鉢(3)、南西側床面(+2.5cm)から円形付文や竹管文で装飾した高杯の脚部(8)、覆土中から口縁部に沈線区画と交互斜縄文を施した鉢(2)、壺の口縁部片(7)などが出土している。全般的に、古い様相を示している。

198号住居跡(第142図、写真図版24)

北東側尾根状台地中央部分の西側斜面部GO-14、15、24、25区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-11°40'-Wである。形状は、隅が丸い小判形の楕円形状で、北西側は斜面の下位になるため、ほとんど残っていない。推定で北西—南東軸4.8m、北東—南西軸4.35mである。斜面部のため壁は浅く、壁高は西壁で6cm、南壁で8cm、東壁で7cmを測る。面積は、確認面で推定17.7㎡、床面で17.08㎡である。床は、ソフトローム面を床面とし、踏み固められた部分が全くなく全体に軟弱である。柱穴、周溝については認められない。

炉は、北西側中央部分に作られている。痕跡程度で50×30cmの規模である。あまりよく焼けてはいない。

遺物については、出土しなかった。

199号住居跡（第142図、写真図版24）

北東側尾根状台地中央部分の西側斜面部G O-17、18、27、28区に位置する。住居は北東方向に傾き、主軸方位はN-33°00'-Eである。形状は、小判形の楕円形状で規模が小さく、長軸2.96m、短軸2.4mである。壁は浅く、壁高は北壁で8cm、西壁で16cm、南壁で7cm、東壁で13cmを測る。面積は、確認面で5.5m²、床面で4.73m²である。床は、ソフトローム面を直接床面としているが、踏み固められた形跡はなく、全体的に軟弱である。支柱穴は、認められないが、東西方向の壁際床面に径30cm、深さ20cm程度のピット(P1・P2)が見られる。あるいは柱穴になるのかもしれない。周溝は認められない。

炉は、南側中央部分に作られている。50×40cm程度のもので、若干焼けているものの、長期にわたって使用したものではない。

遺物については、出土しなかった。

200号住居跡（第142図）

北東側尾根状台地中央部分の西側斜面部F O-99、100、G O-08、09、10、19、20区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-13°00'-Wである。形状は、隅が丸い小判形の楕円形状と思われるが、住居の作られた場所が西側斜面部のため、南側の壁を除いてほとんど残っていなかった。規模は、推定で北西-南東軸6.3m、北東-南西軸4.8mである。面積は、確認面で推定25.45m²、床面で24.9m²である。柱穴、周溝については認められない。

炉は、北西側中央部分に作られている。痕跡程度で75×60cmの規模である。あまりよく焼けてはいない。

遺物については、出土しなかった。

201号住居跡（第142図、写真図版24）

北東側尾根状台地中央部分の西側斜面部G P-12、13区に位置する。住居はほぼ円形状で、炉が認められないことから主軸方向は不明である。規模は、径2.9m前後でかなり小さい。壁は、比較的深く垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で11cm、西壁で34cm、南壁で33cm、東壁で30cmを測る。面積は、確認面で6.54m²、床面で5.3m²である。柱穴、周溝および炉は、認められない。床中央部分に長方形の土坑が見られるが、これは後世の攪乱である。

遺物の出土は見られない。

204号住居跡（第143・144図、写真図版25・104）

北東側尾根状台地の中央部分G P-76、77、86、87、96、97区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-38°00'-Wである。形状は、やや角張った北西方向に長い隅丸形状で北西-南東軸5.34m、北東-南西軸4.97mである。壁は、深く垂直に掘り込んでいる。壁高は、北壁で44cm、西壁で54cm、南壁で31cm、東壁で56cmを測る。面積は、確認面で22.63m²、床面で20.61m²、内区(支柱穴内側)で7.23m²である。床は、ソフトローム上面を直接床面としている。支柱穴は、対角線上にほぼ均等に4本見られる。長軸25~40cm、短軸20~30cm程度の楕円形状の掘形で深く掘削しており、底に近い部分は略方形形状である。柱穴の深さは、P1が75cm、P2が71cm、P3が70cm、P4が79cmである。柱間は、P1・P2が2.75m、P1・P3が2.6m、P2・P4が2.6m、P3・P4が2.8mである。北西側壁際の床面に、横方向に規則的に並ぶ径20~30cm、深さ7cm程度の8基の小ピットについては、上屋構造に関連する柱穴であろう。また、南東壁際にある42×38cm程の四角形状のピット(P5)は、貯蔵穴と考えられる。

周溝については、認められない。

炉は、北西側中央床面部分に1カ所、および北東側壁から住居外側に掘りくぼめ張り出した平坦部分の2カ所に作られている。北西側中央部分の炉は、長軸110cm、短軸60cm、深さ16cm程度で、床をしっかりと掘り込んで作られている。炉の本体も広範囲でよく焼けている。北東側の炉は、壁から1m、幅1.2m前後、床面から30cm程度の半円形の平坦な張り出し部分を作り、その部分に90×70cm、深さ15cm程度で外側に立ち上がる楕円形状の炉を掘り込んで作っている。炉の本体は60×50cm程でよく焼けている。

遺物については、南東側および北西側の床面から多く出土している。南東隅の床面(+6cm)からは沈線区画と斜縄文で施した壺の頸部破片(4)、同床面(+3cm)から頸部に押圧痕をキザミ状に施す甕(6)、壺の頸部(13)、南西床面(+6cm)から頸部にわずかに輪積痕を残す甕(7)、中央床面(床直)からは、口縁に沈線区画と斜縄文を施した鉢(1)および小型の長胴甕(8)、北西床面(+2cm)から口縁に沈線区画と斜縄文を施した小型鉢(2)、同床面(+4cm)から頸部に輪積痕を残した甕(5)、山形沈線文で区画した壺の頸部片(14)、同覆土中(+23cm)から小型壺(9)、覆土中から鉢の口縁部(3・15)、胴部下半部(10・11)、壺の胴部片(16)、甕の底部片(12)などが出土している。なお、住居内からは、イボキサゴを主体としたブロック状の貝類を検出している(第II章 第4節で分析)。

206号住居跡 (第145図、写真図版25・104)

北東側尾根状台地中央部分の東側斜面を見下ろすHP-35、45、46、55区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-29°50'-Wである。住居は北側部分の壁、床の大方の部分で205号奈良時代住居跡、および南側の床を207号平安時代住居跡のカマド煙道によって壊されている。形状は楕円形状で、規模は、長軸で推定4.5m、短軸4.1mである。地形が、北西から南東に緩やかに傾斜するため、壁は北西側がしっかり残っているが南東側は痕跡程度である。壁高は、北壁で38cm、西壁で34cm、南壁で6cm、東壁で6cmを測る。面積は、確認面で15.5㎡、床面で14.61㎡である。床は、ハードルーム上面を直接床面としている。床面は、205号住居跡によって大方壊されているため、全体は不明であるが、中央部分が踏み固められて硬化している。床面には焼土、炭化物が密着した状態で検出されている。火災にあったかどうかは不明である。支柱穴、周溝については検出されなかった。

炉については、北側床面にあったと思われるが、205号住居跡によって壊されているため位置、規模等は不明である。

遺物については、西側床面(+11cm)から沈線区画および山形沈線区画と斜縄文を施した壺(1)、壺の胴部破片(2)が出土している。なお、(1)の壺の胴部下半には、縦に長い竜骨状の突起が見られる。

212号住居跡 (第146図、写真図版25・104・105)

北東側尾根状台地の中央部分GP-67、68区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-34°10'-Wである。形状はやや不整形な円形状で、規模は長軸で3.62m、短軸3.28mである。壁は浅いが、垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で21cm、西壁で10cm、南壁で13cm、東壁で10cmを測る。面積は、確認面で9.57㎡、床面で8.8㎡である。床は、ソフトルーム上面を直接床面としている。柱穴、周溝については検出されなかった。床面には焼土・炭化物が残っている。

炉は、北西側隅の部分に作られている。長軸70cm、短軸60cm程度で、15cm程床を掘りくぼめて作られている。また炉の西側縁にはイボキサゴを主体としたブロック状の貝類が残されている(第II章 第4節にて分析)。

遺物については、中央床面(+7cm)から斜縄文と下端にキザミを施した複合口縁壺の口縁部(2)、覆土中から複合口縁壺の口縁部(1)、円形浮文を貼り付けた複合口縁壺の口縁部(3)、キザミを施した複合口縁壺の口縁部(4)、胴部破片(7)、甕の胴部片(5)、口縁部片(6)が出土している。

213号住居跡（第146図）

北東側尾根状台地の先端部分の西側斜面F P-78、79、88、89区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-10°20'-Wである。形状は、やや不整形な円形を呈する。規模は径2.4m前後を測る。面積は、確認面で4.39㎡、床面で3.63㎡となり、当遺跡の弥生時代の住居跡では最も規模の小さい住居跡である。詳細な図面がないため不明部分が多い。

遺物の出土はない。

214号住居跡（第147図、写真図版25）

北東側尾根状台地先端部分の西側斜面F P-70、80、F Q-61、71区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-28°30'-Wである。形状は、隅が丸い小判形の楕円形状で、北西-南東軸5.06m、北東-南西軸4.47mである。壁はやや内側に傾斜している。壁高は、北壁で22cm、西壁で38cm、南壁で38cm、東壁で28cmを測る。面積は、確認面で18.82㎡、床面で16.99㎡、内区(主柱穴内側)で5.38㎡である。床はハードローム上面を床面とし、くぼんだ部分に暗褐色土を埋め込んで平坦にしている。床面は、部分的に踏み固められているが、全体に軟弱である。床面には焼土、炭化物が認められる。主柱穴は、対角線上に4本見られる。30～50cm程度の円形、楕円形状の掘形で、深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が70cm、P2が68cm、P3が92cm、P4が88cmである。柱間は、P1・P2が2.5m、P1・P3が2.2m、P2・P4が2.36m、P3・P4が2.4mである。柱の抜き取りは認められない。なお、南東側壁際中央部分の床面に径35cm、深さ35cm程度で住居外側方向から斜めに掘りくぼめられた円形状のピット(P5)が認められる。これは、住居出入口施設の柱穴と思われる。またP5柱穴の東側隣接には径40cm、深さ27cm程のやや四角形状のピット(P6)が見られるが、これは位置的に貯蔵穴と思われる。周溝については認められない。

炉は主柱穴のP1-P2間の中央部に見られる。長軸120cm、短軸80cmの楕円形状で、床を若干掘りくぼめて作られている。火床は、よく焼けている。

遺物の出土はない。

215号住居跡（第147・148図、写真図版25・26・105）

北東側尾根状台地先端部分の西側斜面F Q-46、47、48、56、57、58、67、68区に位置する。住居は北方向で、主軸方位はN-0°55'-Wである。住居東側の壁および床部分を、216号平安時代住居跡によって壊されている。形状は、隅が丸い小判形の楕円形状で、南北軸7m、東西軸5.75mである。壁は、垂直に掘り込まれている。地形が南西から北東方向に緩やかに傾斜することから、壁高は北壁で54cm、西壁で60cm、南壁で57cm、東壁で33cmを測る。面積は、確認面で34.26㎡、床面で31.23㎡、内区(主柱穴内側)で10.24㎡である。床は、ハードローム上面を直接床面としているが、全体的に軟弱である。住居西側を中心に、床には炭化物が多く残されている。主柱穴は、対角線上に4本見られる。長軸50～60cm、短軸30～40cm程度の長方形で深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が76cm、P2が84cm、P3が85cm、P4が91cmである。柱間は、P1・P2が3.3m、P1・P3が3.1m、P2・P4が3.0m、P3・P4が3.3mである。柱の抜き取りは、認められない。南側壁際の床面中央部分に長軸50cm、短軸40cm、深さ44cm程度の長方形のピット(P5)が認められるが、住居出入口のハシゴ施設の柱穴と思われる。また、P5柱穴の東側隣接の壁際には50×40cm、深さ30cm程の四角形状のピット(P6)があるが、これは位置的に貯蔵穴と思われる。周溝については、認められない。

炉は、主柱穴のP1-P2間の中央部に見られる。長軸100cm、短軸70cmの楕円形状で床を若干掘りくぼめて作られている。火床は、よく焼けており良好である。

遺物については、西側隅の床面(+10cm)から輪積痕を残した甕(2)、複合口縁壺の口縁部(7)、壺の胴部片(10)、北側壁際の床面(+4cm)から頸部に輪積みの痕跡を残した甕(3)、覆土中からは頸部に輪積みの痕跡を残した有段の甕(1)、甕の底部片(4)、有段とキザミを施した甕の頸部片(9)、壺の底部片(5・11)、複合口縁壺の口縁部片(6)、胴部破片(12・13)、口縁部に沈線区画と交互斜縄文を施した鉢(8)などが出土している。

217号住居跡 (第149図、写真図版26・105・177)

北東側尾根状台地の先端部分の西側斜面FQ-29、30、39、40区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-9°40'-Wである。形状は、隅が丸い楕円形状で、北西-南東軸4.4m、北東-南西軸3.95mである。壁は、垂直に掘り込まれている。地形が南西から北東へ緩やかに傾斜することから、壁高は北壁で4cm、西壁で14cm、南壁で22cm、東壁で8cmを測る。面積は、確認面で14.29m²、床面で12.91m²である。床は東部分がソフトローム層中、西半分がハードローム上面を直接床面とし、くぼんだ部分に暗褐色土を敷き平坦にしている。床面は踏み固められた部分は少なく、全体的に軟弱である。支柱穴、周溝は認められない。なお、南東側壁際の床面には径40cm、深さ14cm程度の円形状のピット(P1)が見られるが、位置からすると貯蔵穴の可能性も考えられる。

炉は、北側床面の中央付近に作られている。長軸100cm、短軸75cmの楕円形状で、床をやや掘りくぼめて作られている。火床はよく焼けている。

遺物については、西側床面(+2cm)から壺の胴部下半~底部(4)、覆土中から頸部に有段とキザミを施した甕(1)、輪積痕を残した甕(2)、口縁に沈線区画と交互斜縄文を施した鉢(3)、砂岩製の砥石(5)などが出土している。甕(1)の口縁内側には、キザミを施しているなど、全般的に古い様相が見られる。

218号住居跡 (第150・151図、写真図版26・105・177・178)

北東側尾根状台地先端部分の西側斜面EQ-98、99、100、FQ-08、09、10区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-29°20'-Wである。形状は、隅が丸い小判形の楕円形状で、北西-南東軸5.83m、南西-北東軸4.85mである。壁は、垂直に掘り込まれている。地形が南西から北東方向に緩やかに傾斜することから、壁高は北壁で18cm、西壁で40cm、南壁で45cm、東壁で20cmである。面積は、確認面で23.28m²、床面で21.84m²、内区(支柱穴内側)で7.89m²である。床は、ハードローム上面を直接床面としている。床面は、直接踏み固められて硬化している所は部分的で、全体に軟弱である。支柱穴は、対角線上に4本見られる。径40~50cm程度の円形状で深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が51cm、P2が65cm、P3が71cm、P4が61cmである。柱間は、P1・P2が3.0m、P1・P3が2.9m、P2・P4が2.8m、P3・P4が2.65mとなる。柱の抜き取りは認められない。周溝については認められない。なお、南東側壁際の床面に、径50cm、深さ42cm程の円形状ピット(P5)が見られるが、位置的に貯蔵穴と考えられる。

炉は、支柱穴のP1-P2間の中央部に見られる。径90cm前後のやや不整形な円形で、床を若干掘りくぼめて作られている。火床はよく焼けており良好である。

遺物については、中央床面(床直)から頸部に有段を残し、キザミを施した甕(1)、北西側隅の床面(床直)から大型壺の胴部下半部分(5)、南東床面のP4柱穴付近から頸部に輪積みを残した甕(6)、覆土中からは台付甕の脚部(4)、網目状文(付加条3種)を施した複合口縁壺の口縁部(2)、山形沈線区画を施した壺の口縁部(3)、軽石製砥石(8・9)、粘板岩製砥石(7)などが出土している。

221号住居跡 (第152~154図、写真図版26・105・106・178)

北東側尾根状台地先端部分の西側斜面ER-91、92、FR-01、02、11、12区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-29°30'-Wである。形状は、隅が丸い小判形の楕円形状で、北西-南東軸5.6m、南西-北

東軸4.7mである。壁は、垂直に掘り込まれている。地形が南西から北東方向に緩やかに傾斜することから、壁高は北壁で30cm、西壁で68cm、南壁で49cm、東壁で10cmである。面積は、確認面で22.29㎡、床面で19.18㎡、内区(主柱穴内側)で6.43㎡である。床は、ハードローム上面を直接床面としている。直接踏み固められて硬化している所は内区部分で、周辺は軟弱である。主柱穴は、対角線上に4本見られる。径20～50cm程度の円形状および略四角形状で深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が88cm、P2が76cm、P3が75cm、P4が65cmである。柱間は、P1・P2が2.3m、P1・P3が2.85m、P2・P4が2.8m、P3・P4が2.25mとなる。周溝については認められない。なお、南東側壁際の床面に、径50cm、深さ40cm程の円形状ピット(P5)が見られるが、位置的に貯蔵穴と考えられる。また、床面からは炭化材などが出土していることから、本住居が焼失したものと思われる。

炉は、主柱穴のP1—P2間の中央部に見られる。径90cm前後のやや不整形な円形で床を若干掘りくぼめて作られている。火床はよく焼けており良好である。

遺物については、南東床面を中心に床に密着した状態で甕類などが多く出土している。南側床面(床直)からは口縁～頸部に輪積みを残した甕(5・7)、斜縄文を施し下端にキザミを入れた壺の口縁部(2)、沈線区画に斜縄文を施した壺の破片(13・15・16)、鉢の口縁部片(23)、同床面(+2～4cm)から大型壺の胴部下半部分(4・11)、小型高杯(12)、口縁～頸部に輪積痕とキザミを施したやや長胴の甕(10)、鉢の口縁・体部片(14・24)、南東床面(床直)から口縁～頸部に輪積痕と下端にキザミを施した甕(8)、東側床面(床直)から網目状文(付加条3種)を施し下端にキザミを入れた複合口縁壺の口縁部(1)、同床面(+3cm)から輪積みを残した甕(6)、中央床面(床直)から大型壺の胴部下半部(3)、輪積痕と下端にキザミを施した甕(9)、沈線区画と斜縄文を施した壺の胴部破片(18・19)、覆土中からは甕の胴部破片(22)、山形沈線と斜縄文を施した壺の破片(17・20・21)、砂岩製の敲石(25)などが出土している。なお遺物中、壺(1)および破片のなかには、器面がカルメ焼のように気泡状に穴の開いた灰褐色状で、軽く発泡した土器が見られる。火災に遭い、土器が熱により2次的に変化したものと思われる。

222号住居跡 (第155図、写真図版26・106)

北東側尾根状台地の先端部分の西側斜面E R-82、83、92、93区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN—25°30′—Wである。形状は楕円形状で、北西—南東軸5.35m、南西—北東軸4.22mである。壁は垂直に掘り込まれている。地形が南西から北東方向に緩やかに傾斜することから、壁高は北壁で35cm、西壁で60cm、南壁で42cm、東壁で18cmである。面積は、確認面で18.53㎡、床面で16.92㎡である。床は、ハードローム上面を直接床面としている。床面は、直接踏み固められて硬化している所は中央部分で、周辺は軟弱である。主柱穴、周溝については認められない。南東側壁際の床面に径40cm、深さ69cm程度の柱穴(P1)が認められるが、住居出入口施設のものが不明である。

炉は、北西床面の中央部に見られる。主軸をさらに西に傾けた炉で、長軸140cm、短軸100cm、深さ14cm程度の不整形な楕円形状をしている。火床はよく焼けており良好である。

遺物については、東側壁際の床面(床直)から底部を穿孔した甕(1)、北側床面の炉内から壺の胴部(3)、中央床面(+17cm)から大型壺の底部片(4)、覆土中からは頸部の有段とキザミを残した甕の胴部破片(2)、壺の底部片(5)、鉢の体部下半～底部(6)などが出土している。

223号住居跡 (第156図、写真図版26)

北東側尾根状台地先端部分の北東側斜面E R-65、66、75、76区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN—24°35′—Wである。形状は隅丸長方形形状で、北西—南東軸4.55m、南西—北東軸4.0mである。壁は、垂直に掘り込まれている。地形が南西から北東方向に緩やかに傾斜することから、東側部分の壁は部分的に痕跡程

度の残存で、壁高は北壁で24cm、西壁で57cm、南壁で30cmである。面積は、確認面で15.24㎡、床面で13.93㎡である。床は、ハードローム上面を直接床面としている。全体的に固く硬化している。床は西側がハードローム上面を、東側はソフトローム面を直接床面としている。直接踏み固められた部分はわずかで、全体的に軟弱である。主柱穴、周溝は認められない。

炉は、北西床面の中央部に見られる。主軸を住居方向とは逆の北東に向けており、長軸100cm、短軸70cm、深さ18cm前後の楕円形をしている。火床は深くよく焼けており良好である。

遺物は認められなかった。

224号住居跡（第157図、写真図版26・106）

北東側尾根状台地先端部分の中央付近FR-43、44、53、54区に位置する。住居は北東方向に傾き、主軸方位はN-40°30'-Eである。形状はやや不整な円形状で、北東-南西軸3.95m、北西-南東軸3.7mである。壁は、垂直に掘り込まれている。地形が南西から北東方向に緩やかに傾斜することから、壁高は北壁で42cm、西壁で81cm、南壁で68cm、東壁で52cmを測る。面積は、確認面で13.35㎡、床面で10.43㎡である。床はハードローム上面を直接床面としている。全体的に固く硬化している。主柱穴は認められない。南西側壁際の床面には、40×30cm、深さ40cm程度で、住居外側方向から内側に向かって斜めに掘りくぼめられた横長方形ピット(P1)が見られるが、これは住居出入口のハシゴ設置の柱穴と思われる。また、柱穴の南東側壁に張り出した長軸80cm、短軸50cm程度、深さ20cmの楕円形状の土坑(P2)、および南側壁際に掘られた一辺40cm、深さ20cm程の四角形状ピット(P3)は、位置的に貯蔵穴と思われる。周溝については認められない。

炉は、北東床面の中央部に見られる。径60cm前後で床をわずかに掘りくぼめた円形状である。火床はよく焼けており良好である。

遺物は、東側床面(+3cm)から頸部にわずかに段を残す甕(1)、南側壁際の柱穴付近床面(+5cm)からは山形文沈線区画と斜縄文を施す壺の胴部(3)、覆土中からは口縁内面にキザミを施す甕の口頸部(2)、沈線区画を施す壺の胴部片(5)、鉢の口縁部(4)、須恵器杯(6)が出土している。このうち須恵器杯(6)については、南側に所在する掘立柱建物群(519号、523号、525号)の時期を考える上での参考となろう。

225号住居跡（第156図、写真図版27・106）

北東側尾根状台地先端部分の南東側斜面FR-95、96、97、GR-05、06、07区に位置する。住居は北方向で主軸方位はN-3°30'-Wである。形状は楕円形状で、北西-南東軸5.1m、南西-北東軸4.24mである。壁は、垂直に掘り込まれている。地形が北西から南東方向に緩やかに傾斜する斜面であることから、南東側部分の壁は部分的に痕跡程度の残存である。壁高は、北壁で60cm、西壁で78cm、南壁で59cm、東壁で4cmである。面積は、確認面で17.91㎡、床面で15.96㎡、内区(主柱穴内側)で6.02㎡である。床はハードローム上面を直接床面としている。床面は、内区部分が固く硬化している。周囲は軟弱である。床面には焼土、炭化材が散乱していることから、この住居は火災に遭ったものと思われる。主柱穴は、対角線上に4本見られる。30～50cm程度の円形、略方形の掘形で、深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が94cm、P2が95cm、P3が91cm、P4が82cmである。柱間は、P1・P2が2.6m、P1・P3が2.2m、P2・P4が2.6m、P3・P4が2.45mである。柱の抜き取りは認められない。なお、長軸方向の南東側壁際の床面中央部分に径20cm、深さ16cm程度の円形状のピット(P5)が認められるが、住居出入口施設の柱穴と思われる。また、南東側壁際の床面に、径40cm、深さ20cm程のやや四角形状のピット(P6)が見られるが、位置的に貯蔵穴と考えられる。周溝については認められない。

炉は、北側床面の中央部に見られる。長軸85cm、短軸55cm、深さ8cm前後の楕円形状をしている。火床はよく焼

けており良好である。

遺物は、北側壁際の床面(床直)から甕の胴部下位(2)、覆土中から折り返し口縁壺の口縁部(1)が出土している。

226号住居跡 (第158図、写真図版27・106)

北東側尾根状台地先端部分の南東側斜面GR-32、33、42、43区に位置する。住居南側の壁および床は、228号住居跡によって壊されている。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-21°20'-Wである。形状は、隅が丸い楕円形状で、北西-南東軸4.8m、南西-北東軸4.1mである。壁は垂直に掘り込まれている。地形が北西から南東方向に緩やかに傾斜する斜面であることから、南東側部分の壁は部分的に痕跡程度の残存である。壁高は北壁で41cm、西壁で50cm、東壁で7cmである。面積は、確認面で17.13㎡、床面で15.94㎡、内区(支柱穴内側)で5.88㎡である。床は、ハードローム上面を直接床面としている。床面は、炉の近辺が、特に踏み固められ硬化している。住居北西側の床面を中心にして焼土、炭化材が散乱していることから、この住居は火災に遭ったものと思われる。支柱穴は、対角線上に4本見られる。30~40cm程度の円形、略方形の掘形で、深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が52cm、P2が43cm、P3が48cm、P4が47cmである。柱間は、P1・P2が2.3m、P1・P3が2.7m、P2・P4が2.4m、P3・P4が2.4mである。周溝については認められない。

炉は、北側床面の中央部に見られる。長軸55cm、短軸35cm、深さ4cm前後の楕円形をしている。火床はよく焼けている。

遺物は、北側床面(床直)の焼土塊の下から1個体分の甕(1)が出土している。

229号住居跡 (第159図、写真図版27・106)

北東側尾根状台地先端部分の中央部FQ-79、80、89、90、99、100、FR-81、91区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-18°50'-Wである。住居の中央から南側にかけて、523号掘立柱建物がかかっており、その柱穴掘形で、床面および西、南、東側の壁を壊されている。形状は隅が丸い小判形の楕円形状で、北西-南東軸6.6m、南西-北東軸5.58mである。壁は、垂直に掘り込まれている。壁高は北壁で59cm、西壁で51cm、南壁で25cm、東壁で40cmを測る。面積は、確認面で30.14㎡、床面で26.91㎡、内区(支柱穴内側)で9.39㎡である。床はハードローム上面に、ローム土および暗褐色土の混合土を敷き詰め床面としている。床面は、直接踏み固められた部分は、中央部のみで、それも全体にあまり固くない。周囲は軟弱である。支柱穴は、対角線上に4本見られる。径50cm程度の円形状で深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が63cm、P2が43cm、P3が60cm、P4が47cmである。柱間は、P1・P2が3.0m、P1・P3が3.0m、P2・P4が3.3m、P3・P4が2.95mである。柱の抜き取りは認められない。南側壁際の床面中央部分に長軸80cm、短軸60cm、深さ28cm程度の楕円形状のピット(P5)が認められるが、住居出入口施設の柱穴と思われる。周溝については認められない。

炉は、支柱穴のP1-P2間の中央部に見られる。長軸110cm、短軸90cmの楕円形状で床を9cm程掘りくぼめて作られている。火床はよく焼けており良好である。

遺物については、北側床面の炉付近(+1cm)から輪積痕を残し口縁部があまり開かない小型の甕(1)、中央床面(+3cm)からは沈線区画と交互の斜縄文を施した鉢(2)、覆土中から沈線区画に網目状文(付加条3種)を施した壺の口頸部片(3)および沈線区画に交互斜縄文を施した胴部破片(4)などが出土している。

230号住居跡 (第160・161図、写真図版27・28・106・107・178)

北東側尾根状台地先端部分の中央部GQ-10、19、20、29、30、GR-11、21区に位置する。住居はほぼ真北方向で、主軸方位はN-1°00'-Wである。隅が丸いやや幅広の円形状で、南北軸5.9m、東西軸5.35mである。壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で41cm、西壁で44cm、南壁で27cm、東壁で6cmを測る。面積は、確認面

で26.7㎡、床面で24.71㎡、内区(主柱穴内側)で8.12㎡である。床はハードルーム上面を直接床面とし、くぼんだ部分に暗褐色土を埋め込んで平坦としている。床面は、踏み固められて硬化した部分は少なく、全体に軟弱である。北西隅の細長い土坑状のものは394号陥穴である。主柱穴は、P1部分が394号陥穴部分にかかっていたため不明であるが、対角線上に現状3本認められる。径30cm程度の円形状で比較的小規模であるが深く掘り込んでいる。柱穴の深さは、P2が56cm、P3が68cm、P4が78cmである。柱間は、P1・P2が推定2.9m、P1・P3が推定2.9m、P2・P4が2.9m、P3・P4が2.9mである。柱の抜き取りは認められない。なお、南東側壁際の床面に、径50cm、深さ27cm程の楕円形状ピット(P5)が見られるが、位置的に貯蔵穴と考えられる。

炉は、北側床面の中央部および東側、中央部分の3カ所に見られる。北側床面の炉はしっかりとした作りで長軸100cm、短軸60cmの楕円形状で、床を8cm程掘りくぼめて作られている。火床は、よく焼けており良好である。他の2カ所の炉は、しっかりしたものではなく床面が焼けている程度である。

遺物については、中央の床面に土器類、北西側の壁際床面にかけて石製品類が多く出土している。北側床面(+18cm)からは口縁部を沈線で区画し斜縄文とキザミを施した高杯(4)、同床面(+6cm)から大型壺の底部(8)、同床面の炉内から壺の胴部(5)、中央床面(+11cm)から頸部に有段状の輪積痕を残しキザミで装飾する甕(2)、南東隅の床面(+4cm)から壺の胴部下半部分(6)、覆土中から沈線区画に網目状文(付加条3種)を施した壺の口頸部(7)、頸部に輪積痕を残した有段の甕(1)、沈線区画に交互斜縄文を施した鉢(3)が出土している。石製品類については、中央西側の床面(床直)から軽石製の砥石(9)、北側壁際の床面(+2cm)から軽石製砥石(10、12)、北西隅壁際から砂岩製の敲石(13)、軽石製砥石(11)などが出土している。

232号住居跡 (第162図、写真図版28・107・177)

北東側尾根状台地先端の東斜面部分FR-37、38、47、48区に位置する。住居は北西方向に傾き、主軸方位はN-9°00'-Wである。形状は、隅が丸いやや不整形な円形状で、北西-南東軸3.72m、北東-南西軸3.3mである。壁は垂直に掘り込まれている。地形が西側から東方向に緩やかに傾斜することから、壁高は北壁で42cm、西壁で63cm、南壁で20cm、東壁で8cmを測る。面積は、確認面で10.41㎡、床面で8.57㎡である。床は東側部分がソフトルーム、西側がハードルーム上面を直接床面としている。床面は、中央部分のみが直接踏み固められているだけで、周囲はやや軟弱である。主柱穴は認められない。なお、南西側壁際の床面中央には、径30cm、深さ15cm程の円形ピット(P1)が見られるが、住居出入口施設の柱穴と思われる。また、南東側壁際の床面に、径30cm、深さ20cm程の円形状ピット(P2)が見られるが、位置的に貯蔵穴と考えられる。周溝については認められない。

炉は、北西床面の中央部に見られる。径70cm前後で、床を9cm程掘りくぼめた円形状で、火床はよく焼けており良好である。

遺物は中央床面(+18cm)から器高の低い小型の甕(2)、南西床面(床直)から輪積みを残す甕(3)、覆土中から頸部に輪積痕の有段の甕(1)、輪積みを残す甕(4)、網目状文(付加条3種)を施す複合口縁壺の口縁部(5)、斜縄文を施す同壺の口縁部(6)、また、北側隅の床面(床直)から砂岩製の砥石(7)が出土している。

234号住居跡 (第163・164図、写真図版28・107・178)

北東側尾根状台地基部の中央からやや先端部分GO-94、95、HO-03、04、05、14、15区に位置する。住居は北方向で、主軸方位はN-4°10'-Wである。形状は、隅が丸い小判形の楕円形状で、南北軸6.36m、東西軸5.24mである。壁は、浅いが垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で23cm、西壁で37cm、南壁で35cm、東壁で33cmを測る。面積は、確認面で28.55㎡、床面で26.8㎡、内区(主柱穴内側)で8.12㎡である。床はハードルーム上面を直接床面としている。主柱穴は、対角線上に4本見られる。径50cm前後の楕円形状の掘形で、底に近い部分は方形

状である。柱穴の深さは、P1が47cm、P2が58cm、P3が56cm、P4が52cmである。柱間は、P1・P2が2.9m、P1・P3が2.8m、P2・P4が2.8m、P3・P4が2.9mである。P1、P2の掘形から柱を建替えた可能性が考えられる。南側床面のP3—P4柱穴の間には径40cm、深さ30cm前後のピット(P5)が見られるが、これは住居出入口施設に関連した柱穴と思われる。また南東側壁際には、40×50cm、深さ34cm程度の方形状のピット(P6)があり、その周りを幅40cm、高さ5cm程度の半円形に土を持った凸堤状の「馬蹄形遺構」が取り囲んでいる。出入口脇という位置や区画されていることから貯蔵穴であろう。周溝は認められない。

炉は、主柱穴のP1—P2間の中央部に見られる。長軸90cm、短軸60cmの楕円形状で床を10cm程掘りくぼめて作られている。

遺物については、北側壁際の床面(床直)から頸部に輪積みを明瞭に残す甕の頸～胴部片(2)、覆土中から頸部に有段とキザミを残す甕の胴部片(1)、大型壺の底部(3)、沈線区画に斜縄文を施す壺の胴部破片(4)、砂岩製の敲石(5)などが出土している。丸瓦片(6)は混入である。

235号住居跡(第165図、写真図版28・107)

北東側尾根状台地中央の西側部分HN-18、19、20、28、29、30、38、39、40区に位置する。住居は北方向で、主軸方位はN-2°30'-Wである。形状はやや角張った隅丸長方形で、南北軸で7.73m、東西軸で6.0mである。壁は、浅いものの垂直に掘り込まれており、壁高は北壁で40cm、西壁で34cm、南壁で36cm、東壁で30cmを測る。面積は、確認面で42.14㎡、床面で38.92㎡、内区(主柱穴内側)で9.91㎡である。床はハードローム上面を直接床面としている。主柱穴は対角線に4本認められる。柱穴は径60～70cm程度のやや不整形な円形で深く掘り込んでいゑる。柱穴の深さは、P1が65cm、P2が63cm、P3が60cm、P4が64cmである。柱間は、P1・P2が3.1m、P1・P3が3.1m、P2・P4が3.3m、P3・P4が3.1mである。また南側壁際の床面中央部分に50cm×40cm、深さ15cm程度の方形状のピット(P5)が認められるが、住居出入口施設に関連した柱穴と思われる。周溝は認められない。

炉は、北西側のP1—P2柱穴間の中央部分に作られている。主軸を北西方向に向けた炉で、長軸90cm、短軸70cm、深さ12cm程度の規模である。

遺物については、東側壁際の床面(床直)大型壺の口頸部(1)、南西隅の床面(+3cm)からナデ調整の大型壺の胴部片(2)、位置不明だが床面から小型鉢(3)が出土している。

第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、遺跡内の谷を挟んだ南側台地および北側の尾根状台地のほぼ全域にわたって形成されている。住居跡総数は119軒を数える。営まれた時期は、奈良時代中頃から平安時代前期頃までのおよそ150～200年間に及んでいる。以下、住居跡ごとに概要を記述する。

1号住居跡（第166・167図、写真図版29・108・173）

遺構は、遺跡南東隅の南斜面部に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分 L S—98、99、M S—08、09、18、19区に所在する。1号、2号、3号住居跡が、各々重複している。各住居跡の重複関係の新旧は、1号住居跡→2号住居跡→3号住居跡の順となる。住居の主軸は北東を向き、主軸方位はN—57°—Eである。住居の北西半分を2号住居跡に壊されている。住居の角はほぼ直角で、壁は住居の重複や削平を受け、部分的に痕跡程度の残存である。形状は北西—南東に長い横長方形で北西—南東軸4.23m、北東—南西軸3.1mを測る。壁高は北西壁で20cm、南西壁で5cm、北東壁で20cmを測る。面積は確認面で13㎡、床面で12㎡となる。床は2枚確認されており、古い時期(A)の床は、直接ハードルーム面を床面とする。新しい時期(B)の床は、A期床面より10～15cm上に床を持ち、ルームブロック混じりの褐色土を敷き詰めて床面とする。軟弱な床面であり、良好とは言えない。両時期とも周溝は確認できない。B期床面に焼土が認められ、火災に遭ったものと思われる。柱穴は確認できなかった。

カマドは北東方向で、北東壁中央部分に位置する。壁を利用してルームブロック混じりの黄褐色土で袖を構築する。カマドの全長は90cmで、住居外に幅20cm、長さ40cmの煙道が延びる。焚き口部分の幅は50cmを測る。右袖の外側には直径20cm、深さ16cmの柱穴が見られ、このカマドに付随するものと思われる。燃焼部内にはカマドの補強材として使われたものと思われる平瓦(11・12)が2枚残る。

遺物は、B期のカマド左側床面(+5cm・+21.5cm)から土師器杯(3・1)、カマド正面の床面(+9cm)から土師器の足高高台付杯(8)、覆土中から土師器杯(2・4)、土師器小型甕(7)、須恵器杯(5・6)が出土している。このほかに南側床面(+5cm)から刀子(9)、中央東側床面(+5cm)から用途不明の鉄製品(10)が出土している。

土器の特徴 土師器坏には、体部内面を斜格子状暗文で整形調整する杯(4)が含まれている。出土した遺物に明瞭な時期差があるが、体部外面を手持ちヘラケズリで整形する土師器杯(1～4)が当遺構に伴うものであろう。土師器の足高高台付杯(8)は他からの混入品と考える。

2号住居跡（第166・168図、写真図版29・108・172）

遺構は、遺跡南東隅の南斜面部に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分 L S—97、98、M S—07、08、17、18区に所在する。住居の主軸は北西を向き、主軸方位はN—23°—Wである。住居の南側の隅および壁を3号住居跡に壊されている。東側の1号住居跡と重なる部分は、1号住居跡の床を壊しているが、壁、床は痕跡程度しか認められない。住居の角はほぼ直角で、壁は住居の重複や削平を受け、部分的に痕跡程度の残存である。形状は、ほぼ方形で北東—南西軸4.2m、北西—南東軸4.1mを測る。壁高は北西壁で20cm、南西壁で22cm、北東壁で20cmを測る。1号住居跡の床面との比高は2cm程本住居跡の方が高い。面積は確認面で16㎡、床面で15㎡となる。床は、直接ハードルーム面を床とする。全体に固く締まりは良好である。住居の覆土はルームブロックを多量に含む暗褐色土を主体としており、人為的に埋められた可能性もある。周溝は確認できなかった。カマド左正面部分には柱穴と思われる直径22cm、深さ60cm程度のピットが残る。

カマドは北西方向で、北西壁の中央部分に位置する。壁を掘り込まずに壁をそのまま燃焼部奥壁として利用し、

煙道部を設けないカマド形態となっている。袖は粘土で構築する。カマドの全長は90cm、幅100cm、高さ30cmを測り、カマド天井部のアーチ部分が残る。焚き口部分の幅は50cmを測る。燃焼部内に壁の補強材として使用されたと思われる丸瓦(6・8)が残る。

遺物は床面および覆土中から土師器杯(1・2)、内面を黒色処理した土師器高台付椀(3)、土師器甕(4)、須恵器大型甕の胴部破片(5)が出土している。特に、西側壁際の床面(床直)から土師器杯(1)が床に伏せた状態で出土しており、この遺構に伴う遺物と考える。その他の遺物としては、西側壁際の床面(床直)から鉄製鎌(9)、南側壁際の床面(床直)から鉄製品(小破片のため実測不能)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類については体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形する杯が主体である。

3号住居跡 (第166・169～171図、写真図版29・108・145)

遺構は、遺跡南東隅の南斜面部に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分MS—17、18、27、28区に所在する。住居は2号住居跡の南側部分を壊して造られている。北側の壁部分は一部分壊されており、また住居南側および東側部分は後世の道路で削平を受け、ほとんど残っていない。全体的にかなり壊された状態であり1/3程度の残存である。従って、住居がどの方向を向いていたかは明確にできないが、少なくとも北側壁にはカマドの痕跡が見られない。また住居の立地が南側斜面部にいることや住居の入り口部分等を考え合わせるならば、西側壁にカマドがあった可能性が考えられる。このことから西向きとして見た場合、主軸方位はN—97°30′—Wと推定できる。住居の規模は、南北に長い横長形状と思われる、復元値で南北軸4.2m、東西軸3.8mを測る。壁高は北壁で40cm前後、西壁で30cm、東壁で23cm前後である。2号住居跡の床面との比高差は、17cm程高い。面積は、復元値で確認面15.9㎡、床面14.4㎡と考えられる。床はハードローム面を直接床面とするが、あまり固くない。住居の覆土は2号住居跡より黒く黒褐色を呈する。ロームブロックはあまり含まない。周溝、柱穴は認められない。

カマドについては、確認できなかった。西側壁にあったものと考えている。

遺物は、中央床面および北西隅の床面から土師器杯などが出土している。ただ多くは床面より高い位置での出土であることから、住居の廃絶後の投棄あるいは流れ込みの可能性もある。従って取り扱いには十分検討する必要がある。中央床面(+9.5cm・+10cm・+19cm・+20cm)から土師器杯(8・6・7・2)、北西隅の床面(床直)から土師器杯(1・10)、同床面(+23cm)から土師器杯(9)、西側床面(+4cm)から底部外面の外縁部分に「造寺」と墨書された土師器杯(5)、覆土中から土師器杯(3・4)、甕(12)、須恵器高台付杯(11)が出土している。瓦類については中央床面(+15cm)から凹面の中央付近に「田」とヘラ描きされた平瓦(17)、同床面(+14～19cm)から行基葺きの丸瓦(13)、平瓦(15・16)、北西隅の床面(+28cm)から行基葺きの丸瓦(14)が出土している。

土器の特徴 土師器杯についてはロクロ整形で、体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1・2)、体部外面下端、底部を手持ちヘラケズリで整形するもの(5・6)、底部を回転糸切りで切り離したまま、整形調整しないもの(7～10)等のタイプに分けられる。土師器杯(6)は体部内面を黒色処理している。出土状態から伴う遺物として考えられるものは、土師器杯(1・5・10)である。

4号住居跡 (第172・173図、写真図版30・108・172)

遺構は、南東隅の南斜面部に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分MS—05、06、15、16区に所在する。住居の東側には2号、3号住居跡が所在する。住居は北西を向き、主軸方位はN—7°30′—Wである。住居北東側は重機の掘削により削られたため、不明瞭な部分が多い。形状は正形状で東西軸2.42m、南北軸2.4mを測り、かなり規模の小さい住居である。住居の角は隅丸で、壁はほぼ直角に掘られている。北西側から南東に傾斜する斜面部に作られていることから、壁高は北壁で45cm、西壁で40cm、南壁で17cm、東壁で16cmを測る。面積は確認面

で5.71㎡、床面で5.36㎡となる。床は、ロームブロックと褐色土の混合土を5cm程薄く敷き詰め床面としているが、あまり固くなく良好といえない。周溝、柱穴は確認できなかった。

カマドは北方向で、北側壁の中央よりやや東部分に位置する。壁をわずかに掘りくぼめて燃焼部を作る。袖は長さ35cm程度で灰白色粘土を使用して「ハ」の字に開く。カマドの全長は45cm、幅130cmで、焚き口部分の幅は約60cmを測る。住居外に延びる煙道部分の掘り込みは認められなかった。

この住居内からは、重量に換算して約48kgもの大量の貝類が出土している。主体は、二枚貝のシオフキで全体の60%を占め、他にハマグリ、アサリ、イボキサゴ、ウミナナなどを含む。稀少なものとして、この地域では外洋(外房、九十九里浜地域)でしか産しない「ダンベイキサゴ」が含まれている。これらの貝類は、この住居が廃絶された後に投棄されたものと考えられる。

遺物については、カマドおよび西側壁際の床面(+9cm)から土師器甕(8)、同床面(+9cm)から土師器甕(7)、中央床面(+3cm)から土師器甕(9)、北西隅の貝層上層部中から土師器杯(1)、覆土中から土師器杯(2~5)、須恵器杯(6)などが出土している。瓦については、貝層内から平瓦(11・12)、丸瓦(10)が出土している。なお中央西側の床面(床直)から鉄鎌(13)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、非ロクロで外面を横方向にざっくり幅広く削る器高の低い平底の杯が主体を占めている。このうち、土師器杯(1)については貝層上層部の出土で、体部内面に上総地域特有の斜格子状暗文を有する。

5号住居跡 (第174~181図、写真図版30・108・109・146・147・175)

遺構は、4号住居跡の南西側に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分MS—14、15区に所在する。住居の南西部分は道路によって削られて壊されている。住居は北西を向き、主軸方位はN—9°30'—Wである。形状はやや東西に長い方形状で東西軸3.05m、南北軸2.9mを測る。住居のある位置が、北から南に下がる南斜面部に作られていることから、壁高は最も高い北側部分で64cm、東壁で25cm、最も低い南側は周溝が残る程度で2cm弱である。比較的規模の小さい住居で、面積は確認面で9.0㎡、床面で7.82㎡となる。床は、北壁でハードロームブロックを約50cm掘り下げ、その上にロームブロック、ソフトローム混合土を約5~10cm敷き詰め、貼床とする。床面は全体に固く良好である。住居の覆土は全体に褐色を呈し、ローム土地山との識別は困難であった。周溝は、カマドの位置する部分を除き、全周する。確実なものとしての柱穴は確認できなかった。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。カマド自体は住居の主軸から6°30'程東に傾いている。かなりしっかりとした作りのカマドで、壁を利用して粘土で袖を構築する。カマドの全長は170cm(うち煙道部分の長さ95cm)、幅120cm、高さ50cm、焚き口部分の幅は約50cmを測る。住居外に延びる煙道部分は幅40~50cmで地山から60cm程度掘りくぼめ、さらに先端部分を30cm程度深く掘り込み、煙突部分の掘形を作る。煙道の上部にはほぼ完形の平瓦(21・23・24)の凹面を上にして縦方向に乗せて天井蓋としている。煙道先端部分には、土師器と須恵器の二つの甕(9・13)の底を抜き、ひっくり返して煙突代わりとしている。

遺物については種別、器種、量とも豊富で、カマド周辺の床を中心にして出土している。カマド正面の床面(+4.5cm)から土師器杯(1)、同左脇の床面(+6cm)から土師器甕(11)、カマド煙道内から土師器杯(2)、甕(9)、黒茶褐色系の須恵器甕(13)、北西隅の床面(+5cm)から土師器甕(12)、覆土中から土師器杯(3~8)、小型甕(10)、茶褐色系の須恵器甕(14~16)が出土している。瓦については、すべてカマド内からの出土で、燃焼部内からは平瓦(22・26)、玉縁の丸瓦(20)、軒丸瓦の破片(18)、袖部分から行基葺きの丸瓦(17)、煙道の煙突部(直立した状態)から平瓦(25)、玉縁の丸瓦(19)などである。このほか、中央南東側の床面(床直)から鉄釘(27・28)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、ロクロ整形で体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形する杯が主体を占める。瓦については、カマド内からの平瓦の出土がほとんどであるが、床面から二十四葉単弁蓮華文軒丸瓦、完形の格子目タタキ平瓦などが出土している。

6号住居跡（第182～185図、写真図版31・109・147・148・149）

遺構は、5号住居跡の北西側に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分LS—93、94、MS—03、04区に所在する。南側斜面に面して作られている。住居南西部分の隅は道路によって削られ壊されている。住居はほぼ北を向き、主軸方位はN—15°20′—Wである。形状は正方形で東西軸3.22m、南北軸3.2mを測る。壁高は最も高い北側部分で55cm、西壁で27cm、南側で28cm、東壁で34cmを測る。比較的小規模な住居で、面積は確認面で11.2㎡、床面で8.4㎡となる。床はハードロームの地山面を20cm程度掘り込み、ハードロームブロックとソフトローム混合土を10cm程敷き詰め、貼床としている。床面は全体に固く良好である。周溝は、カマドの位置する部分を除き、全周する。柱穴は確認できなかった。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。しっかりとした作りのカマドで、袖は壁を利用して粘土で長さ70cm程度の「ハ」の字状に開く。カマドの全長は100cm（うち煙道部分の長さ30cm）、幅90cm、高さ40cm、焚き口部分の幅は約60cmを測る。住居外に延びる煙道部分は、壁を「八」形に幅35cm、長さ30cm程度えぐるように削り込んで煙道とし、燃焼部との間に軒平瓦の瓦当部(7)を下にした状態で遮蔽して煙突としている。また、カマドの両袖部分には丸瓦・平瓦(左袖部分5・9、右袖部分8・10)を2枚ずつ立て並べており、袖の芯材としている。

遺物については、少量の出土である。カマド内およびカマド正面の床面(+2cm)から土師器甕(2)、南東の床面(床直)から須恵器甕(4)、覆土中から土師器杯(1)、甕(3)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については平底で、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する。土師器甕(2)は器壁が薄く、胴部上半を横方向のヘラケズリで整形する武蔵型甕である。土師器甕(3)は、口縁端部をつまみ上げるタイプである。

7号住居跡（第186・187図、写真図版31・109・149）

遺構は、6号住居跡の北側隣接に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分LS—82、83、92区に所在する。台地平坦部から斜面に移る部分の南側に面して作られている。住居はほぼ北を向き、主軸方位はN—15°45′—Wである。形状はやや横長の方形状で、東西軸3.69m、南北軸3.2mを測る。壁高は、最も高い北側部分で37cm、西壁で27cm、南壁で25cm、東壁で22cmを測る。面積は、確認面で11.5㎡、床面で10.5㎡となる。床は、ローム系混合土を5～10cm程敷き詰め、貼床としている。床面は全体に固く良好である。特に住居北側、中央部、カマド寄りの部分が硬化している。覆土は暗褐色土を主体とし、ローム粒を混在する。周溝は、カマドの位置する部分を除き、全周する。柱穴は確認できなかった。

カマドは北方向で、北側壁の中央東寄り部分に位置する。しっかりとした作りのカマドで、壁を利用して白色粘土を用いて長さ55cm程度の「ハ」の字状に開く袖を構築する。全長は150cm（うち煙道部分の長さ80cm）、幅115cm、高さ35cm、焚き口部分の幅は約45cmを測る。住居外に延びる煙道部分は、壁を「八」形に掘りくぼめ、先端にいくほど浅く立ち上がるように煙道とする。

遺物については、カマドの両脇の床面から出土している。カマド左脇の床面(床直)から土師器台付甕(6)、北東隅の床面(+15cm)から底部に「興」の墨書の土師器杯(3)、南側の周溝内および北東隅の床面(床直)から土師器杯(2)、覆土中から土師器杯(1)、小型甕(5)、須恵器杯(4)などが出土している。瓦については、カマド右脇の床面(+6cm)から平瓦(9)、覆土中から平瓦転用の熨斗瓦(7)、玉縁の丸瓦(8)が出土している。なお、土師器台付甕(6)

は、現在行方不明である。

土器の特徴 土師器杯は、やや丸底風で体部外面、底部を細かい手持ちヘラケズリで整形する杯が主体的である。古い様相を示している。

8号住居跡(第188～191図、写真図版31・109・149)

遺構は、遺跡南東隅の南斜面部に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分 L S—61、62、71、72区に所在する。住居はほぼ北を向き、主軸方位はN—7°30′—Wである。形状は南北に長いやや縦長の方形状で、南北軸4.5m、東西軸4.08mを測る。北壁は直線的ではなく、カマド方向に向かって広がる。壁高は北壁で50cm、西壁で56cm、南壁で41cm、東壁で33cmを測る。面積は、確認面で17.22㎡、床面で15.2㎡、内区(主柱穴内側)で2.97㎡となる。床は、ハードロームを約20cm掘り込み、その上にロームブロック、ローム混じりの暗褐色混合土を10cm程度敷き詰め、貼床としている。床面は全体に固くよく締まっている。特に中央部のカマド付近が硬化している。周溝は、カマドの位置する部分を除き、全周する。柱穴は、ほぼ対角線上に4本検出され、柱穴の掘形から2時期の柱の立替えが認められる。柱穴の新旧関係は不明。柱穴の深さは、P1-1(外)が51cm、P1-2(内)が49cm、P2が52cm、P3-1(外)が42cm、P3-2(内)が38cm、P4-1(内)が50cm、P4-2(外)が45cmである。柱間は、P1・P2が1.7m、P1・P3が1.8m、P2・P4が1.8m、P3・P4が1.7mである。

カマドは、北側壁の中央部分に位置する。しっかりとした作りのカマドで、袖は白色粘土、山砂を用いて長さ55cm程度の「ハ」の字状に開く。全長は210cm(うち煙道部分の長さ140cm)、幅100cm、高さ35cm、焚き口部分の幅は約60cmを測る。住居外に延びる煙道部分は燃焼部から掘り込み、先端に向かって緩やかに立ち上がる。幅は上端で40cm、下端で15cmの「U」字状を呈し、平瓦3枚(23・24・25)を用いて煙道の天井蓋としている。煙道の上部および壁部分を砂で構築している。天井蓋として使用している平瓦の左側煙道の壁は熱を受け、激しく赤化している。竪穴住居内の煙道部分は天井に粘土を用いている。柱の立替えと同様にカマドについても作替えが認められ、カマド図の破線部分が古いカマドで、この部分を砂で埋めてやや右に寄った部分に新しいカマドを構築している。平瓦を天井の蓋に使用した煙道は新しいカマドの煙道である。

遺物については、カマド煙道部左側の住居外(+1cm)から須恵器の無台盤(8)、小型杯(4)、カマド内から土師器甕(10)、二十四葉単弁蓮華文の軒丸瓦の破片(18)、カマド煙道内から行基草きの丸瓦(19)、平瓦(21・22)、覆土中から土師器杯(1・2・3)、甕(9・11～15)、小型甕(16)、土師器蓋(6)、須恵器高台付杯(5)、須恵器蓋(7)などが出土している。そのほかの遺物として、覆土中から鉄釘(17)が出土している。なお、土師器杯(2)および鉄釘(17)については、現在行方不明である。

土器の特徴 土師器杯類については、体部外面をざっくりと幅広く削る手持ちヘラケズリが主体を占める。土師器杯(3)は体部内面に斜格子状暗文を施している。須恵器盤(8)は底部を回転ヘラケズリで整形する。底部中央部分は上げ底である。土師器蓋(6)については、ロクロ成形で、天井部を回転ヘラケズリで整形した後に、つまみ部分を中心にして直線的なヘラミガキで井桁状に丁寧に施している。内面についても同様なヘラミガキを施している。

9号住居跡(第192～194図、写真図版32・109・110)

遺構は、8号住居跡の北西側に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分 L R—60、70区に所在する。台地部分の南側に面して作られている。住居はほぼ北を向き、主軸方位はN—2°00′—Wである。形状は南北にやや長い縦長の方形状で南北軸4.45m、東西軸4.15mを測る。壁高は北壁で33cm、西壁で28cm、南壁で22cm、東壁で12cmを測る。面積は、確認面で17.61㎡、床面で16.9㎡、内区(主柱穴内側)で5.29㎡となる。床は、ハードロームを15

cm程掘り込み、その上にロームブロック、ソフトローム混合土を5～10cm程度敷き詰めて貼床としている。床面は、全体に固くよく締まっている。覆土は、全体に暗褐色土を主体とするが、完全に埋まる前にローム土を主体とする土を廃棄して埋め込まれているようすが見られる。周溝は、カマドの位置する部分を除き、全周する。柱穴はほぼ対角線上に4本検出され、円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が82cm、P2が86cm、P3が83cm、P4が83cmである。柱間は、P1・P2が2.3m、P1・P3が2.3m、P2・P4が2.3m、P3・P4が2.27mのほぼ均等の方形である。なお、住居の南側壁際の床面には、粘土塊が床面に密着した状態で検出されている。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。しっかりとした作りのカマドで、白色粘土を用いて長さ50cm程度の「ハ」の字状に開く袖を構築する。全長は170cm(うち煙道部分の長さ115cm)、幅115cm、高さ20cm、焚き口部分の幅は約50cmを測る。燃焼部奥壁の天井部分はやや壊れながらもブリッジ状に残っており、これを補強するための平瓦(17)が天井部を覆っていた。また天井部の裏面には補修と思われる茅材などの多量の繊維を含むスサ入り粘土が貼り付けられており、この部分は火を受け赤化している。住居外に延びる煙道部分は燃焼部奥壁より15cm程の段をつけて、先端に向かってほぼ水平に掘り込んで煙道とする。幅は上端で25～30cm、先端の煙突部分はやや幅広である。

遺物については、北東隅の床面から多く出土している。中央東側の床面(床直)から土師器杯(1)、中央西側の床面(床直)から土師器甕(8)、カマド内および北東隅の床面(床直)から土師器甕(9)、北東隅の床面(+1cm)から須恵器蓋(7)、カマド正面の床面(床直)から土師器甕(10)、北西側の床面(+2cm)から須恵器杯(6)、中央西側壁際の床面(床直)から土師器甕(11・12)、覆土中から土師器杯(2～5)、甕(13)などが出土している。瓦については、カマド正面の床面(床直)から丸瓦(14・15)、北東隅の床面(床直)から平瓦(16)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、平底で体部外面、底部をざっくり削る手持ちヘラケズリが主体的である。土師器杯(1～3)は体部内面に斜格子状暗文を施す。須恵器杯(6)は、器壁が薄く金属的な質感を持っており、古い様相が見られる。永田・不入窯産ではなく湖西窯産須恵器の可能性が考えられる。土師器甕(10)は武蔵型甕である。

10号住居跡 (第195～197図、写真図版32・110・150)

遺構は、遺跡南東隅の南斜面部で、8号、9号住居跡の北側のLS—41、42区に位置する。台地部分の南側に面して造られている。住居はほぼ北を向き、主軸方位はN—4°30′—Wである。形状は、東西にやや横長の方形で東西軸3.35m、南北軸2.87mを測る。壁高は、北壁で約20cm、西壁で約35cm、南壁で33cm、東壁で20cmを測る。面積は確認面で9.6㎡、床面で8.4㎡となる。床は、ハードロームを約5cm掘り込み、ロームブロックとソフトローム混合土を5cm程度敷き詰めて貼床としている。床面は、固くよく締まっているが、壁周辺は柔かい。中央部分の床面にはカマド使用からの粘土が密着している。周溝は、カマドの位置する部分を除き、全周する。柱穴は確認できなかった。

カマドは北方向で、北側壁の西隅部分に位置する。白色粘土を用いて長さ50cm程度の袖を壁とほぼ直角に作りつけて構築する。全長は、145cm(うち煙道部分の長さ95cm)、幅85cm、高さ30cm、焚き口部分の幅は約30cmを測る。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部奥壁より20cm程度の段をつけて先端に向かってほぼ水平に掘り込んで煙道とする。幅は、上端で25cm、深さ15cm程度はやや「U」字状を呈している。また煙道の中ほどには長軸20cm、短軸12cm、深さ10cm程度の楕円形状の掘り込みが見られ、その部分に2枚の平瓦(7ほか)の凸面部分を「ハ」の字状に向かい合わせにし、煙突として使用している。両袖の燃焼部分、焚き口部分には縦に割った平瓦(8・9)を立て並べ、その上に半裁された平瓦(9)を置き天井としている。左手前の大きい平瓦(10)は立てるため脚部に粘土を詰めている。これらの瓦は、カマド構築当初に使用されたものではなく、カマド使用途中で、袖の壁が壊れ、その補強と

して用いられたものと考えられる。なお、(8)の平瓦は隅切り瓦である。

遺物については、カマド正面の床面(+3cm)から土師器甕(3)、覆土中から土師器杯(1)、土師器甕(4・5)、須恵器杯(2)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯(1)については、器高の低い平底で、体部外面を幅の広い手持ちヘラケズリで整形する。土師器甕(3)は武蔵型甕である。須恵器杯(2)については、底部を回転ヘラ切り後、外周を回転ヘラケズリ、体部外面下端を回転ヘラケズリで整形している。常陸系の須恵器と思われる。

11号住居跡 (第198～200図、写真図版32・33・110・177)

遺構は、遺跡南東隅のLS—43、44、53、54区に位置する。東側隣接の12号住居跡と重複関係である。12号住居跡の西壁および北西隅の角を壊して床面を作っている。住居は南西を向き、主軸方位はN—105°45′—Wである。形状は、東西に長いやや縦長の方形状で、東西軸4.1m、南北軸4.0mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁高は、北壁で43cm、西壁で約62cm、南壁で約53cm、東壁で約25cmを測り、しっかりとした壁を持つ。12号住居跡の床面からは8cm程高い。面積は、確認面で16.07㎡、床面で14.7㎡となる。床は、ハードロームを20cm程掘り込み、その上にロームブロック、褐色土混合土を10cm程度敷き詰めて貼床としている。床面はやや凸凹が認められるが、固くよく締まっている。覆土は全体に暗褐色土を主体とするが、ロームブロック、ローム粒を多量に含んでいる。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。貼床分の高さが周溝の深さとなっている。柱穴は、確認できなかった。住居の北東隅には長軸100cm、短軸74cm、深さ23cmの底がやや凸凹した楕円形の土坑が見られる。

カマドは西方向で、西側壁のやや南寄りに位置する。住居の主軸方位に対して10°30′南へ傾いている。壁を「ヘ」状に掘り込み、燃烧部を構築する。袖は白色粘土を用いて「ハ」の字状に構築する。燃烧部奥壁の煙道につながる部分にはブリッジ状に天井が残る。カマドの全長は165cm(うち煙道部分の長さ105cm)、幅105cm、高さ45cm、焚き口部分の幅は約50cmを測る。住居外に延びる煙道部分は燃烧部奥壁より30cm程度の高さの段をつけ、そこからさらに25cm掘り込み、急激に立ち上がる。幅は上端で80cm、下端で25cm、深さ70cm程度の深い「U」字状を呈している。両袖の外側の脇には、ほぼ円形状のピットが1個ずつ見られる。左脇のピットは径18cm、深さ30cm程度、右脇のものは径25cm、深さ25cmを測る。カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。カマドは全体的に燃烧部内の壁が著しく赤化していることなどから長期間使用されていたものと思われる。

遺物については、覆土中から多数出土している。カマド右脇の床面(床直)から土師器杯(3)、甕(12)、須恵器甕の底部片(19)、カマド内から土師器甕(14・17)、覆土中から土師器杯(1・2・4)、甕(11・13・15)、小型甕(16)、甕の把手(18)、須恵器高台付椀(6・8)、高台付皿(9)、黒褐色系の須恵器杯(5)、須恵器高盤の脚部(7)などが出土している。瓦については、カマド右正面の床面(+3cm)から平瓦(22)、行基葺きの丸瓦(21)が出土している。そのほか覆土中から軽石製の砥石(20)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、ロクロ整形の土師器が主体を占めている。このうち杯(4)は、体部内・外面にヘラミガキを施した後、内面を黒色処理する。杯(2)は、体部外面下端を手持ちヘラケズリで整形している。須恵器杯(5)は黒褐色系で、底部を回転ヘラ切りで切り離した後、外周を回転ヘラケズリ、体部外面下端を回転ヘラケズリで整形するものである。須恵器高台付椀(6)は、器高が深く直立気味である。須恵器高台付皿(9)については、胎土に雲母粒を含んでいる。

12号住居跡 (第198・201図、写真図版32・33・110・172・173)

遺構は、遺跡南東隅のLS—45、44、55区に位置する。西側隣接の11号住居跡により西壁および北西隅の角を壊されている。また住居の東部分は、宅地造成に伴いぎりぎりまで削り取られており、南東隅の角部分は壊され

ている。新旧から12号住居跡が古い。住居は北西を向き、主軸方位はN—12°—Wである。形状は、方形状で南北軸3.65m、東西軸3.5mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁高は北壁で36.5cm、西壁で約30cm、南壁で約25cm、東壁で30cmを測り、しっかりと壁を持つ。面積は、確認面で12.7㎡、床面で11.73㎡となる。床は、ハードローンを15～20cm程度掘り込み、その上にロームブロック、褐色土混合土を10cm程度敷き詰めて貼床としている。全体的に固くよく締まっている。覆土は、全体に暗褐色土を主体とするが、ロームブロック、ローム粒を多量に含んでいる。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。貼床分の高さが周溝の深さとなっている。柱穴は確認できなかった。

カマドは北方向で、北側壁の中央よりやや西に位置する。壁を「 $\cap$ 」状に掘り込み、燃烧部を構築する。袖は、白色粘土を用いて50cm程度の長さの「ハ」の字状に構築する。カマドの全長は、160cm(うち煙道部分の長さ90cm)、幅105cm、高さ25cm、燃烧部分は幅約50cm、奥行き65cmを測り、煙道に向かってなだらかに立ち上がる。住居外に延びる煙道部分は燃烧部より25cm程度高く、そこから先端に向かって緩やかに下がる。幅は上端で35cm、下端で22cm、最も深い先端の煙突部分で25cmを測る「U」字状を呈している。カマドは、全体的に燃烧部内の壁が著しく赤化していることなどから長期間使用されていたものと思われる。

遺物については、カマド焚口内から土師器杯(1)、甕(5)、覆土中から土師器甕(4)、須恵器高台付杯(3)、須恵器蓋(2)、甕(6)、鉄製鎌(7)、刀子(8)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯については、器高の深い平底で体部外面を削り幅の広い手持ちヘラケズリで整形する。須恵器高台付杯(3)は、永田窯の製品である。須恵器甕(6)は底部片で、胴部との接合状況がよく分かる。

13号住居跡 (第202図、写真図版32・33・110・174)

遺構は、遺跡南東隅の11号、12号住居跡の南東側、LS—65、75区に位置する。東側隣接の14号住居跡により北壁、北東角、東側壁のほとんどを壊されている。全体の2/5程度の残存である。カマドが壊されているため、住居の主軸について不明であるが、北カマドとした場合、主軸方位はN—8°—Wとなる。形状は方形状と仮定して、南北軸3.2m、東西軸は推定3.2m(現状1.7m)を測る。住居の角は直角で、壁高は北壁で40cm、西壁で39cm、南壁で約15cmを測り、垂直のしっかりと壁を持つ。面積は、正形状と仮定して確認面で9.92㎡、床面で9.0㎡となる。床は、ハードローンを15cm程度掘り込み、その上にロームブロック、褐色土混合土を5～10cm程度敷き詰めて貼床としている。縁の部分のためか全体に軟弱である。残存部分において周溝がめぐる。柱穴は確認できなかった。

カマドは14号住居跡により壊されているが、北カマドの可能性が高い。

遺物については、点数が少なく、北西床面(床直)から須恵器杯(3)、西側壁周溝内から鉄鏃(4)、覆土中から土師器杯(1・2)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、器高が低い丸底風の杯(2)、盤状風の平底杯(1)など非ロクロの土師器が出土している。須恵器杯(3)については永田窯の製品と思われ、体部内面に重ね焼きの火むらが確認できる。

14号住居跡 (第202図、写真図版32・33・110)

遺構は、遺跡の南東隅のLS—55、65区に位置する。西側隣接の13号住居跡の北壁、北東の角、東壁を壊して住居を作っている。また住居の東側部分は、宅地造成の際の掘削で北東角、南東角、東側壁、南側壁のほとんどを削られており、全体の1/3の残存である。カマドが壊されているため、住居の主軸について不明であるが、北カマドとした場合、主軸方位はN—11°30′—Wとなる。形状は方形状と仮定して、南北軸4.1m、東西軸4.1m(現状1.4m)を測る。住居の角はほぼ直角で、壁高は西壁で11cm、北壁で27cm、南壁で約20cmを測り、垂直のしっかりと

とした壁を持つ。面積は正形状と仮定して、確認面で16㎡、床面で14.06㎡となる。主軸方位はN—11°30′—W。床は、ハードローンを20cm程度掘り込み、その上にロームブロック、褐色土混合土を10cm程度敷き詰めて貼床としている。中央部分が比較的硬化しているが、縁のためか全体に軟弱である。覆土は全体的に暗褐色土を基調とし、ロームブロック、ローム粒が若干混入する。土層図の観察では13号住居跡とあまり変わらず、区別は難しい。残存部分において周溝がめぐる。柱穴は確認できなかった。

カマドは、削平された部分に存在したと思われるが、現状では確認できなかった。

遺物については、点数が少なく、覆土中から土師器杯(1)、甕(4~7)、須恵器杯(2)、蓋(3)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、非ロクロで体部外面を削り幅の広い手持ちヘラケズリで整形する。土師器甕(4・5)は、焼成が良く重量のあるしっかりとした作りである。

15号住居跡（第203・204図、写真図版33・110・111・173・177）

遺構は、遺跡南東隅で、12号住居跡の北側のLS—24、25、34、35区に位置する。住居はほぼ北を向き、主軸方位はN—6°—Wである。形状は、東西方向にやや横長の方形状で東西軸3.85m、南北軸3.3mを測る。住居の角はやや隅丸で、壁高は北壁で約30cm、西壁で34cm、南壁で25cm、東壁で4cmを測る。面積は、確認面で12.35㎡、床面で11㎡となる。床は、ハードローン上面を直接床面とする。床面は、中央部が固いのみで周囲は軟弱である。覆土は全体に暗褐色土を主体とし、ローム粒を多量に含む。周溝は見られない。床面の中央部分から東側にかけて、ピットが6基確認できるが、本住居跡に伴うものではない。カマド東脇のやや四角形状の土坑(P1)については、貯蔵穴と考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。しっかりとした作りのカマドで、壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とし、煙道部を設けないカマド形態となっている。白色粘土を用いて長さ70cm程度の平行に開く袖を構築する。カマドの全長は70cm、幅120cm、高さ15cm、燃焼部の最大幅は約30cmを測る。燃焼部奥壁は段状に緩やかに立ち上がる。

遺物については、カマド右側床面(床直・+8cm)から須恵器長頸壺(7)、刀子(9)、南西隅の床面(+19cm)から土師器甕(4)、カマド左脇の床面(+8cm)から凝灰岩製の砥石(8)、北西隅床面(+17cm)から玉縁の丸瓦(12)、覆土中から土師器杯(1、2、3)、甕(5、6)、玉縁の丸瓦(10、11)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯については、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する非ロクロ杯が主体的と思われる。丸底風の杯(3)は底部内面を丁寧なヘラミガキで整形し、中央部分に記号のような「×」の線刻を施している。なお、須恵器長頸壺(7)については、湖西窯系のものである。

16号住居跡（第205~207図、写真図版33・34・111・173）

遺構は、遺跡の南東隅で15号住居跡の北西側のLS—13、14、23、24区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—3°40′—Wである。形状は南北にやや縦長の方形状で南北軸3.8m、東西軸3.4mを測る。住居の角は北東隅が突出し、やや鋭角気味のほかはほぼ直角で、壁高は北壁で約49cm、西壁で41.5cm、南壁で42cm、東壁で28cmを測る。面積は確認面で11.8㎡、床面で10.88㎡となる。床は、ハードローンを約20cm掘り込み、その上にロームブロックを主体とした混合土を5~10cm程度敷き詰め、貼床とする。床面は全体に固く、特に中央部が固く締まっている。床全体にカマドに使用した粘土が薄く敷かれていた。覆土は全体に暗褐色土を主体とする。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。また、南側部分には東西方向に溝が見られるが、これは住居の拡張を行った際の拡張前の周溝と考えられる。規則性のある主柱穴は認められない。南側壁際の中央床面に径30cm、深さ10cm程度のピット(P1)が見られるが、出入口施設に関連した柱穴と考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分よりやや東に位置する。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は黄灰色砂を用いて90cm程度の長さで「ハ」の字状に開く。カマドの全長は200cm(うち煙道部分の長さ110cm)、幅100cm、高さ20cmを測る。燃焼部分は幅約50cm、奥行き80cmで、煙道に向かってなだらかに立ち上がる。住居外に延びる煙道部分は住居の主軸に対して若干東にふれている。煙道部には底部を打ち欠いた6個体の土師器甕(先端部分から順に11、12、8、10、9、13)を煙道部分に埋設し、煙突状にしている。土師器甕の埋設は燃焼部側に口縁部を向けソケット状に連結し、外側に砂を詰めて固定する方法をとっている。煙道の形状は、燃焼部より30cm程度高い位置で、そこから緩やかに下り、先端をピット状に深く掘り込む。幅は上端で35cm、下端で20cm、最も深い先端の煙突部分で40cmを測る。カマドの構築には、基本的に黄灰色砂を使用している。

煙道の状況から、カマドの使用は2時期に分けられる。第1期は煙道を深く掘って使用した段階で、この時期の堆積は煙道内の「焼土混じり黒褐色土」に示される。第2期は、使用し続けたことにより煙道内が埋まったことから、底を抜いた6個体の土師器甕をソケット状に連結して新たに煙道部としている。両時期を通じて規模は変わらない。

遺物については、カマド周辺から多く出土しており、良好な資料である。カマド燃焼部の奥壁部分から黒褐色系の須恵器杯(3)、カマド左脇の燃焼部内から格子目タタキの平瓦(20)、カマド内から土師器甕(17)、丸瓦(19)、カマド右脇隅の床面(+9cm)から黒褐色系の須恵器杯(2)、カマド正面の床面(+5cm)から土師器甕(14、15)、北東隅の床面(+6~9cm)から土師器杯(1)、須恵器杯(2)、土師器台付甕(18)、北西隅の床面(+16cm)から鉄製紡錘車(21)、覆土中から須恵器杯(4・5)、土師器甕(6~8・16)などが出土している。なお、土師器甕(9・12)、および(18)の土師器台付甕は現在、遺物が行方不明である。

土器の特徴 杯類については、体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形するロクロ土師器杯が散見される。須恵器杯(2)、(3)は黒褐色系で、千葉地域産のものである。(3)は体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形し、底部外面の中央よりやや外周部分に記号のような「×」の線刻が施されている。土師器甕(9)は、胴部外面の縦位ヘラケズリを下から上に施している。

17号住居跡 (第208図、写真図版34・177)

遺構は、遺跡の南東隅に位置し、16号住居跡の北東側K S-94、95、L S-04、05区に所在する。住居は真北を向き、主軸方位はN-1°00'-Wである。形状は、北壁がやや長い逆台形状で南北軸3.2m、東西軸3.17mを測る。住居の角は、北東角がやや突出しているほかはほぼ直角で、壁はきれいに垂直に掘り込まれている。壁高は北壁で約58cm、西壁で68cm、南壁で55cm、東壁で42cmを測る。面積は、確認面で9.15㎡、床面で8.41㎡となる。床は、ハードローンを約15cm削り、その上にロームブロックと褐色土の混合土を5cm程度敷き詰め、貼床とする。床面は、中央部が固くなっているのみで全体的に軟弱である。周溝はカマドの位置を除いて全周する。周溝の深さは、貼床分の高さである。覆土は、全体に暗褐色土を基調とし、ローム粒を多量に混入する。支柱穴は見られないが、南東隅の住居外部分に直径40cm、深さ30cm程度のピットが見られる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分よりやや西に位置する。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は壁を利用して70cm程度の長さで粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は220cm(うち煙道部分の長さ150cm)、幅95cm、高さ30cmを測る。燃焼部分は、最大幅約55cm、奥行き60cmで、垂直な奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約45cm高い位置で、そこから水平に延び、先端部分で長軸35cm、短軸30cm、深さ30cmのやや楕円形ピット状に深く掘り込む。煙道の幅は上端で25cm、下端で10cm、深さ10cmで「U」字状を呈する。

遺物については、土器が細片のため実測し得なかったが、カマド左袖の外側から土師器甕が出土している。またカマド燃焼部内から支脚として使用されたと思われる平瓦(2)、カマド左脇の周溝内からは、凝灰岩製の砥石(1)などが出土しているのみである。

18号住居跡（第209図、写真図版34・111・178）

遺構は、遺跡の南東側部分に位置し、17号住居跡の北東側K S－65、66、75、06区に所在する。宅地造成の際の掘削で、住居の東側2/3以上を壊されている。住居は真西方向で、主軸方位はN－91°00′－Wである。形状は方形と思われる、西壁にカマドを持つ。大きさは、規模の分かる南北軸で4.25m、東西軸では現状1.2mが残る。住居の角は垂直で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で43cm、西壁で52cm、南壁で28cmを測る。面積は、方形と仮定して確認面で18㎡、床面で16㎡となる。床は、ハードロームを約30cm削り、その上にロームブロックと暗褐色土の混合土を10～15cm程度敷き詰め、貼床とする。床面は、カマド正面部分が固いほかは全体的に軟弱である。周溝は、カマドの下まで掘られている。

カマドは、西方向で周溝を掘った後、壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部と煙道を構築している。現状では、煙道部天井の灰褐色砂質粘土が残るのみで、袖、燃焼部などはほとんど原型をとどめていない。残存部分の規模は、全長55cm（うち煙道部分の長さ25cm）、幅80cm、高さ20cmを測る。燃焼部分は最大幅約40cm、奥行き30cmで、急な角度の奥壁を作り、煙道を兼ねている。柱穴は、主軸方向に対して西側部分の2本が残る。やや浅く掘り込まれており、P1は直径40cm、深さ50cm、P2は直径35cm、深さ47cm、柱間はP1・P2が2.3mを測る。

遺物については、わずかでカマド正面の床面(床直)から土師器甕(2)、覆土中から土師器杯(1)、甕(3)、カマド内から土製支脚(4)が出土している。他に図示し得なかったが、覆土中より灰釉陶器片が出土している。

19号住居跡（第210図、写真図版35・111）

遺構は、遺跡の南東部分K R－60、70区に位置する。住居は北東を向き、主軸方位はN－10°00′－Eである。形状は、東西方向にやや横長な方形で東西軸3.05m、南北軸2.85mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は北壁で43cm、西壁で46cm、南壁で37cm、東壁で34cmを測る。比較的規模の小さい住居で、面積は確認面で8.4㎡、床面で7.7㎡となる。床は、ハードロームを5～10cm削り、その上にロームブロックと褐色土の混合土を5～10cm程度敷き詰め、貼床とする。床面は、中央部が固くなっているのみで全体的に軟弱である。

周溝は、カマドの位置を除いて全周する。主柱穴は認められないが、中央南側の床面に直径15cm、深さ10cm程度のピット(P1)があり、出入口施設の柱穴と思われる。住居南西隅部分には90cm程度の「L」字状の溝と小ピットで区画した部分が認められるが、住居内の小区画であろう。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を利用して60cm程度の長さで黄灰色砂質粘土を用いて「ハ」の字状に開く。燃焼部の天井部分は、ブリッジ状に残存する。カマドの全長は、115cm（うち煙道部分の長さ60cm）、幅100cm、高さ40cmを測る。燃焼部分は、最大幅約45cm、奥行き60cmで、垂直な奥壁を持つ。右袖手前の下端付近は、削り残したローム面が一段高く残る。袖の内側の燃焼部壁は、両側ともよく焼けている。特に左袖の上部内側は顕著である。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから水平に延びる。煙道の幅は上端で25cm、下端で15cm、深さ10cmで箱形を呈する。煙道内は、粘土(砂質粘土)敷きの部分が見られる。

遺物については、カマド右脇の床面(+3cm)から土師器小型鉢(4)、中央床面(+3cm)から須恵器杯(3)、中央南側の床面(床直)から土師器杯(2)、東側壁の周溝内から須恵器甕の胴部破片(5)、覆土中から土師器杯(1)、玉縁の

丸瓦破片(6)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯(2)については、器高の低い厚手の作りで、底部外面を回転ヘラケズリで整形する。土師器小型鉢(4)は、やや異種な器形である。

25号住居跡 (第211・212図、写真図版35・111・112・151)

遺構は、南東側の台地部分に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分KQ-99、LQ-09区に所在する。住居は北東を向き、主軸方位はN-17°00'-Eである。形状は南北にやや長い方形状で、南北軸3.18m、東西軸3.14mを測る。住居の角は隅丸で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は北壁で31cm、西壁で35cm、南壁で35cm、東壁で25cmを測る。面積は、確認面で9.80㎡、床面で8.90㎡となる。床はハードルーム上面を直接床面とし、床のくぼんだ部分に土を入れ平坦にしている。床は中央部分が固いのみで、周辺はあまり固くない。カマド付近の床面には粘土が密着している。周溝は床面より深く掘り込まれ、カマドの部分を除いて全周する。柱穴は、規則性のあるものは認められないが、中央南側床面に長軸40cm、短軸30cm、深さ30cm程度の楕円形状ピット(P1)が見られる。出入口施設のハシゴ据え付けの柱穴であろう。なお、西側壁に沿うように掘り込まれている土坑は26号陥穴である。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を利用して50cm程度の長さで粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、170cm(うち煙道部分の長さ110cm)、幅115cm、高さ30cmを測る。燃焼部分は最大幅約50cm、奥行き60cmで、急傾斜な奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かい緩やかに下がる。先端部分で最も深くなる。煙道の幅は上端で30cm、下端で20cm、深さは先端で35cmを測る。

遺物については、カマド燃焼部内から行基葺きの丸瓦(7)、カマド正面の床面(+18cm)から土師器台付甕(4)、覆土中から土師器杯(1)、黒茶褐色系の須恵器杯(2)、土師器台付甕の口縁部(3)、脚部(5)、須恵器長頸壺の胴部上半部片(6)が出土している。なお、カマド燃焼部より2個体の土師器甕および支脚として使われた平瓦が出土しているが、遺物が行方不明のため遺物実測図を図示し得なかった(第211図、写真図版35)。

土器の特徴 土師器杯については、ロクロ整形で体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形する。須恵器杯(2)は体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形しており、千葉地域産である。

28号住居跡 (第213図、写真図版35)

遺構は、南東側の台地部分に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分KQ-81区に所在する。住居は北西を向き、主軸方位はN-69°00'-Wである。形状は、南北に長い方形状で南北軸2.5m、東西軸2.3mを測る。住居としてはかなり規模の小さいものである。住居の角はほぼ直角で、壁は比較的浅く、壁高は西壁で17cm、南壁で22cm、東壁で15cm、北壁で5cmを測る。面積は、確認面で4.95㎡、床面で4.41㎡となる。床はソフトルーム面に若干カマド使用の粘土粒を敷き詰めて床面としている。床は、中央部分が固いのみで、周辺はあまり固くない。周溝はカマド左側から北西、南西、南東にかけてめぐる。柱穴は認められない。

カマドは西方向で、西壁のほぼ中央部分に位置する。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は壁を利用して25cm程度の長さで粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は70cm(うち煙道と考えられる部分の長さ15cm)、幅80cm、高さ15cmを測るが、袖などの残りはやや悪い。燃焼部分は最大幅約40cm、奥行き65cmでなかなか立ち上がる。燃焼部と煙道との区別が不明瞭である。

遺物については少量で、時期を決定できるものは少ない。すべて覆土中からの出土で、土師器甕(2)、須恵器杯(1)、千葉地域周辺産の黒褐色系の須恵器甕(3)などが出土している。

29号住居跡（第214図、写真図版35）

遺構は、南東側の台地部分に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分のK P—70、80、K Q—61、71区に所在する。住居は北西を向き、主軸方位はN—44°05′—Wである。形状は、北西—南東方向に長い縦長方形形状で、北西隅の角が突出している。規模の小さい住居で、北西—南東軸2.95m、北東—南西軸2.65mを測る。住居の北東側部分は大きく削平を受けており、痕跡程度の残存となっている。壁は比較的浅く、壁高は北西壁で6cm、南西壁で17cm、南東壁で19cm、北東壁で4cmを測る。面積は、確認面で7.81m²、床面で6.94m²となる。床はソフトローム面を直接床面としている。硬化した部分は中央の床面のみで、左右は直接ソフトローム面が見られるだけで何ら固くない。周溝はカマドの位置する北西壁を除いて、南西、南東、北東壁部分に見られる。柱穴は、認められない。北東部分の床面には、焼土ブロックが認められる。

カマドは北西方向で、北西壁のほぼ中央部分に位置する。住居の掘り込みが浅く、また木の根の攪乱などで袖、燃焼部などは残っていない。粘土、焼土を取り去った部分に、直径50cm程度の浅いくぼみが見られることから、このあたりをカマドの燃焼部として捉えて図を作成した。

遺物については少量で、カマドの残存部分から土師器杯(1~3)、椀(4)、覆土中から土師器皿(5)、甕の底部片(6)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯類は、ロクロ整形で底部を回転糸切りで切り離したままのものが、主体的である。土師器杯(3)は体部内面をヘラミガキせずに黒色処理している。土師器椀(4)は体部内面を丁寧なヘラミガキで整形した後に、黒色処理している。

30号住居跡（第215～218図、写真図版36・112・178）

遺構は、南東側の台地部分に位置し、国分尼寺跡北東辺外郭溝の隣接部分のK Q—63、64、73、74区に所在する。住居は北向きで、主軸方位はN—7°00′—Eである。形状は、方形形状で南北軸3.42m、東西軸3.4mを測る。住居の角は、ほぼ直角で壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で27cm、西壁42cm、南壁46cm、東壁42cmを測る。面積は、確認面で10.73m²、床面で10.1m²となる。床は、ハードロームを15cm程度掘り込み、その上にロームブロックと暗褐色土の混合土を5～10cm程度敷き詰め床面としている。床面は、割合に凸凹しているが、全体に固く締まっている。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。柱穴については、規則性のあるものは認められない。中央南側床面に直径30cm、深さ22cm程度の円形状ピット(P1)が見られるが、出入口施設に関連した柱穴であろう。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分よりやや東に位置する。壁を「冫」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を利用して60cm程度の長さで、粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、170cm(うち煙道部分の長さ120cm)、幅100cm、高さ30cmを測る。燃焼部分は、最大幅約45cm、奥行き50cmで垂直な奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かって急激に下り、先端部分で最も深くなる。先端部分の奥壁は、垂直に立ち上がる。煙道の幅は、上端で30cm、下端で20cm、深さは先端で50cmを測る。

遺物については、カマド周辺の床面を中心として多く出土している。土師器杯類が多く出土しており、良好な資料である。カマド内から土師器甕(16・17・18)、カマド左脇の床面(+7cm)から土師器杯(7)、同床面(+5cm)から須恵器杯(14)、カマド右脇の床面(床直)から土師器杯(1・6)、甕(19)、南東の床面(床直)からほぼ完形の土師器杯(4)、須恵器杯(11)、南側中央の床面(床直)から須恵器杯(12)、南側壁際の床面(+6cm)から土師器台付甕(25)、西側壁際の床面(+6cm)から土師器台付甕(24)、覆土中から土師器杯(2・3・5・8・9)、椀(10)、甕(20)、須恵器杯(13・15)、黒茶褐色系の須恵器甕の胴部片(21～23)など多量に出土している。このほかカマド内からは、支脚として使

用されたとと思われる行基葺き丸瓦(27)、南西壁際の床面(+5cm)から平瓦(31)、カマド左側の周溝内から平瓦(29)、覆土中より玉縁の丸瓦(28)、平瓦(30)、石製紡錘車(26)、刀子などが出土している。

土器の特徴 ロクロ整形の土師器杯(7・8・9)が見られるが、非ロクロの土師器杯が主体を占めている。丸底風で体部内・外面にヘラミガキを施す杯(1)、器高が深く平底の杯(2～6)などが比較的多い。また斜格子状風の暗文を施した土師器杯(9)が見られる。須恵器杯(11)の底部外面には、「法花」の法の字と思われる墨書が認められる。土師器碗(10)は、体部内面を丁寧なヘラミガキで施した後、黒色処理する。須恵器杯(12)は、口縁部の内・外面にスス、油煙が付着することから灯明用の杯であろう。

31号住居跡 (第219・220図、写真図版36・112・113)

遺構は、南東側台地の中央部分KQ-45区に位置する。住居の北側には、縄文時代の303号陥穴が重複している。住居は真西を向き、主軸方位はN-86°30'-Wである。形状は、東西に長い横長の方形状で、西側壁が東部分よりやや長い。規模は、南北軸2.47m、東西軸2.17mを測る。住居の角は隅円で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で24cm、西壁で31cm、南壁で33cmを測る。非常に規模の小さい住居で、面積は確認面で4.73㎡、床面で4.5㎡となる。床は、ハードローム面を直接床面とする。床は固くなく全体に軟弱である。周溝、柱穴は検出されなかった。カマド周辺の床面には、焼土および住居の部材と考えられる炭化した木材が散乱している状態であり、火災に遭った様相を示している。

カマドは西向きで、西壁の中央よりやや南に位置する。壁を尖り気味の「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を利用して50cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は80cm、幅100cm、高さ30cmを測る。燃焼部分は、最大幅約40cm、奥行き80cmで急激に立ち上がる。燃焼部と煙道との区別が不明瞭で、燃焼部奥壁は住居の外側に延びている。

遺物については、カマド周辺の床面から多く出土している。カマド左脇付近の床面(床直)から土師器杯(1)、カマド右脇の床面(+3cm)から須恵器杯(2)、同左正面の床面(+22cm)から底部外面の外周付近に「法花」と墨書された須恵器杯(3)、カマド正面の床面(+5cm)および同右正面床面(+5cm)から須恵器長頸壺(12)、カマド燃焼部内より土師器甕(4・8)、支脚として使用されたとと思われる丸瓦(13)、覆土中より土師器甕(5～7・9～11)が出土している。このほかに現在行方不明であるが、須恵器杯が出土している。

土器の特徴 土師器杯(1)については、体部外面を幅広くざっくり削る手持ちヘラケズリで整形する。墨書のある須恵器杯(3)は永田・不入窯産の製品である。須恵器長頸壺(12)は、猿投窯産と考える。

33号住居跡 (第221図、写真図版36・113)

遺構は、南東側台地の中央部分より、やや北東側のKR-25、26区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN-16°00'-Eである。かなり規模の小さい住居で、形状は東西方向にやや横長の方形状で東西軸2.6m、南北軸2.22mを測る。住居の角は隅丸で壁は浅い。深さは北壁で10.5cm、西壁14cm、南壁13.5cm、東壁6cmを測る。面積は、確認面で5.5㎡、床面で4.98㎡となる。床は、ソフトローム上面を直接床面とする。床は、カマド付近が固く締まっているだけで、全体に軟弱である。部分的にロームブロックを敷いている個所も認められる。周溝、柱穴は検出されなかった。カマド周辺の床面には焼土および住居の部材と考えられる炭化した木材が散乱している状態であり、火災に遭った様相を示している。

カマドは北向きで、北壁の中央よりやや東に位置する。壁を利用して燃焼部の奥壁とする。袖は、壁を利用して60cm程度の長さで白色粘土を用いてやや開かない「ハ」の字状に構築する。カマドの全長は65cm、幅85cm、高さ15cmを測る。燃焼部分は、最大幅約45cm、奥行き55cmで垂直な奥壁を持つ。煙道部分はなく、直接燃焼部の奥

壁となっている。

遺物については少なく、カマド右側壁際の床面(床直)から非ロクロの土師器杯(1)、甕(3)、南側隅の床面(+3cm)から須恵器大型甕の胴部破片(2)が出土している。このほか北東壁際の床面(+6.5cm)から平瓦(4)が出土している。遺物が少ないため、時期については不明瞭な点が多い。

34号住居跡 (第222～228図、写真図版37・113・151)

遺構は、南東側の尾根状台地KR—47、48、57、58区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—3°25′—Wである。形状は、ほぼ正方形で東西軸4.1m、南北軸4.0mを測る。住居の角は直角で、壁はしっかりと垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で60cm、西壁で40cm、南壁で41cm、東壁で29cmを測る。面積は、確認面で16.4㎡、床面で14.63㎡、内区(主柱穴内側)で3.4㎡となる。床は、ハードローンを5～10cm程度掘り込み、その上に黒色土、ローン混じりの暗褐色土混合土を敷き詰め、貼床としている。床面は、中央部が固くなっているのみで全体に柔らかい。カマド付近の床面には、カマド使用の粘土が認められ、床面に敷かれていたものと思われる。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。周溝の深さは、貼床の厚さ分である。柱穴は、逆台形上に4本並ぶ。南側東西列の2本の間隔が狭いほかは、ほぼ均等間隔である。柱穴は、いずれも直径50cm程度の円形掘形で、深さはP1が37cm、P2が60cm、P3が60cm、P4が65cmである。柱間は、P1・P2が2.0m、P1・P3が1.8m、P2・P4が2.0m、P3・P4が1.6mである。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。煙道部分は、平瓦を組み合わせて構築している。袖は、壁を利用して60cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。左袖の内側には、玉縁の丸瓦(8)を使用して補強とする。燃焼部は、壁をそのまま利用して作る。全長は、185cm(うち煙道部分の長さ100cm)、幅105cm、高さ35cm、燃焼部の最大幅は50cm、奥行き60cmを測る。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かい緩やかに下り、先端部分で最も深くなる。煙道部分の掘形は、上端50cm、下端35cm、深さ約20cmで、掘形より内側部分に平瓦(12・14・15・16・17・18)を横に立て白色粘土で押さえて側壁とし、その上に平瓦(13)を天井の蓋として組み合わせる。実際の煙道の規模は、長さ30cm、深さ20cm程度の横長の箱形となる。

遺物については、カマド正面の床面(床直)から体部外面に文字不明(寺の文字カ)の墨書、底部外面に「大」の線刻が見られる千葉地域産の黒褐色系の須恵器杯(1)、土師器甕(4)、南西の床面(床直)から須恵器高台付杯(2)、東側壁際の床面(+3cm)から須恵器長頸壺の口頸部(3)、カマド内より土師器甕(5・6)が出土している。瓦については、カマド煙道部出土のほかに、カマド正面の床面(床直)から平瓦(20)、中央の床面(+2cm)から隅切り瓦(19)、玉縁の丸瓦(11)、中央東側の床面から丸瓦(10)、カマド燃焼部内から支脚に使われたと思われる丸瓦(9)などが出土している。

土器の特徴 須恵器高台付杯(2)は体部内面の器面が平滑に摩耗している点、下端部分まで朱が付着していることなどから転用硯として使用されたものと思われる。須恵器長頸壺(3)は、猿投窯の折戸10号窯式並行期のものと近似している。

35号住居跡 (第229～232図、写真図版37・113・114・173・174)

遺構は、南東の尾根状台地のKR—20、30、KS—11、21区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—6°30′—Eである。形状は、東西方向に長い横長の方形状で、東西軸4.42m、南北軸3.95mを測る。住居の壁は垂直で、角は直角となる。壁高は、北壁で37cm、西壁で47cm、南壁で42cmを測る。面積は、確認面で16.98㎡、床面で15.74㎡となる。床は、ハードローンを5～10cm程度掘り込み、その上にローンブロックを主体とした暗褐色土、黒色土混合土を5～10cm程度敷き詰め、貼床とする。床面は、中央部が固く締まっているのみで、全体に軟弱である。周

溝は、カマドの位置を除いて全周する。規則性のある支柱穴は認められない。なお、南側の壁際に径30～40cm、深さ30cm程度のやや四角形状のピット(P1・P2)が壁に並列して見られるが、これは住居の出入口施設に関連した柱穴であろう。また、住居の北西隅にある直径60cm、深さ35cmのピット(P3)は貯蔵穴と考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分よりやや東に位置する。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、「U」字形の燃焼部分の下半部から80cm程度の長さで「ハ」の字状に開く。燃焼部の一部および袖は、白色粘土で構築する。カマドの全長は120cm、幅105cm、高さ25cmを測る。燃焼部分は住居外まで延び、幅約40cm、奥行き100cmで、奥壁はなだらかに立ち上がる。煙道は燃焼部と一体となっており、はっきりとした部分は認められない。

遺物については、カマド左脇の床面(床直)から土師器杯(2)、須恵器蓋(11)、南側壁際の床面(床直)から土師器杯(3)、カマド内からは土師器杯(1・8)、甕(13～16)、須恵器高台付杯(9)、覆土中から土師器杯(4～7)、甕(17)、鉢(12)、須恵器碗(10)などが出土している。このうちカマド左脇の床面から出土した土師器杯(2)は、床面に埋め込まれた状態で出土している。瓦については、カマド内から平瓦(20)、覆土中から玉縁の丸瓦(18)、平瓦(19・21・22)が出土している。このほか、南側床面(床直)からほぼ完形の刀子(23)、北西隅の床面(床直)から鉄鏃(24)が出土している。

土器の特徴 非ロクロ・ロクロ整形土師器杯が混在する。土師器杯(2)・(3)についてはロクロ整形で、静止糸切りで切り離した後、中央部を残して外周を井桁状に4回で一周するヘラケズリ、体部外面下端部分を4～6回で一周する手持ちヘラケズリで整形する。なお、土師器杯(3)は、口縁部内・外面に多量のスス・油煙が付着していることから、灯明用杯として使用したものと思われる。土師器杯(1・4～8)は底部、体部外面を幅広く削る手持ちヘラケズリで整形する平底で器高の低い杯である。土師器甕(14)については、胎土がやや白っぽく雲母粒を含み、口縁部内側および胴部外面に刷毛目調整を行うなど他地域からの搬入品である。土師器甕(17)は、武蔵型甕である。須恵器蓋(11)は、胎土に黒色粒や石英粒を含むきめの細かい白っぽいもので、東海地方からの搬入品と考える。

36号住居跡 (第233～236図、写真図版37・38・114・152・173)

遺構は、南東の尾根状台地のJR-97、KR-07区に位置する。住居は北東を向き、主軸方位はN-25°40'-Eである。形状は、北西-南東に長いやや横長の方形状で北西-南東軸3.8m、北東-南西軸3.69mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北東壁で26cm、北西壁で31cm、南西壁で35cm、南東壁で22cmを測る。面積は、確認面で13.2㎡、床面で12.6㎡となる。床は、ハードロームを5cm程度掘り込み、その上にロームブロックと暗褐色土の混合土を5～10cm程度敷き詰め、貼床としている。床面は、カマド付近を除いては所々に固い面があるのみで全体に軟弱である。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。深さは、貼床分の厚さである。柱穴については、東西の壁にかかる2本のやや楕円形のピットが該当するものと思われる。北西側のピット(P1)は長軸45cm、短軸35cm、深さ59cm、南東側のピット(P2)は長軸42cm、短軸35cm、深さ56cmである。住居南側には1m×0.6m程度の粘土塊が床面に貼り付いた状態で検出されている。

カマドは北東方向で、北側壁の中央部分よりやや西に位置する。カマド自体は、住居主軸から6°30'程度西に傾いている。壁を利用して燃焼部を構築し、袖は60cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、165cm(うち煙道部分の長さ100cm)、幅95cm、高さ20cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約50cm、奥行き65cmで、垂直な奥壁を持つ。両袖の内側はよく焼けており、長期間にわたり使用したものと思われる。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約15cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに下り、先端部分でピット状に深くなる。先端部分の奥壁は垂直に立ち上がる。煙道の幅は上端で30cm、

下端で15cm、深さは先端で25cmを測る。

遺物については、カマド左脇の床面(床直)から土師器杯(1)、カマド正面の床面(床直)から土師器甕(10)、南西隅壁際の床面(床直)から暗褐色系の須恵器甕(9)、覆土中から土師器杯(2)、須恵器杯(4)、黄茶褐色系の須恵器杯(3)、土師器甕(5～8・11)、須恵器甕(12・13)が出土している。瓦については、中央床面(床直)から平瓦(15)、均整唐草文様の軒平瓦(14)、カマド正面の床面(+2cm)から平瓦(16・18)、格子目タタキの平瓦(17)が出土している。そのほか、北西側床面(床直)より鉄製紡錘車の紡輪部(19)および軸部(20)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、平底で体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する非ロクロの杯が主体的に見られる。須恵器杯(3)については千葉地域産のものである。土師器甕(9)は口縁部の形状などから下総系統の甕と考えられる。

39号住居跡 (第237・238図、写真図版38・114・172・175・177)

遺構は、南東側の尾根状台地部分のJ R-82、83、92、93区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN-3°00'-Eである。形状は、西側が短い不整形な隅丸方形状で、北側壁がカマド部分より外側に丸みをもって張り出す。規模は、東西軸3.5m、南北軸3.45mを測る。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は、北壁で32cm、西壁で36cm、南壁で37cm、東壁で34cmを測る。面積は、確認面で11.55㎡、床面で10.72㎡となる。床はハードロームを5～10cm程度掘りくぼめ、その上にローム土と暗褐色土の混合土を5～10cm程度敷き詰め貼床としている。床は、カマド付近が固いのみで全体的には軟弱である。周溝は、貼床の厚さだけの深さで、カマドの位置を除いて全周する。柱穴は、床面には認められない。住居南側隅の外側に2本のピットが見られるが、この住居の柱穴ではない。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分よりやや東に位置する。壁をそのまま利用して燃焼部を構築する。袖は、壁から60cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、150cm(うち煙道部分の長さ95cm)、幅90cm、高さ20cmを測る。燃焼部分は、最大幅約60cm、奥行き55cmで、8cm程度掘りくぼめた火床を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約15cm高い位置で、そこから先端に向かい緩やかに立ち上がる。先端部分でピット状に掘りくぼめる。煙道の幅は、上端で30cm、下端で15cm、深さは先端で15cmを測る。煙道先端右側の楕円形のピットは、煙道を壊して作られていることから直接関係はない。

遺物については、カマド正面の床面(床直)から土師器甕(5)、須恵器甕の胴部片(6)、カマド内から土師器甕(4)、南側の床面(+1.5cm)から凝灰岩製の砥石(7)、覆土中から土師器杯(1～3)、凝灰岩製砥石(8)、平瓦(7)、中央西側床面(床直)から摘鎌(10・11)、西側壁際床面(床直)から鉄製鎌(12)、鉄釘(13)などが出土している。なお、中央南側の床面(床直)から石製紡錘車出土しているが、遺物が行方不明のため図示し得なかった。

土器の特徴 土師器杯については、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する非ロクロ杯が主体的である。土師器杯(1・2)の内面と底部との境目には明瞭な段が見られる。土師器杯(3)は体部がやや内彎する椀に近い器形である。

40号住居跡 (第239～243図、写真図版38・114・115・172～177・179)

遺構は、南東側尾根状台地部分で36号住居跡の北西部分J R-85、86、95、96区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN-5°00'-Wである。形状は、東西方向が長い横長の隅丸方形状で、北側壁がカマド部分より外側に丸みをもって張り出す特異な形状である。規模は、東西軸4.47m、南北軸3.64mを測る。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は北壁で39cm、西壁で43cm、南壁で40cm、東壁で34cmを測る。面積は、確認面で15.57㎡、床面で14.35㎡、内区で4.2㎡となる。床はハードロームを10cm程度掘りくぼめ、その上にロームブロックと暗褐色土の混合土を10cm程度敷き詰め貼床としている。床は、全体的に軟弱である。周溝は、貼床の厚さだけの深さで、カマドの位置